

第86图 B地区 366-OP、384,2265-OO·C地区 172,173-OO、291-OO出土遺物実測図

C-2265-00 (第86図)

黒色土器がある。

黒色土器 黒色土器には、碗、鉢がある。全て内面を黒色化するA類である。

碗 (25) 底部破片で、底径が大きい。

鉢 (26) 復元口径20.4cm、体部から口縁部にかけて内湾する。口縁端部外面も黒色化する。片口をもつ。内外面、磨滅のため調整と不明である。

小結

(1) 供膳形態は、黒色土器と土師器とで占められる。黒色土器は「碗」、土師器は「皿」である。杯類は、一点も存在しない。黒色土器碗は、A類のみの遺構 (B-366-OP384-00、C-172-00)、A・B類で構成される遺構 (C-173-00)、B類のみのもの (C-291-00) がある。B類の碗(19)は、内外面共に極めて丁寧にヘラミガキ調整されており、A類の碗の様に、体部外面指おさえ調整(16)や軽いケズリ調整ののちヘラ磨き調整(15)するものとは、様相がちがう。ただ、体部内外面調整の違う土器は、同時期に投棄された同一土壌内より、一括して出土する。皿は土師器で占められ、大、小2種類存在するが、数量的には、口径9cm前後、器高2.4cm前後の小皿が圧倒的に多く、大皿は極めて微量である。小皿の形態は、口縁部のナデ調整の施し方によってバラエティをもつ。

(2) 煮沸形態は、土師器甕、羽釜がある。B-366-OPからは、甕、羽釜が相伴して出土した。羽釜は、観音寺遺跡SK-01と同一形態をもつ。

(3) 貯蔵形態は、出土しない。

(4) 調理形態は、黒色土器鉢がある。泉州においては出土例は少ない。

各遺構は、やや時期幅をもつものの10世紀後半から末葉段階と考えられる。

(渋谷・小谷)

第4節 平安時代後期～鎌倉時代

本遺跡の中心となる時期で、質、量共に豊富である。各地区で遺構にともなって遺物が出土する。出土遺物は、11～14世紀にかけてのものである。和泉地方で最も古いと考えられる11世紀中～後半にかけの外削り調整をもった瓦器碗は、D地区原池低湿地包含層のJ層より、12世紀～13世紀前半にかけての遺物に混在して、完形で出土した。12世紀代の遺物は、D地区原池低湿地包含層のJ層や250-OXより出土する。包含層、或は遺構の性格上、やや時期幅をもつ。12世紀後半から13世紀前半にかけての遺物は、本遺跡の盛期

に該当するため、質・量先にゆたかである。A西、B、D各地区で、遺構にともなり、多量に出土する。13世紀中葉以降、14世紀にかけては、D地区からのみ、限定して出土する。

1. A西地区

A西地区からは、掘立柱建物、土壇、溝などから遺物が出土した。

a. 掘立柱建物

A西-01-OB (第92図)

瓦器、土師器がある。これらは柱穴から出土したもので、大半が小破片である。瓦器には、椀、皿があり、図示できたものは、A西-505-OP出土の瓦器皿(160)のみである。器肉は、比較的厚く、外面ナデ調整、内面ヘラミガキ調整を施す。土師器には、図示できたものはないが、小皿と羽釜があり、これら出土土器は、13世紀前半に比定できるものである。

A西-02-OB (第92図)

瓦器、土師器がある。これらは、柱穴内から出土したものである。瓦器は全て椀で、図示できたものは、A西-386-OP出土のもの(161、162)のみである。外面にはヘラミガキ痕が残る(162)。土師器は、小皿と羽釜があり、図示できたものは、A西-404-OP出土の羽釜(163)のみである。口縁部は外反し、鏝は水平にのびる。内外面ナデ調整を施す。本建物出土遺物は、その特徴から、13世紀前半と考えられる。 (岡本)

b. 土壇

土器溜り (第92図)

土器溜りでは、約550片の土器片検出しているが、そのうち85%を瓦器が占める。瓦器は、椀が多く、完形もしくは器形を推定し得るまで復元できるものは約20点を数える。しかし、歪みの顕著なものもあり、そのうち12点を図化した。整形、調整の技法はすべて同様で、外面には指オサエ痕が明瞭に残り、内外面ともナデ仕上げの後に軽い疎なヘラミガキを施している。内面底部のヘラミガキは、器壁の磨滅が著しく不明瞭なものが多いが確認できるものでは斜格子状ヘラミガキがあり、また、独立したヘラミガキを施さないものもある。口辺部の横ナデは比較的強く、11、12のように口辺がや外反気味になるものも認められる。焼成は概して不良である。以下、法量を口径、器高、高台径の順で記す。164(16.1cm・5.6cm・4.5cm)、165(16cm・5cm・4.7cm)、166(15.4cm・4.8cm・4.7cm)、167(15cm・4.9cm・5.3cm)、168(15.6cm・4.8cm・5cm)、169(14.4~15.5cm・4.9cm・4.7cm)、170(15.6cm・5.1cm・4.5cm)、171(15.6cm・高台欠損)、172(16cm・4.7cm・5.4cm)、173(16.

2cm・4.6cm・5cm)、174(14.6cm・4.7cm・4.7cm)、175(14.6cm・高台欠損)

瓦器小皿の数は少ない。整形・調整は碗に類似し、器形では底部がやや平坦なもの、全体にカーブを描くものがある。176は、口径9.5cm・器高2.3cm、177は、9.3cm・2.1cm、178は10.1cm・2.4cm、179は、9.6cm・器高不明、180は、10.1cm・器高不明、181は、9.5cm・1.8cmである。

土師器の点数はわずかであるが、その大部分は羽釜である。182は口径約25.2cmを測り口縁部はくの字状に外反する。口辺部外面はナデ調整、内面は磨滅のため判然としないがヘラケズリの痕跡が残っている。胎土は密、焼成は良好で、淡黄色(2.5Y R8/3.5)を呈する。残存部位にはススの付着はない。

A西-157-〇〇 (第92図)

185は瓦器碗である。外面は指オサエ痕が残り、横方向の疎なヘラミガキを施す。内面は、不定方向のヘラミガキを施している。胎土は密で、焼成は良好である。口径約16.5cm 器高5cm、高台径5.3cmを測る。

A西-188-〇〇 (第92図)

188は、土師器羽釜である。口縁部は短く外反している。磨滅が著しく調整は不明であるが、口辺部内外はナデ調整と考えられる。復元口径25.4cm。外面淡黄色(2.5T R8/4)内面浅黄橙色(7.5Y R8/4)を呈する。

A西-227-〇〇 (第92図)

183は瓦器碗である。外面は指オサエ痕のみで、ヘラミガキは認められない。内面のナデは粗く、体部は疎な横方向ヘラミガキ、底部には平行ヘラミガキを施している。歪みが顕著で正確な法量は確定しがたいが、口径は約14.3cm、器高は約4.7cmである。

A西-350-〇〇 (第92図)

187は土師器台付皿である。外面灰黄色(2.5Y R6/2)、内面にぶい黄橙色(10Y R6/3)を呈する。台部の底径5.6cm、高さ1.5cmを測る。(宮野)

A西-377-〇〇 (第93図)

本土壌は、遺構の説明でも記したようにA・B・Cの3土壌から形成されている。遺物は各土壌からそれぞれ出土するが、時期差は全く認められない。遺物の出土量はA土壌が最も多く、しかも一括廃棄された状態で出土していることから、単一時期の好資料と考えられる。以下、A土壌出土遺物を中心に記す。

出土遺物には瓦器と土師器がある。

瓦器 瓦器には、椀、皿、鉢がある。

椀（198～205） 口径15.5cm、器高5cm前後を測る。口縁部の内外面はヨコナデ、体部外面は指おさえによる調整を施し、その後に内外面とも乱方向のヘラミガキを施す。高台部は断面四角形のものと同三角形のものがあり、205は炭素の吸着がうすく、口縁部のみ認められない。

皿（193～196） 口径8.5cm、器高2.0cm前後を測る。口縁部の内外面は、ヨコナデ調整を施す。体部内面はナデ調整を施すものが多いが、195の内面にはヘラミガキが施されている。194、196の口縁部には重ね焼きの痕跡が認められる。

鉢（206） 半球形の体部に高台を付した片口の鉢がある。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は指おさえの後、荒いヘラミガキを施す。体部内面上位はヘラミガキ、下位から底部にかけてはナデ調整を施す。なお、本個体のみB土壌出土である。

土師器 土師器には、大皿、小皿、羽釜がある。

大皿（197） 杯に近い形態で比較的深いものである。口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整を施し、外面には指頭圧痕が残る。

小皿（189～192） 口径8.5cm、器高1.5cm前後を測る。底部外面は無調整で、他の部分はナデ調整を施す。

羽釜（207～211） 扁球形の体部に外反する口縁部をもつ。鏝は水平にのびるものが大半であるが、211は外上方にのびる。口縁部の内外面はヨコナデ調整を施し、209、210の体部外面にはヘラケズリが施されている。208の体部内面には、ハケ目調整、他のものはナデ調整を施す。

以上、A西-377-〇〇出土遺物は、形態及びその特徴から13世紀前半の年代観が与えられよう。

（岡本）

c. 溝

A西-33-〇S（第92図）

186は瓦器椀である。磨滅のため遺存状況は悪く、外面は指オサエ痕が残るのみである。内面は横方向を基調とするヘラミガキを施している。口径16.5cm、器高6.45cm、高台径4.6cmを測る。

A西-231-〇S（第92図）

160は瓦器小皿である。外面に指オサエ痕が残るほかは、磨滅で不明。口径8.2cm、器高1.4cmを測る。

（宮野）

2. B地区

B地区から検出された掘立柱建物や土壇、瓦器窯、溝等より12世紀後半から13世紀前半にかけての遺物が出土した。12世紀後半の遺物は、3-OB、229-OOの各遺構より出土した。他の遺構出土遺物は、13世紀前半と考えられる。

a. 掘立柱建物、ピット群

B-3-OB (第89図)

B-3-OBを構成する柱穴B-160、168、176、247、234、239-OPから遺物が出土した。これらの柱穴から出土した遺物には、瓦器、土師器、白磁がある。白磁は、B-221-OPから出土したが、小破片である。

瓦器 瓦器には、椀、皿がある。

椀 (59、63~67、71、72) 瓦器椀には、B-160-OP (59)、168-OP (63~65)、176-OP (66~67)、234-OP (71)、239-OP (72)出土のものがある。71、72は底部の破片で、平らな底部に断面台形を呈す高台がつくもの(72)と断面三角形を呈す高台がつくもの(71)がある。その他は口縁部の破片である。口縁部は一回のヨコナデを施し、外反気味に上外方にのびるものが大半であるが、二回のヨコナデを施すもの(63)がある。63、67は端部付近が外側に開く。口縁端部はすべて丸く仕上げる。出土遺物は、遺存状態が悪く、調整等が明瞭に分かれるものは少ない。

皿 (58) 皿は、B-160-OP出土のものがある。口縁部は、外面に一回のヨコナデを施すことにより外反気味に上外方にのびる。口縁端部は丸く仕上げる。口縁部内面はナデ調整である。

土師器 土師器には、皿、羽釜がある。

皿 (60~62、69、70) 皿には、口径7.0~9.0cm前後を測る小皿がある。小皿はB-168-OP (60~62)、247-OP (69、70)から出土した。底部が残るものは62のみで、比較的平坦な底部である。口縁部は、外面に一回のヨコナデを施すことにより外反気味に上外方にのびるもの(61、62)とやや内弯気味に上外方にのびるもの(69)と直線的に上外方にのびるもの(60、70)がある。端部はすべて丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、内面はナデ調整を施し、口縁部外面は一回のヨコナデ、内面はナデ調整である。色調には、橙色(7.5 Y R 6/6、5 Y R 6/6)のもの(60、69)、浅黄橙色 (10 Y R 8/3)のもの(61)、にぶい黄橙色 (10 Y R 7/4)のもの(62)、灰黄褐色 (10 Y R 6/2)のもの(70)がある。

羽釜 (68) 羽釜は、B-221-O Pから出土した。口縁部は、内弯気味に内傾した後「く」字形に外反する。端部は丸く仕上げる。口縁部内外面の調整はナデ調整で、外面に口縁端部から下1.5cm前後に横ナデを施す。

B-ピット群1出土遺物 (第89図)

B-3-O B付近で多数のピットを検出した。そのピット群の中には、B-3-O Bに関係するピットも存在すると考えられる。出土遺物には瓦器、土師器がある。

瓦器 瓦器には、椀、皿がある。

椀 (74~78、81~90、93、94~97、101、102) 瓦器椀には、B-175-O P (74~76)、216-O P (77)、177-O P (78)、174-O P (81~84)、205-O P (85~86)、206-O P (87~90)、212-O P (93)、195-O P (94~97)、254-O P (100)、226-O P (102)出土のものがある。底部は比較的平らで、断面台形を呈する高台がつくもの(77、81、84、87、88、93、101、102)と断面三角形を呈する高台がつくもの(74、97)がある。体部は内弯気味に上外方にのびる。口縁部は外面に一回のヨコナデを施すことにより、外反するもの(82、89、102)と外反して口縁端部付近が外側に開くもの(83、90)と比較的直線に上外方にのびるもの(75、76、78、85、86、93~96)がある。口縁端部はすべて丸く仕上げる。体部外面は指押さえ、体部から口縁部外面にかけてヘラミガキを施すもの(84、85、94、95、102)がある。内面側壁には比較的荒いヘラミガキを施すが、102は、見込み部分にかけて緻密なヘラミガキを施す。

皿 (79、92) 皿に口径9.0cm前後の小皿がある。小皿にはB-174-O P (79)、212-O P (92)出土のものがある。底部は丸味をもち、口縁部に一回の強い横ナデを施すことにより大きく外反する口縁を有すもの(92)と一回のヨコナデを施すが、直線的に上外方にのびるもの(79)がある。底部外面は指押さえ、口縁部外面は横ナデを施す。内面はナデ調整であるが、92は荒いヘラミガキが観察できる。

土師器 土師器には、皿、羽釜がある。

皿 (73、99、100) 皿には口径9.0cm前後の小皿がある。小皿にはB-175-O P (73)、156-O P (99、100)出土のものがある。底部は比較的丸味をもち、直線的に上外方にのびる口縁を有す。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面はヨコナデを施す。内面はナデ調整である。

羽釜 (98) 羽釜はB-195-O Pのものがある。口縁部は内弯気味に内傾した後「く」字形に外反する。端部は平面を成す。口縁部内外面の調整はナデ調整で、外面は、口縁端

部下から2.0cm前後に横ナデを施す。

B-4-OB (第89図)

B-4-OBを構成する柱穴で、B-288-OPから瓦器が出土した。

瓦器 瓦器には碗がある。

碗(91) 体部は内弯気味に口縁部に続き、口縁部は直線的に上外方にのびる。端部は丸く仕上げる。体部外面は指押え、口縁部外面に一回の横ナデを施す。内面の測壁は荒いヘラミガキを施す。

B-10-OB (第90図)

B-10-OBを構成する柱穴で、B-1510-OPから瓦器、土師器が出土した。

瓦器 瓦器には、碗、皿がある。

碗(107~110) 口径14.0~15.8cm、器高4.7~5.4cmを測る。底部は平らで、「ハ」字形に開く高台がつくもの(107)と断面台形を呈す高台がつくもの(109~110)がある。体部は、内弯して口縁部に続き、口縁部は、一回の強いヨコナデを施すことにより外反し、端部付近が外側に開くもの(107)と、比較的直線的に上外方にのびるもの(108~110)がある。口縁端部はすべて丸く仕上げる。調整が明瞭に観察できるものは110のみで、二次的に火を受け、赤色化しているもの(108、109)がある。109は体部外面指押さえで、口縁部外面は一回のヨコナデを施す。体部外面から口縁部外面にかけてヘラミガキが観察できる。内面側壁は荒いヘラミガキ、見込み部分には雑な平行線のヘラミガキを施す。

皿(103、104) 皿には口径8.6~8.8cm、器高2.1cm前後を測る小皿がある。やや丸味をもつ底部に一回の強いヨコナデを施すことにより外反する口縁部がつくもの(104)と内弯気味に上外方にのびる口縁部がつくもの(103)がある。端部は丸く仕上げる。体部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデを施す。内面には荒いヘラミガキを施す。

土師器 土師器には、皿、羽釜がある。

皿(105、106) 皿には口径14~15cm程度、器高3.5cm程度を測る大皿がある。丸味をもつ底部から直線的に上外方にのびる口縁部を有するもの(106)とやや外反する口縁部を有するもの(105)がある。口縁端部はすべて丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデを施すもの(105)と二回のヨコナデを施すもの(106)がある。内面はナデ調整である。

羽釜(111) 復元口径13.4cmを測る。体部は丸味をもち、体部の最大径は、ほぼ中位にあるものと考えられる。鏝は欠損しており不明である。口縁部は内傾し、端部は平面を

成す。体部外面は、磨滅が著しく調整は不明、内面はナデ調整である。口縁部外面に一回のヨコナデを施す。内面はナデ調整である。

B-ピット群2 (第90図)

B-410-OPからは、土師器が出土した。

土師器 土師器には、皿がある。

皿 (112~123) 皿には口径8.5~9.1cm程度、器高1.5~1.8cm程度を測る小皿がある。比較的平らな底部に内弯気味に上外方にのびる口縁部を有すもの(112、113)、外反気味に上外方にのびるもの(114~119)、一回の強いヨコナデを施すことにより大きく外反する口縁部を有するもの(120~123)がある。口縁端部はすべて丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデを施す。内面はナデ調整である。

B-ピット群5 (第90図)

B-1013、1017、1022-OPから瓦器が出土した。

瓦器 瓦器には、碗がある。

碗 (124~128) 碗はB-1013-OP(127)、1017-OP(124)、1022-OP(126、128)出土のものがある。平らな底部に断面台形を呈する高台がつくもの(128)と断面三角形を呈する高台がつくもの(127)がある。体部は内弯気味に上外方にのびるもの(124)がある。口縁部は直線的に上外方にのび、端部は丸く仕上げるもの(124、125)がある。体部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデを施す。口縁部外面付近には、若干のヘラミガキが観察できるもの(125)がある。内面側壁には荒いヘラミガキを施す。

B-ピット群6 (第90図)

B-1785、1708-OPから瓦器が出土した。

瓦器 瓦器には、碗がある。

碗 (129、130) 碗はB-1785-OP(128)、1708-OP(129)のものがある。平らな底部に断面台形を呈する高台がつくもの(130)と断面三角形を呈する高台がつくもの(129)がある。体部は内弯気味に口縁に続くもの(129)と直線的に口縁に続くもの(130)がある。130の口縁部は直線的に上外方にのび、端部は丸く仕上げる。体部外面は指押さえ、口縁部外面にヨコナデを施す。体部から口縁部外面にかけて若干のヘラミガキを施す。内面側壁は荒いヘラミガキ、見込部分にも荒いヘラミガキを施す。

b. 土壙

B-229-OO (第94、95図)

B-229-〇〇からは、瓦器、土師器、青磁が出土した。

瓦器 瓦器には、椀がある。椀は破片数にして500片出土した。

椀 (216~220) 口径は14.7~15.4cmで、器高は5.3cm前後を測るもの(216~218)と器高4.3~4.8cm前後を測るもの(219、220)がある。平らな底部に断面台形を呈する高台がつく。高台は「ハ」字形に開くもの(216、217、219)と垂直に下るもの(218、220)がある。高台径は4.3~4.9cmを測る。体部は内弯気味に口縁部に続く。口縁部は強く外反するもの(216)、直線的に上外方にのびるもの(219)、口縁端部付近が短く外側に開くもの(217、218、220)がある。口縁端部は丸く仕上げる。底部と高台の接合部分はヨコナデ、体部外面は3段に分けて指押さえを施す。口縁部外面は一回のヨコナデを施すもの(217、220)と二回のヨコナデを施すもの(216、218、219)がある。217~219は、体部から口縁部外面にかけて若干のヘラミガキを施す。内面側壁のヘラミガキは、粗く見込み部分に平行線のヘラミガキをもつもの(216、217)がある。

土師器 土師器には、皿と羽釜がある。

皿 (212~215) 皿には口径8.4~9.3cm前後、器高1.6~1.8前後を測る小皿(212、213)と口径13.0~14.0cm前後、器高3.2~3.4cm前後を測る大皿(214、215)がある。小皿は丸味をもつ底部に直線的に上外方にのびる口縁部を有するもの(212)と一回の強いヨコナデを施すことにより大きく外反するもの(213)がある。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面に一回のヨコナデを施す。内面はナデ調整である。大皿は平らな底部から直線的に上外方にのびる口縁部を有す。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面から口縁部外面にかけて指押さえ、口縁部外面に一回のヨコナデを施す。内面はナデ調整である。

羽釜 (222~225) 口径19.9cmを測るもの(222)と25.8~28.0cmを測るもの(223~225)がある。丸味をもつ体部に水平もしくは、やや上外方にのびる鏝を有し、鏝の端部は、面もしくは、凹面を成す。器高の約2分の1に体部の最大径がくるものと考えられる。口縁部は「く」字形に屈曲し、端部は面を成す。体部外面は、ヘラ削りというより、板状工具によるナデ調整と考えられる。口縁端部から下2cm程度に横方向のナデを施す。内面はナデ調整である。

青磁 青磁には、碗がある。

碗 (221) 高台径5.0cmを測る。高台部外面垂直、内面は傾斜をもち、断面は台形である。外底面の削りは、高台部外面の高さとほぼ等しい。体部は、底部から内弯気味に上外方にのびる。釉色は淡い緑色である。

砥石（226～228） 砂岩製の砥石である。226は、上面、下面、左側面に作業面を有し、上面が最も使用痕が著しく、外弯する作業面をもつ。227は大半が欠損し、上面にわずかの作業面を残す。228は、上面、下面、左側面、右側面に作業面をもつ。

B-1610-〇〇（第95図）

B-1610-〇〇からは、瓦器が出土した。

瓦器 瓦器には、碗、皿がある。

碗（230） 体部は内弯して口縁部に続き、やや外反気味に上外方にのびる口縁部を有す。口縁端部は丸く仕上げる。体部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデを施す。内面側壁は粗いヘラミガキを施す。

皿（229） 皿には、復元口径7.8cmを測る小皿がある。平らな底部に上外方に直線的にのびる口縁部を有し、口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデ、内面には粗いヘラミガキを施す。

B-1746-〇〇（第95図）

B-1746-〇〇からは、瓦器、土師器が出土した。

瓦器 瓦器には、碗、皿がある。

碗（232～235） 平らな底部に断面三角形を呈する高台がつくもの(232)と平らな底部に断面台形を呈する高台がつくもの(233)がある。体部は内弯気味に口縁部に続き、やや外反する口縁部を有す。端部は丸く仕上げる。体部外面は指押さえ、口縁部外面は、一回のヨコナデを施す。体部外面から口縁部外面にかけて若干のヘラミガキを施す。234は、内面側壁に粗いヘラミガキを施す。235は内外面とも炭素が付着しておらず赤色化しており、232は炭素がまったく付着していない。

皿（231） 皿には復元口径8.8cmの小皿がある。やや丸味をもつ底部に、一回のヨコナデを施すことにより外反する口縁部がつく。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデを施す。内面はナデ調整である。

羽釜（236） 復元口径20.4cmを測る。上外方にのびる鑊がつき、端部は面を成す。体部は内弯して、「く」字形に屈曲する口縁部がつく。口縁端部は丸く仕上げる。体部外面は板状工具によるナデと考えられ、口縁部外面はヨコナデを施す。内面はナデ調整である。

B-292-〇〇（第96図）

B-292-〇〇からは、瓦器、土師器が出土した。

瓦器 瓦器には、碗がある。

碗 (238～239) 239は口径14.8cm、器高4.8cmを測る。丸味をもつ底部に断面三角形を呈する高台のつくもの(238)と平らな底部に断面三角形を呈する高台のつくもの(239)がある。高台径は5.2～5.8cmを測る。体部は内弯し、外反して上外方にのびる口縁部がつく。口縁端部は丸く仕上げる。底部と高台の接合部分はヨコナデ、体部外面は3段に分けて指押さえを施す。口縁部外面は一回のヨコナデで仕上げる。内面側壁は粗いヘラミガキ、見込み部分のヘラミガキは、238が平行線、239も平行線と考えられる。239は内外面とも炭素が付着しておらず、遺存状態は悪い。

土師器 土師器には、皿、羽釜がある。

皿 (237) 皿には口径10cm、器高2.3cmを測る小皿がある。丸味をもつ底部に一回の強いヨコナデを施すことにより外反して上外方にのびる口縁部を有す。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデで仕上げる。内面はナデ調整である。

羽釜(240～245) 羽釜には、口径18～20cm前後を測るもの(240、241)と口径25.2～29.6cm前後を測るもの(242～245)がある。前者は、やや上外方にのびる罫がつき、内弯する体部に「く」字形に短く屈曲する口縁部をもつもの(240)と水平方向にのびる罫がつき、直線的に内傾する体部に緩やかに上外方に折れ曲がる口縁部をもつもの(241)がある。口縁端部は、240は平面を成し、241は丸く仕上げる。罫端部は、240は凹面を成し、241は丸く仕上げる。後者は、水平方向あるいは、やや上外方にのびる罫がつき、内弯する体部に「く」字形に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部は、上下にやや肥厚し平面を成すもの(243、244)と平面を成すもの(242)と丸く仕上げるもの(245)がある。罫端部は、平面を成すもの(244)、凹面を成すもの(243、245)、丸く仕上げるもの(242)がある。体部外面は板状工具によるナデと考えられ、口縁部外面はヨコナデ、体部内面はナデ調整である。羽釜には、外面に煤が付着していない、未使用品と考えられるものが多く出土した。

B-296-〇〇 (第97図)

B-296-〇〇からは、瓦器、土師器がある。

瓦器 瓦器には、碗、皿がある。

碗 (248～255) 口径は14.4～15.6cm、器高は4.9～5.7cmを測る。底部は比較的平らであるが、丸味をもつもの(252)もある。高台は、細めの断面台形のもの(248、254)、しっかりした断面台形を呈する高台がつくもの(250～253、255)、断面三角形を呈する高台がつくもの(249、250)がある。高台径は4.6cmのもの(248)以外は、すべて5.1～5.7cmを測る。体部は内弯気味で、やや外反する口縁部を有す。口縁端部は丸く仕上げる。底部と高台の

接合部分はヨコナデ、体部外面は3～4段に分けて指押さえを施す。口縁部外面は二回のヨコナデを施すもの(254)以外は、一回のヨコナデを施す。体部外面から口縁部外面にかけて明瞭にヘラミガキが観察できるもの(248、250、252、254、255)がある。内面側壁、見込み部分のヘラミガキは粗い。B-296-〇〇出土の瓦器碗は、遺存状態が全体的に悪く、まったく炭素が付着していないもの(249、251)がある。

皿(246～247) 皿には口径8.6～9.2cmを測る小皿がある。比較的平らな底部に一回の強いヨコナデを施すことにより外反する口縁部を有すもの(246)と丸味をもつ底部にやや外反気味の口縁部を有すもの(247)がある。口縁端部は丸く仕上げる。底外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデを施す。内面はナデ調整を施す。

土師器 土師器には、皿、羽釜がある。皿は12片出土したが、すべて小破片である。

羽釜(256～261) 口径22.4cmのもの(256)と24～26cmのもの(257～261)がある。形態は4種類ある。上外方にのびる鐙を有し、内弯気味な体部に、ヨコナデによりやや外反気味に上方にのびる口縁部をもち、口縁端部は平面を成すもの^①(256)、水平方向にのびる鐙を有し、内弯する体部に短く直立する口縁部をもち、口縁端部は少し肥厚し凹面を成すもの^②(257)、水平方向にのびる鐙を有し、内弯する体部に「く」字形に短く屈曲する口縁部をもち、口縁端部は、丸く仕上げるかもしくは、平面を成すもの(258、259、261)^③、やや下外方にのびる鐙を有し内傾する体部に「く」字形に短く屈曲する口縁部をもち、口縁端部は上下に肥厚し、平面を成すもの(260)がある。256は、口縁端部から下1.5cm前後に凹線が1条巡る。鐙から下体部外面は大半が欠損しているものの、板状工具によるナデ調整と考えられる。内面はナデ調整である。口縁部はナデ調整で、口縁端部から下2cm程度にヨコナデを施す。

B-302-〇〇(第98図)

B-302-〇〇からは、瓦器、土師器、須恵器が出土した。須恵器は小破片で甕の体部である。

瓦器 瓦器には、碗、皿がある。

碗(271) 平らな底部に断面台形を呈する高台がつく。復元高台径は、5.4cmを測る。内外面は炭素は付着しておらず、見込み部分のヘラミガキは不明である。

皿(268～270) 皿には口径7.2～7.6cm、器高1.4～1.8cmを測る小皿がある。丸味をもつ底部に、一回のヨコナデにより外反する口縁部を有すもの(268)と直線的に上外方にのびるもの(269、270)がある。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面に粗いヘラミガキを施す。

土師器 土師器には、羽釜がある。

羽釜 (272~276) 羽釜には、口径21cm程度のもの(272)、口径25cm程度のもの(273、274)、口径32.6cmのもの(276)がある。水平方向あるいは、やや上外方にのびる鏝がつき、内弯する体部に「く」字形に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部は、面を成すもの(272、274、276)と丸く仕上げるもの(273)がある。鏝端部は凹面を成す。体部外面は板状工具によるナデ調整と考えられ、口縁部内外面ともヨコナデで仕上げる。体部内面はナデ調整である。羽釜には、B-292-O-O同様、外面に煤が付着していない、未使用品と考えられるものが多く出土している。

B-304-O-O (第98図)

B-304-O-Oからは、瓦器、土師器が出土した。

瓦器 瓦器には、椀、皿がある。

椀 (263~267) 口径15.1~16.0cm、器高4.8~5.2cmを測る。平らな底部に断面台形を呈する高台がつくもの(264~266)と断面三角形を呈する高台がつくもの(267)がある。体部は内弯し、口縁部は直線的に上外方にのびる。口縁端部は丸く仕上げる。底部と高台の接合部分はヨコナデ、体部外面は3段に分けて指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデを施す。内面側壁は粗いヘラミガキを施す。B-304-O-O出土の瓦器椀は遺存状態が悪く、見込み部分のヘラミガキは不明である。

皿 (262) 皿には口径8.8cm、器高1.7cmを測る小皿がある。平らな底部に一回のヨコナデにより、やや外反する口縁部がつく。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデにより仕上げる。口縁部内面はナデ調整、底部内面は粗いヘラミガキを施す。

土師器 土師器には、皿、羽釜があるが、小破片のみである。

B-1028-O-O (第99、100図)

瓦器、土師器がある。

瓦器 椀、皿、鉢、鍋、羽釜がある。

椀 (284~309) 椀は、丸みをおびた底部や平坦な底部、断面台形を呈する高台をつけ、体部から口縁部にかけては内弯して立ち上がる。見込みから口縁部外面、高台接合部にかけてはナデ調整され、体部外面は、2~3段わたって指おさえ調整される。体部外面は、指おさえ調整によってできた凸部にわずかにヘラミガキ調整を施すものと施さないものがあり、内面は、見込みと側壁の区別なく太い3mm前後のミガキ調整を間隔を荒く施す。口

径15～16cm、器高5cm前後、高台径4.5cm前後を測る。器壁は薄い。全体に焼成状態は悪く、土師器焼成の椀が存在する。

皿(310～312) 丸みをおびた底部に口縁部がつく。内外面にミガキ調整はない。

鉢(319) 平坦な底部に、「ハ」字形にひろくしっかりした高台をつけ、体部から口縁部にかけては内弯しながら立ち上がり、口縁部は、わずかに外反する。内外面ナデ調整をおこなう。体部内面上位に瓦器弯高台跡が存在する。鉢は、土壌内部で別破片として出土したが、のち接合した。土壌内部の検出状態によって、片方は土師器の焼成であり、片方は、瓦器の焼成で炭素が付着しない。焼成温度の違いが土壌内部で生じている典型的な例である。口径21.3cm、器高11.6cm、高台径9.2cmを測る。

鍋(317、318) 内弯する体部に、外反する口縁部をつける。口縁部と体部の境界は、不明瞭なもの(318)と明瞭なもの(317)がある。内外面ナデ調整をおこなう。土師器に同一形態が存在する。

羽釜(321) 内弯する体部に直立する口縁部をつけ、体部上位に水平にのびる鏝をつける。内外面ナデ調整をおこなう。瓦器の焼成であるが、土師器に同一形態(322)が存在する。復元口径30.2cmを測る。

土師器 皿、羽釜、鍋がある。

皿(313、314～316) 大、小の皿がある。大皿(314～316)は、口径16～16.2cm、器高3.3～4cmを測り、平坦な底部に直線的に外上方にのびる口縁部を有するもので、口縁部をナデ調整、体部外面は指おさえ調整をおこなう。小皿(313)は、口径10cm、器高2.2cmを測り、内底面から口縁部内外面ナデ調整、底部指おさえ調整をおこなう。口縁部のゆがみが目立つ。

羽釜(322) 321、322共に口縁端部以外同一形態を示すが、322は、瓦器の焼成である。322は、体部上半に鏝をつけ、口縁端部は明瞭に屈曲する。体部内外面から口縁部にかけては、ナデ調整をおこなう。

鍋(320) 復元口径38.8cmを測る。体部は直線的に外方向にのび、口縁部は、明瞭に屈曲する。内外面ナデ調整をおこなう。体部外面には煤の付着がある。

B-1029-00(第98図)

B-1029-00からは、瓦器、土師器が出土した。

瓦器 瓦器には、椀、壺がある。

椀(279) 平らな底部に、断面台形を呈する高台がつく。高台径は4.4cmを測る。内外

面とも炭素は付着していない。

壺 (283) 口径14.8cm、残存高20.4cmを測る。底部は平らで、内弯する体部に「く」字形に短く屈曲する口縁部がつく。口縁端部は丸く仕上げる。体部外面はヘラ削りの後ナデ調整、口縁部から頸部にかけては横ナデを施す。体部内面はヘラ削りである。

土師器 土師器には、皿、羽釜がある。

皿 (277、278、281、282) 皿には口径7.4～9.0cm、器高1.4～2.3cmを測る小皿(277、278、281)と口径15cmを測る大皿がある。小皿は丸味をもつ底部に一回の横ナデによりやや外反する口縁部をもつもの(277、278)と内弯気味に上外方にのびるもの(281)がある。口縁端部はすべて丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面に一回の横ナデを施す。内面はナデ調整である。大皿は、丸味をもつ底部から内弯気味に上外方にのびる口縁部がつく。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面は一回の横ナデを施す。内面はナデ調整である。

羽釜 (280) 鏝の小破片で、端部は丸く仕上げる。

c. 溝

B-291-O S (第101～103図)

B-291-O Sからは、瓦器、土師器、須恵器が出土した。

瓦器 瓦器には、椀、皿がある。

椀 (340～341) 復元口径15.2cm、器高4.7cmを測る。平らな底部に断面台形を呈する高台がつく。体部は内弯気味に口縁部に続き、直線的に上外方にのびる口縁部を有するもの(340)と外反して上外方にのびるもの(341)がある。口縁端部は丸く仕上げる。底部と高台の接合部分にヨコナデを施す。体部外面は3段に分けた指押さえ、口縁部は一回のヨコナデにより仕上げる。内面側壁は粗いヘラミガキを施す。瓦器椀は遺存状態が悪く、340は炭素が付着していない。

皿 (332～336) 皿には口径8.4～9.7cm、器高1.7～2.3cmをはかる小皿がある。底部は丸味をもち、外反気味に上外方にのびる口縁部を有す。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部は一回のヨコナデにより仕上げる。内面は粗いヘラミガキを施す。小皿には断面三角形を呈する高台がつくもの(336)がある。口径9.2cm、器高2.6cm、高台径は3.1cmを測る。

土師器 土師器には、皿、羽釜がある。

皿 (323～331、337～339) 皿には口径8～9.2cm、器高1.5～2.2cmを測る小皿(323～3

30)と口径14.6~17.8cm、器高2.8~3.8cmを測る大皿(337~339)がある。小皿には比較的平らな底部から短く外反気味に上外方にのびる口縁部を有するもの(323)と外反する口縁部を有するもの(324~329)と丸味をもつ底部から内弯気味に上外方にのびる口縁部を有するもの(330)がある。端部はすべて丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部内外面は一回のヨコナデを施す。内面はナデ調整である。小皿の色調には、大きく分けて3つに分けられ、橙色(7.5Y R7/6)のもの(323~326、328)、赤色(10R5/8)のもの(327)、黄橙色(10Y R8/6)のもの(329、330)がある。大皿は平らな底部に直線的に上外方にのびる口縁部を有するもの(337~338)と平らな底部から内弯気味にのび、器高の低いもの(339)がある。口縁端部はすべて丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部はヨコナデにより仕上げる。内面はナデ調整である。331は、台付皿の高台部分で垂直に下った後、端部付近が短く「ハ」字形に開く高台を有す。

羽釜(346~355) 羽釜には、口径21~22.6cm程度を測るもの(346、352、353)と25~27cmのもの(347~350、354、355)と30cmを越えるもの(351)がある。体部は丸味をもち、器高の約2分の1程度に最大径がくると考えられる。355は、体部の約3分の1程度に最大径がある。口縁部は「く」字形に短く屈曲する。口縁端部は丸く仕上げるもの(346、347、350、353)、面を成すもの(349、351、352、354)、凹面を成すもの(355)がある。体部には上外方、水平方向、下外方にのびる鑿がつく。体部外面は板状工具によるナデ調整と考えられ、口縁部外面はヨコナデを施す。体部内面はナデ調整である。

須恵器 須恵器には、甕、壺、鉢がある。

甕(342~343) 342は復元口径27.0cmを測る。緩やかに肩の張る体部に外反して上外方にのびる口縁部を有す。口縁端部は平面を成す。体部外面は格子タタキを施し、体部内面はナデ調整である。口縁部内外面はナデ調整で、外面にタタキが残る。343は、肩の張る体部に大きく外反して開く口縁部がつく。口縁端部は平面を成す。体部外面は平行タタキ、体部内面はナデ調整である。口縁部内外面はナデ調整で、口縁部外面にタタキが残る。

壺(344) 肩の緩やかに張る体部より外反気味に上外方のびる口縁部がつく。肩部には一条の凸線が巡り、把手の痕跡がうかがえる。内外面ともナデ調整である。

鉢(345) 復元口径27.6cm、器高11.6cmを測る。平らな底部から直線的に上外方にのびる体部、口縁部がつく。口縁端部は上下に肥厚し、平面を成す。内外面ともナデ調整である。

B-127-O S (第104図)

B-127-O Sからは、瓦器、土師器が出土した。土師器には、皿、羽釜があるが、小

破片である。

瓦器 瓦器には、椀、皿がある。

椀 (357~360) 復元口径15.8~16.4cmを測る。高台は、断面三角形を呈するもの(359、360)がある。体部は内弯気味に口縁部に続く。口縁部は外反し、端部付近が外側に開くもの(357)、やや外反するもの(358、359)、直線的に上外方にのびるもの(360)がある。口縁端部は丸く仕上げる。底部と高台の接合部分はヨコナデを施し、体部外面は指押さえである。口縁部外面は一回のヨコナデで仕上げる。内面側壁は粗いヘラミガキを施す。瓦器椀はすべて遺存状態が悪く、360は、炭素が付着しておらず、赤色化しており、二次的に火を受けた可能性が考えられる。

皿 (356) 皿には口径9.4cm、器高2.3cmを測る小皿がある。丸味をもつ底部に、一回のヨコナデにより外反する口縁部がつく。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデを施す。底部内面は、粗いヘラミガキ、口縁部内面はナデ調整により仕上げる。

B-193-O S (第104図)

B-193-O Sからは、瓦器と土師器が出土した。

瓦器 瓦器には、椀がある。

椀 (362~363) 復元口径15~15.6cmを測る。平らな底部に断面台形を呈する高台がつく。体部は内弯気味に口縁部に続き、内弯気味に上外方にのびる口縁部を有するもの(362)と口縁端部付近が外側に開くもの(363)がある。口縁端部は丸く仕上げる。B-193-O S出土の瓦器椀は遺存状態が悪く、炭素が付着していない。363は赤色化しており、二次的に火を受けた可能性が考えられる。調整は不明である。

土師器 土師器は、皿がある。

皿 (361) 皿には復元口径9.6cmを測る小皿がある。比較的平坦な底部から、内弯気味に上外方にのびる口縁部を有す。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面はヨコナデにより仕上げる。内面はナデ調整である。

B-251-O S (第104図)

B-251-O Sからは、瓦器、土師器、須恵器が出土した。

瓦器 瓦器には、椀、皿がある。

椀 (368) 平らな底部に断面台形を呈する高台がつく。復元高台径は、5.8cmを測る。見込み部分のヘラミガキは不明である。

皿 (365~366) 皿には口径8.8~9.2cm程度、器高2cm程度を測る小皿がある。平らな底部から直線的に上外方にのびる口縁部を有すもの(365)と丸味をもつ底部から外反する口縁部を有すもの(366)がある。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデで仕上げる。366は、底部内面に粗いヘラミガキを施す。

土師器 土師器には、皿、羽釜がある。

皿 (367) 皿には復元口径12.6cm、器高2.9cmを測る大皿がある。平らな底部に、やや外反気味に上外方にのびる口縁部がつく。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面に一回のヨコナデを施す。内面はナデ調整である。

羽釜 (369~370) 上外方にのび、端部は丸く仕上げる鑊がつく。口縁部は直線的に内傾し、短く直立する口縁部を有するもの(369)がある。口縁端部は丸く仕上げる。口縁部内外面はヨコナデで仕上げる。

須恵器 須恵器には、甕がある。

甕 (371~372) 口縁部は大きく上外方に外反し、端部は平面を成す。口縁部内外面とも回転ナデ調整で、外面にタタキの痕跡が少し観察できる。体部外面は格子タタキ、内面はナデ調整である。

B-285-O S (第104図)

B-285-O Sには、瓦器、土師器、須恵器が出土した。瓦器には、椀、皿、須恵器には、甕があるが、すべて小破片である。

土師器 土師器には、台付皿がある。

台付皿 (379) 平らな底部に「ハ」字形に大きく開く高台がつく。高台の内外面ともナデ調整である。

B-145-O S (第104図)

B-145-O Sからは、瓦器、土師器が出土した。瓦器には、椀があるが小破片である。

土師器 土師器には、皿がある。

皿 (364) 皿には口径9.6cm、器高1.2cmを測る小皿がある。平らな底部に、やや外反して上外方にのびる口縁部がつく。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面に一回のヨコナデを施す。内面はナデ調整である。

B-367-O S (第104図)

B-367-O Sからは瓦器、土師器が出土した。土師器には、羽釜があるが小破片のみである。

瓦器 瓦器には、椀がある。

椀 (373、374) 平らな底部に断面台形を呈する高台がつく。口縁部は外反する。遺存状態が悪く、内外面の調整は不明である。

B-493-O S (第104図)

B-493-O Sからは瓦器、土師器が出土した。

瓦器 瓦器には、椀、皿がある。

椀 (376、378、380、381) 復元口径は、14~14.4cm程度を測る。376は、平らな底部に断面台形を呈する高台がつく。体部は内弯気味に口縁部に続き、口縁部はやや外反して上外方にのびる。口縁端部は丸く仕上げる。体部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデで仕上げる。内面側壁は粗いヘラミガキ、見込み部分には平行線のヘラミガキを施すもの(376)がある。

皿(375) 皿には復元口径9cmを測る小皿がある。丸味をもつと考えられる底部から外反する口縁部がつく。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデを施す。内面は粗いヘラミガキを施す。

土師器 土師器には、皿、羽釜がある。皿は小破片である。

羽釜 (382) 復元口径は、27.8cmを測る。内弯気味に内傾する体部に「く」字形に短く屈曲する口縁部がつく。口縁端部は丸く仕上げる。口縁部内外面はヨコナデにより仕上げる。 (小谷)

3. D地区

D地区からは、原池低地の包含層、j、k層や各掘立柱建物、土壌及び溝などから遺物が出土した。層位的には、k層→250-O X→j層となるが、遺物に型式差は存在しない。掘立柱建物や土壌及び溝などの主要な遺構は、13世紀前半段階のものである。また、D-108-O Sは、13世紀後半である。

a. 包含層

D-j層 (第88図)

瓦器、土師器、須恵器、磁器がある。

瓦器椀、皿がある。

椀 (36~41) 椀は、古い段階から新しい段階まで混在する。形態は、平坦な底部にしっかりした「ハ」字状にひろく断面台形を呈する高台をつけ、体部はわずかに内弯して立ち

上がり、口縁部はわずかに外反する。41は、最古段階の瓦器碗と考えられるものである。体部外面は、全面削り調整され、のちミガキ調整される。外面ミガキ調整は、磨滅のため何分割か不明であり、内面は、器壁がはく離するため調整は判然としない。口径15.3cm、器高6cm、高台径6.5cmを測る。他に底部のみの破片ながら、復元高台径が8cm前後を測るもの(38)がある。他の瓦器碗は、丸みをおびた底部に退化した断面台形の貧弱な高台をつけ、内弯しながら立ち上がるもの(37~40)と平坦な底部に退化した断面台形の貧弱な高台をつけ、体部下半で屈曲してわずかに内弯しながら立ち上がるもの(36)がある。体部外面は、指おさえ調整のもの(36~39)と凸部をわずかに横方向にミガキ調整するもの(40)がある。内面調整は、不規則な連結輪状のミガキ調整を施し、側壁には間隔の荒いミガキ調整を太さ2mm前後で施すもの(36)や乱方向に4mm前後のミガキ調整を施すもの(39、40)がある。

皿(27) 口径8.6cm、器高2cmを測る。底部指押さえ調整、体部内面から口縁部内外面にかけてはナデ調整をおこなう。内面ミガキ調整は、太く、見込みと側壁に間隔を荒く施す。

土師器 皿、羽釜、土錘がある。

皿(28~30、34) 皿は、口径により大、小二種類ある。量的には大皿が少ない。小皿は、丸みをおびる底部に口縁部をつけるものである。底部指おさえ調整で、体部内面から口縁部内外面にかけてはナデ調整をおこなう。ナデ調整は、強いもの(29)、やや強いもの(28)、軽くおこなうもの(30)がある。底部内面のナデ調整を右回りにエッジ状におこなうもの(30)もある。胎土は良好である。大皿は、口径14.8cm、器高4cmを測る。底部から体部にかけては内弯しながら立ち上がる。他に小皿に高台をつけたもの(31)がある。口縁端部は面をもち、外面は強いナデ調整によって段をもつ。高台径8.2cm(32)、11cm(33)の大、小の高台も存在する。

羽釜(43、44) 羽釜は、口縁部を「く」の字状に外反させ、体部上半に水平(44)或いは上向き(43)に鏝を付ける。鏝から上の体部は、内側方向に直線的にのび、長さが短いもの(43)、長いもの(44)がある。口縁部と体部の境界は、ナデ調整によって丸くなり、明瞭な屈曲はしない。復元口径22.8cm(43)と28cm(44)がある。体部下半は、ナデ調整をおこなう。

土錘(35) 土錘は、縦長の棒状を呈し、径2.3cm、長さ5.8cmを測る。

須恵器 鉢がある。

鉢(42) 片口をもつ。口縁部断面は直角で、内外面ナデ調整をおこなう。口縁部外面に重ね焼き痕がある。

磁器 碗がある。

碗 (45) 白磁碗で、口縁部が玉縁状になる。

瓦器碗からみて、12世紀中葉～13世紀前半にかけての遺物である。

D - k 層 (第87図)

瓦器、土師器、須恵器、磁器がある。

瓦器 碗、皿がある。

碗 (1～12) 形態は、平坦な底部(1、3、5～12)や丸みをおびた底部(2、4)に、断面台形を呈する貧弱な「ハ」字形にひろく高台をつけ、体部から口縁部にかけては、体部下半で屈曲するもの(3、5、9、12)や屈曲しないで内弯するもの(1、2、4、6～8、10、11)がある。内外面ミガキ調整は、太く5mm前後のものから細く2mm前後のものまである。総体としては、太いミガキ調整が圧倒的に多い。外面ミガキ調整は、施さないもの(1、3、4)と施すもの(2、5～12)がある。ミガキ調整を施すものは、指おさえによってできた体部外面凸部にのみ、ごくわずかに残存するもの(2、5、11、12)、体部外面全面の凸部に間隔を荒く施すもの(5、6、8、7、10)がある。内面、見込みと側壁のミガキ調整は、文様化するものとししないものがある。文様化するものは、渦巻状に2～3mmのミガキ調整を施すもの(1、12)や2mm前後のミガキと4mm前後のミガキを見込みから側壁上部まで平行線状に施すもの(5、9)、斜格子のもの(3、6、7)は、5mm前後の太いミガキ調整を間隔を荒く施すもの(3)、2mm前後の細かいミガキを間隔を荒く施すもの(6)、或いは細かく密に施すもの(7)があり、他に連結輪状のもの(11)などがある。文様化しないものは、乱方向に間隔を荒く施すもの(2、8)、比較的密に施すもの(4、10)などある。10は、他の瓦器碗の胎土、焼成と異なる。

皿 (13、14) 皿は、口径9cm、器高2、3cm前後である。底部指おさえ調整は、口縁部直下の体部に、一周にまわっておこなわれるため、底部形態は丸みをおびる。内面ミガキ調整は、間隔を荒く粗雑に施すもの(13)と口縁部直下に一条のみ施すもの(14)がある。胎土はよく、微量の砂粒を含むのみである。

土師器 土師器は、皿、羽釜がある。

皿 (15～22) 皿は、口径の大小により2種類ある。また、大小の皿に高台をつけるタイプもある。口径9～9.8cm、器高1.7～2.3cmの一群と口径14.6cm、器高3～3.5cmの一群である。形態は、平坦な底部(16)や丸みをおびる底部(15、17)に、口縁部がつく。小皿は、口径、器高が小さいため、口縁部ナデ調整の強弱によって形態がことなる。最も強く口縁

部をナデ調整し、体部と口縁部の境界に明瞭な段を有するもの(16)や、やや強くナデ調整するもの(15)、軽くナデ調整する事で、底部から口縁部にかけて直線的にのびるもの(17)がある。17は、底部指おさえが2段にわたり、口径、器高共に土師器に比べて大きく、炭素は付着しないものの瓦器の可能性をもつ。大皿は、平坦な底部に内弯しながら立ち上がる口縁部をもつ。底部指おさえ調整、口縁部内外面ナデ調整をおこなう。口縁部のナデ調整は、右回りに一回実施する。他に大小の皿に高台を持つ形態が3点存在する。高台径に大、小があり、3.6～8 cmある。21は、小皿に高台をもつ器形である。20、22共に高台につく上半部の形態は不明である。高台はナデ調整をおこなう。胎土は良好で微量の砂粒を含むのみである。色調は、ほぼ同一系統で、にぶい黄橙色を呈する。

羽釜(23、24) 羽釜は、直立する体部に口縁部をわずかに内弯させ、やや下方向きに鐳をつけるもの(23)と、「く」の字状に外反する口縁部に水平に鐳をつけるもの(24)がある。24は、体部と口縁部の境界はナデ調整を施すため、不明瞭になっている。23は、他の皿、羽釜と胎土、色調が異なり、10Y R7/6明黄褐色を呈し、外面には煤が付着する。胎土は、黒色粒、砂粒を含む。

須恵器(25) 東播系挿鉢がある。口縁部断面は、直角に近い。内外面は回転ナデ調整をおこなう。口縁部外面には、重ね焼き痕がある。石粒、砂粒を含む。

磁器(26) 白磁碗がある。口縁部は玉縁状になる。

初現期の瓦器碗(41)から12世紀末から13世紀前半までの遺物である。

b. 掘立柱建物、ピット群

D-01-O B (第91図)

D-01-O Bは、全ての柱穴より遺物が出土する。細片となったものが多いがD-156-O Pは、量的に多い。瓦器碗は、外面にわずかにミガキ調整が残存し、内面は間隔の荒いミガキを施す。D-156-O P(137)は、B地区で検出された瓦器窯の碗と同一形態である。瓦器皿は、見込みにミガキ調整があるもの(133)とないもの(132、134)がある。土師器皿は、平坦な底部に外反する口縁部をつける(131)。瓦器碗からみて13世紀前半の遺物であろう。

D-02-O B (第91図)

D-02-O Bからは、D-166、167、195、214-O Pより遺物が出土した。瓦器碗、皿、羽釜、平瓦がある。D-195-O Pからは、瓦器碗(138)、皿(150)、土師器皿(149)、平瓦(158、159)が出土した。瓦器皿は、内面ミガキ調整を施す。土師器皿は、平坦な底部から

直線的にのびる口縁部をつける。平瓦は、凸面に縄目叩き、凹面は、布目を消したのち、糸切りを施す。

ピット群出土遺物（第91図）

D地区上段の掘立柱建物周辺からは、多数の柱穴が検出された。瓦器碗、皿、土師器皿羽釜、陶器、須恵器鉢、瓦類など13世紀段階の遺物であろう。土器類と共に瓦類の出土例も多い。瓦器碗は、平坦な底部に断面台形(139、140)或いは、退化した台形(157)の高台をつけるものである。D-165-OP出土瓦器碗(157)は、他の一群と比較して一時期新しく、13世紀後半と考えられる。土師器の口径が7.5cm前後と小さく、13世紀よりも新しく、14世紀段階の遺物の可能性がある。D-205-OP出土瓦器碗は、口径12cm、器高3cmで、炭素が付着しない。14世紀末から15世紀前半の時期と考えられる。D-177-OPは、口径7cm、器高1.5cm、瓦器、土師器皿(141~143)、D-178-OPからは、口径7cm、器高1.5cmの平坦な底部に直立気味に立つ口縁をもつ土師器皿(144~148)、D-183-OPからは、土師器皿(151)、D-257-OPからは、高台付土師器皿(153)、D-179-OPからは、瓦器碗(155、156)土師器皿(154)が出土する。D-177-OP、178-OP、183-OPなどの出土遺物は、13世紀よりも新しく、14世紀段階の遺物と考えられる。

D-219-OO（第105図）

瓦器、土師器がある。

瓦器碗がある。

碗(409) 碗は、丸みをおびた底部に「ハ」字状にひらくしっかりした高台をつけ、体部は、内弯し、口縁部は外反する。口径15.4cm、器高6cm、高台径6.6cmを測る。

土師器 皿がある。

皿(407、408) 皿は、平坦な底部(407)や、丸い底部(408)に、直線的にのびる口縁部をもつ。口径15~15.6cm、器高3.3~4.1cmを測る。408は、器高が深い。

D-108-OS（第105図）

瓦器、土師器、磁器がある。

瓦器碗、皿、鉢、火舎がある。

碗(385~388) 平坦な底部に、貧弱な断面台形を呈する高台をつけ、体部から口縁部にかけては内弯して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。見込みは、平行線(385、387、388)とジグザグ状(386)に1mm前後で細かくミガキ調整し、側壁ミガキ調整は3mm前後で大きく施す。外面ミガキ調整は一切施さない。

皿 (389、390) 平坦な底部(389)や丸みをおびる底部(390)に、外反する口縁部をつける。389は、口径、器高共に小さく、8 cm、1.3 cmを測る。390は、見込みにジグザグ状のミガキ調整を施す。

鉢 (394) 体部から口縁部にかけての破片で、内弯する体部に平坦な口縁部をもつ。口縁部ナデ調整、外面指おさえ調整である。

火舎 (395) 内外面磨滅する。器高は、10.5 cmを測り、口縁部は肥厚する。口縁端部は凹状になる。

土師器 皿、羽釜がある。

皿(391～393、383、384) 皿は、大皿(383、384)と小皿(391～393)がある。大皿は、口径13.8 cm、器高2.5 cm(383)、口径14.8 cm、器高3.7 cm(384)を測り、平坦な底部に、直線的に外上方にのびる口縁部をもつもので、口縁部はナデ調整し、底部から体部にかけては指おさえ調整する。384は、体部指おさえ調整は強い。小皿は、平坦な底部に、口縁部をつける。389は、口径、器高が他に比べて小さく、口径7 cm、器高1.2 cmであり、他は口径8.7 cm、器高1.7 cm前後である。

羽釜 (397～399) 羽釜は、口径に大、小があり、22～26 cmのもの(398、399)と19.2 cmのもの(397)がある。内弯した体部に「く」の字形に外反する口縁部をつける。口縁部の長さは、0.5 cm(398)、1 cm(397)、1.5 cm(399)がある。

磁器 (396) 白磁碗がある。口縁部の玉縁は、しっかりしており、断面三角形を呈する。

c. 溝

D-354-O S (第105図)

瓦器、土師器がある。

瓦器 碗、皿がある。

碗 (403～406) 碗は、平坦な底部に断面台形を呈する高台をつけ、体部から口縁部にかけては内弯しながら立ち上がる。外面ミガキ調整は、おこなうの(405、406)とおこなわないもの(403、404)がある。内面ミガキ調整は、乱方向に施し、4 mm前後の太さである。

皿 (401、402) 丸みをおびる底部に、口縁部がつく。内面ミガキ調整は、太く乱方向に施す。401は、二次焼成のため炭素が付着しない。

皿 (400) 皿は、口径14 cm、器高3.5 cmを測る。

d. その他

D-250-O X (第88図)

瓦器、土師器、磁器がある。

瓦器 碗、皿がある。

碗 (50～55) 碗は、平坦な底部に、貧弱な(50～53)、或いはしっかりした(54、55)「ハ」字形にひろく高台をつけ、体部から口縁部にかけては内弯して立ち上がる。口径15.6cm前後、器高6cm、高台径6cmと大きくしっかりし、内外面丁寧にミガキ調整するもの(54、55)、口径15～15.8cm、器高4.8～5cm、高台径4.2～4.9cm、外面ミガキ調整はわずかに残存し、内面は、間隔を荒く、見込みと側壁の区別なくミガキ調整するもの(51～53)、口径15.6cm、器高5.1cm、高台径6cmで外面をミガキ調整しないもの(50)がある。54、55は、見込みは不明瞭ながら太くジグザグ状に文様化してミガキ調整を施すが、ミガキの太さが太いため、器面調整の用途ははたしている。側壁ミガキ調整は、丁寧に施すもの(54)と比較的間隔を荒く施すもの(55)がある。器壁は共に厚く、しっかりとつくられる。51～53の外面ミガキ調整は、口縁端部外面と体部上半の指おさえ調整によってできた凸部に施すもの(52)、口縁部ナデ調整以外の体部外面全面に粗雑に施すもの(51)、口縁部から体部下半にかけての凸部に太く、3～5mm前後で施すもの(53)がある。50は、内面ミガキ調整が不明瞭で、高台径が大きい。

土師器 皿、羽釜がある。

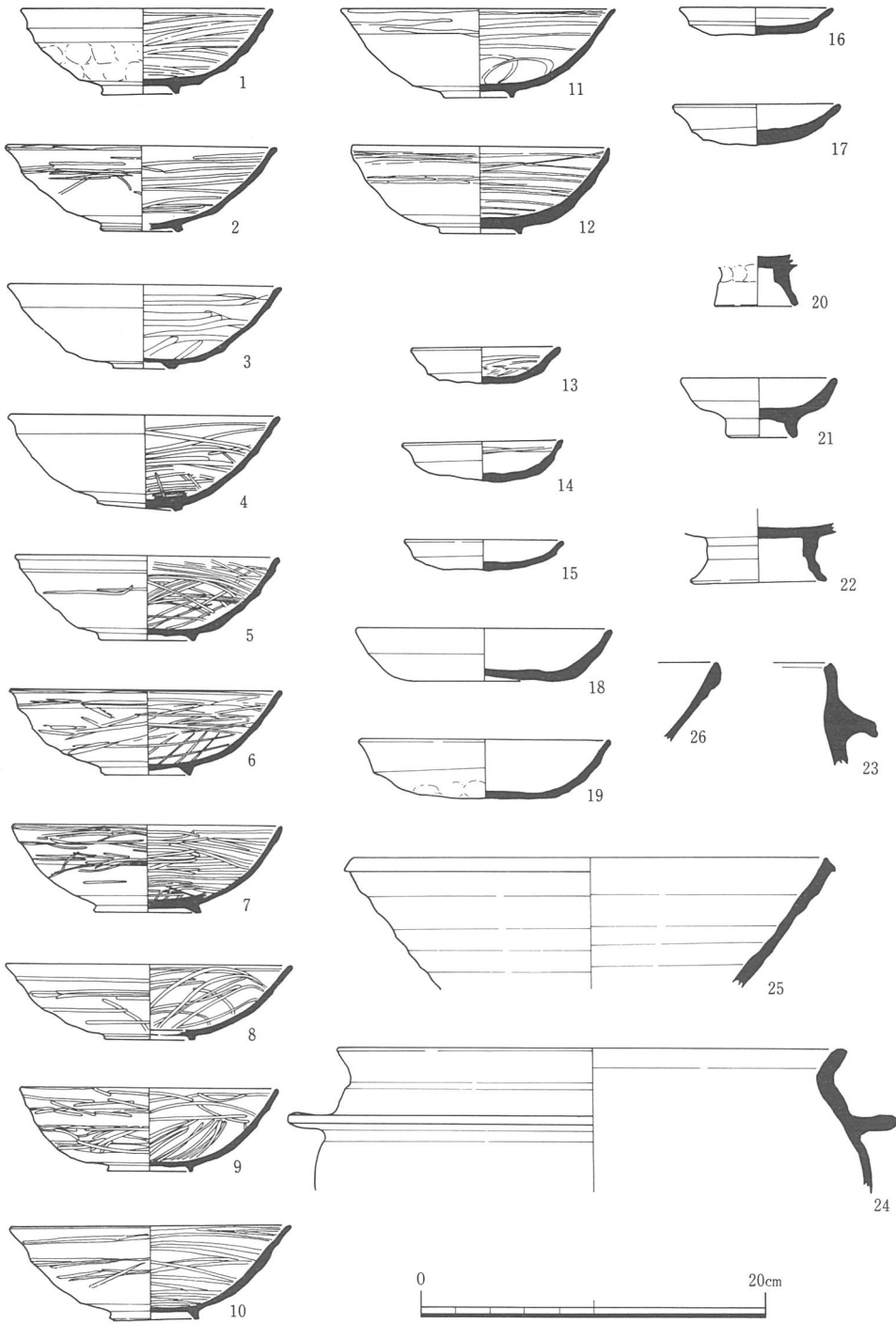
皿 (47～49) 大皿はなく、小皿のみである。平坦な底部から直立して立ち上がるもの(47)、外上方に直線的にのびるもの(48)、内弯して立ち上がるもの(49)がある。底部は全て指おさえ調整である。微量の砂粒を含む。

羽釜 (56) 「く」の字形に外反する口縁部をもち、体部上半に上向きに鑿をつける。口縁端部は面をもち、口縁部と体部の境界は比較的明瞭である。外面に煤の付着がある。内外面ナデ調整。復元口径26.8cmを測る。 (渋谷)

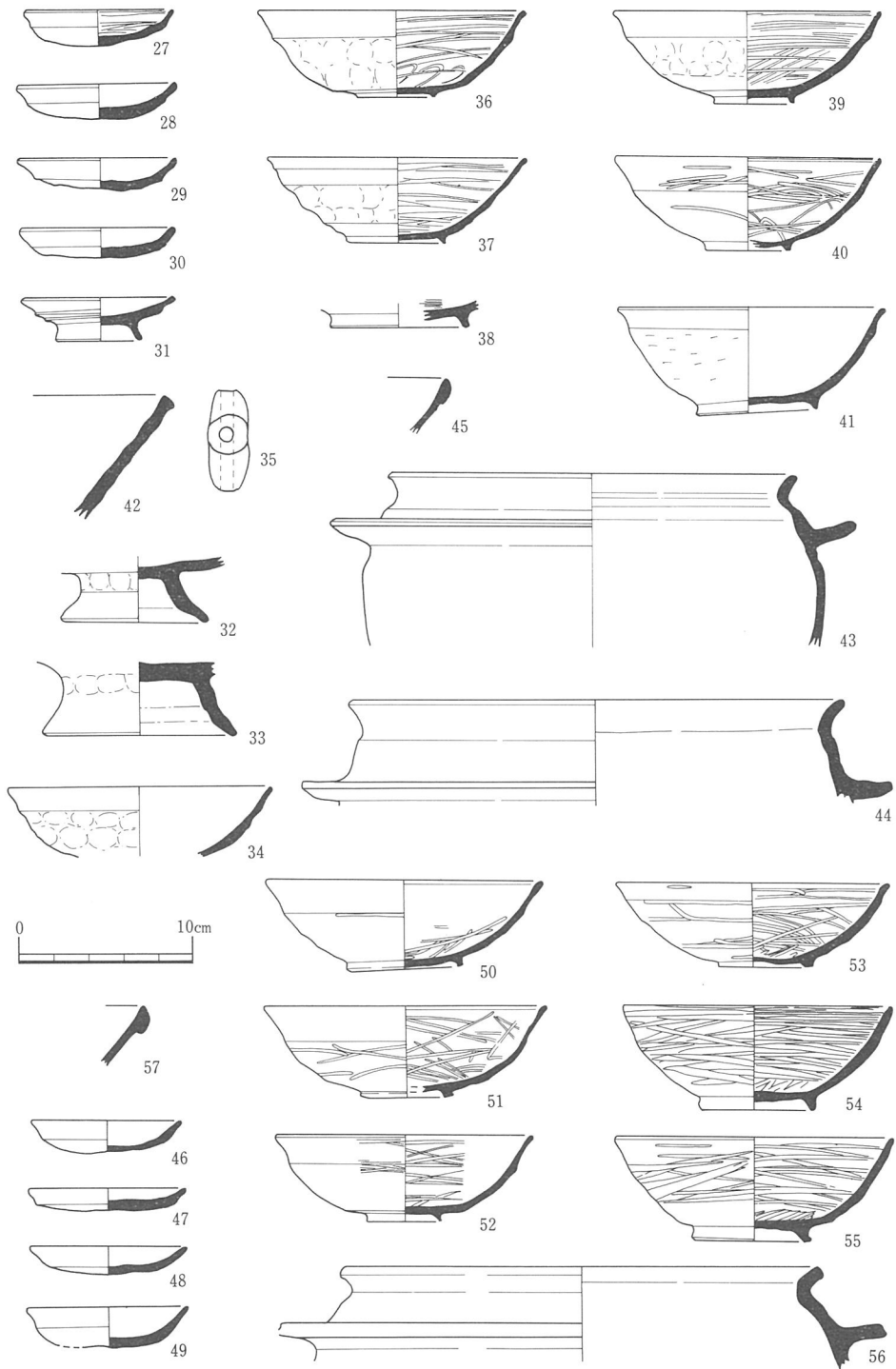
磁器 (57) 白磁碗がある。口縁部は玉縁状になる。

木器 (第106図)

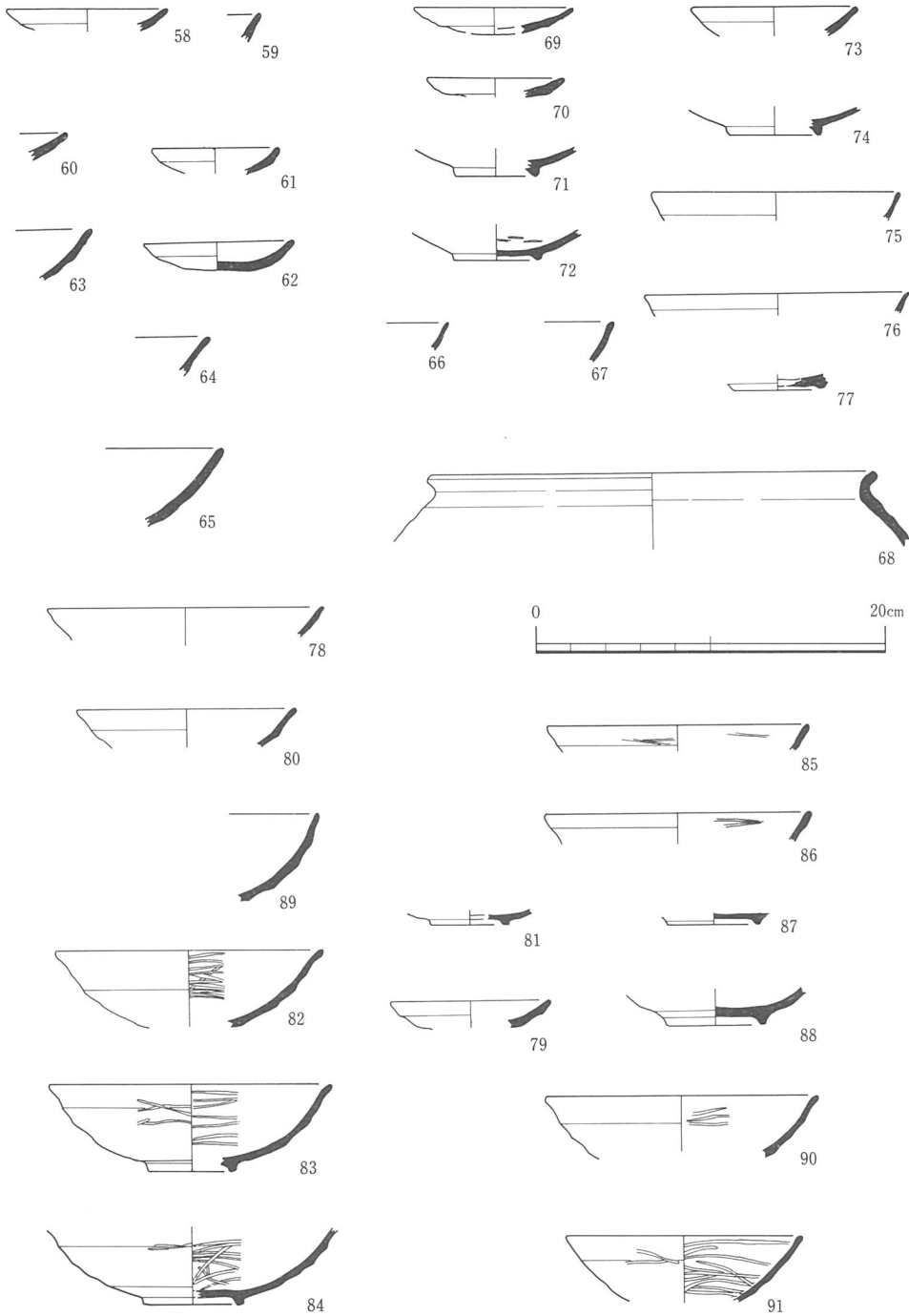
木製品はD区原池低地のj層を中心にk層からも出土し、D区02B-OX中からも少量出土している。木杭の中にはD区原池低地南の1層で出土したのものがあるが、より上位の層から打ち込まれたもの、あるいは踏み込まれたと考えられるので、確実に1層に伴う加工木は認められなかった。



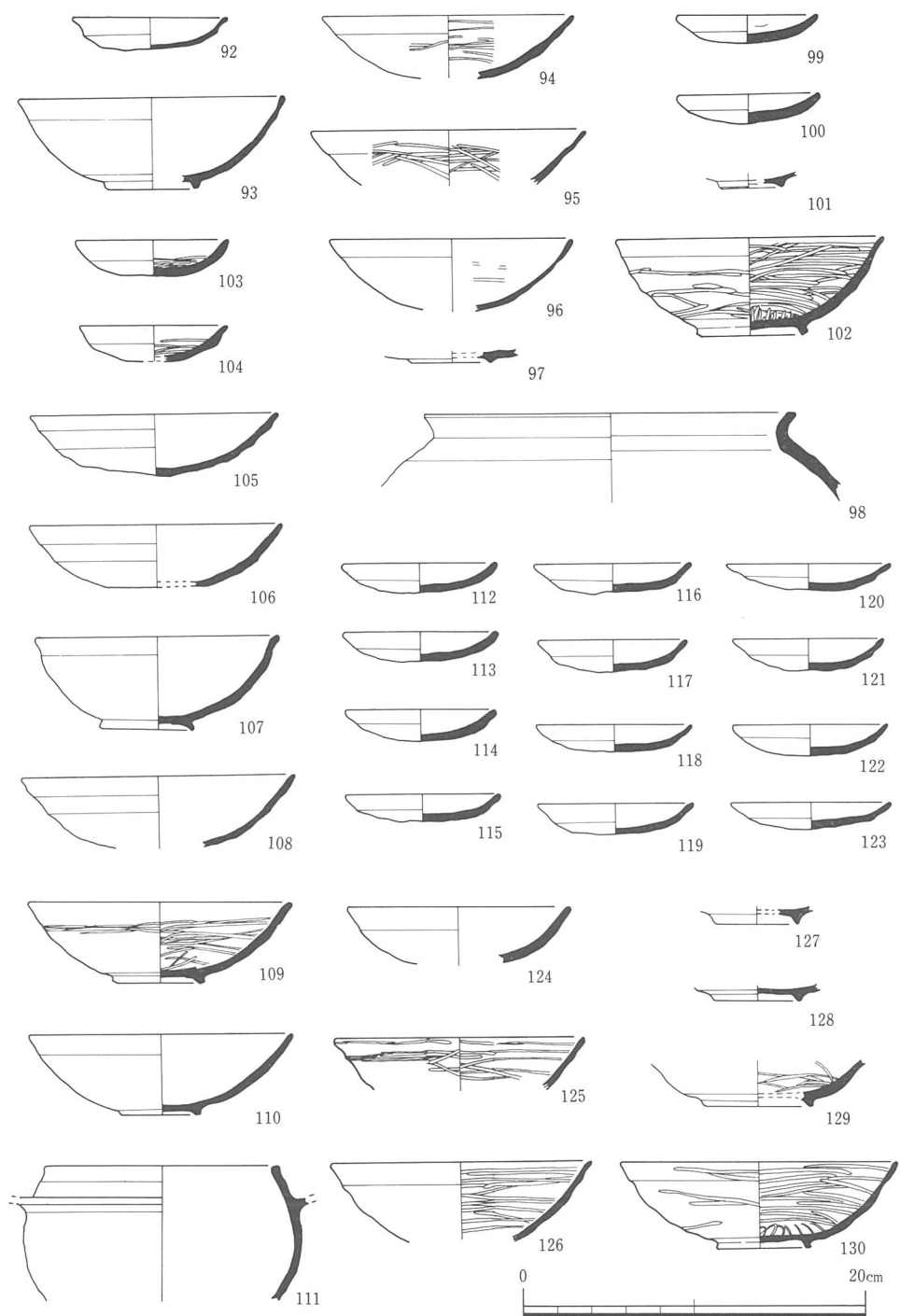
第87图 D地区 k層出土遺物実測図



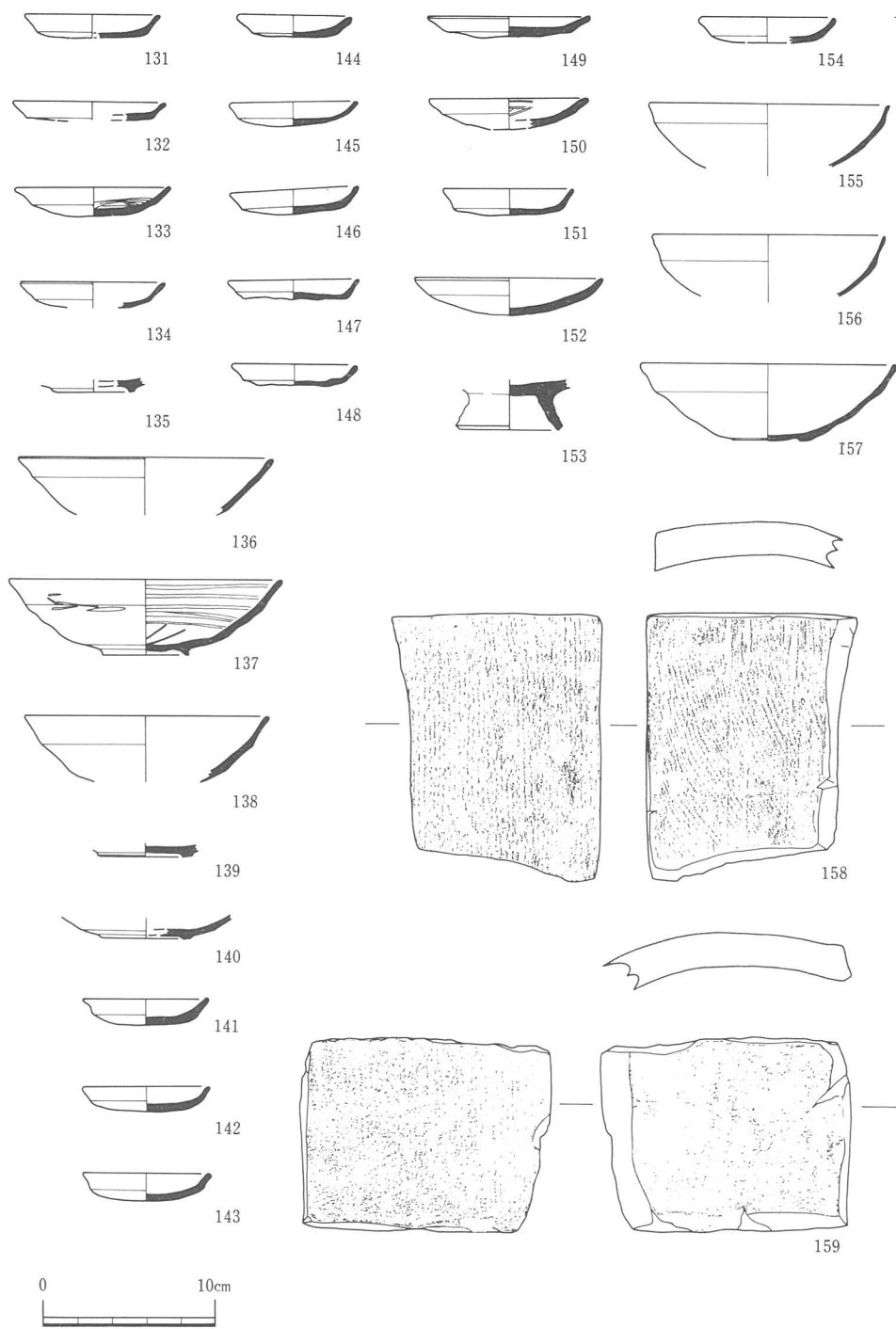
第88图 D地区 j層, 250-00出土遺物実測図



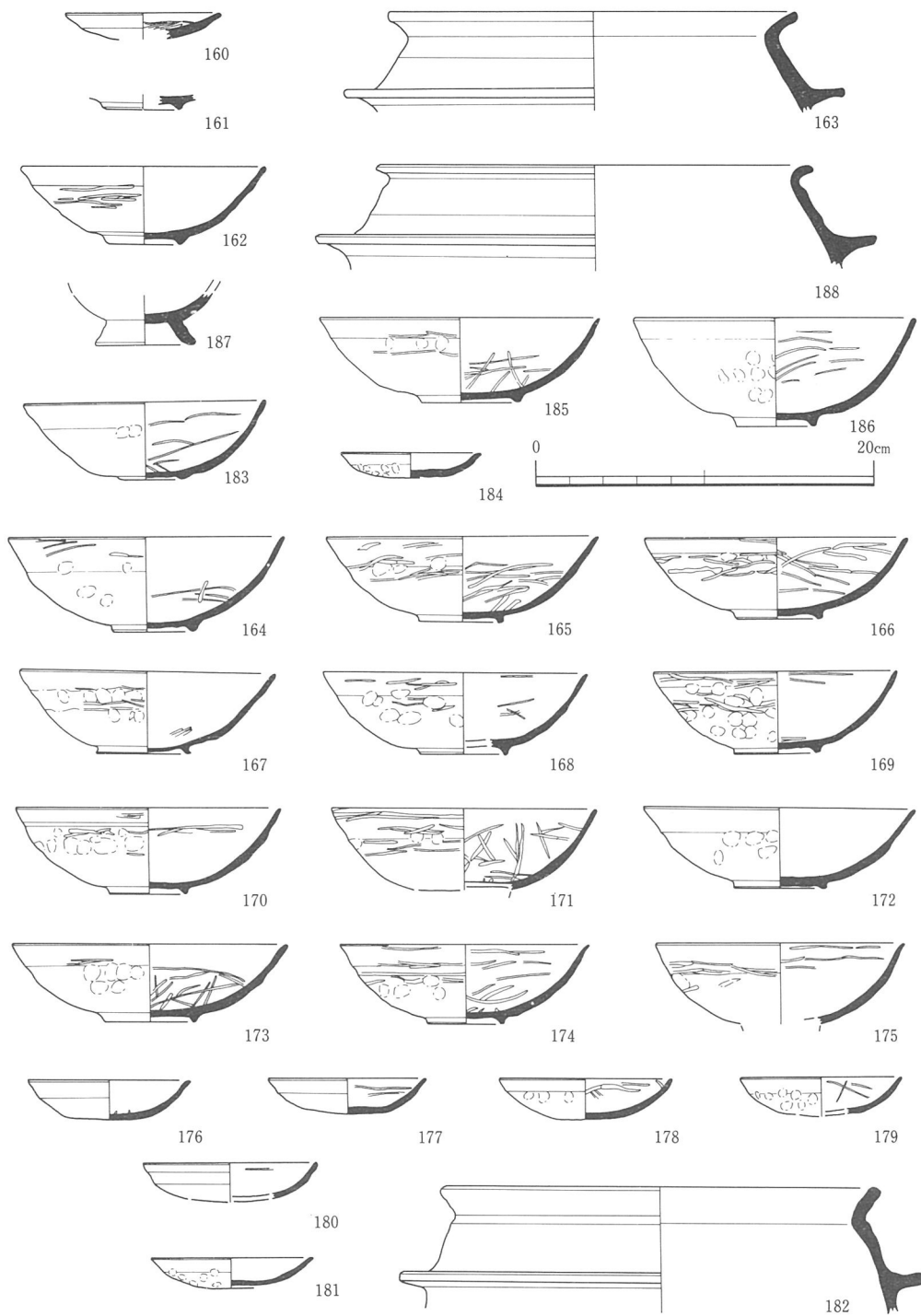
第89図 B地区 3-OP, ピット群出土遺物実測図



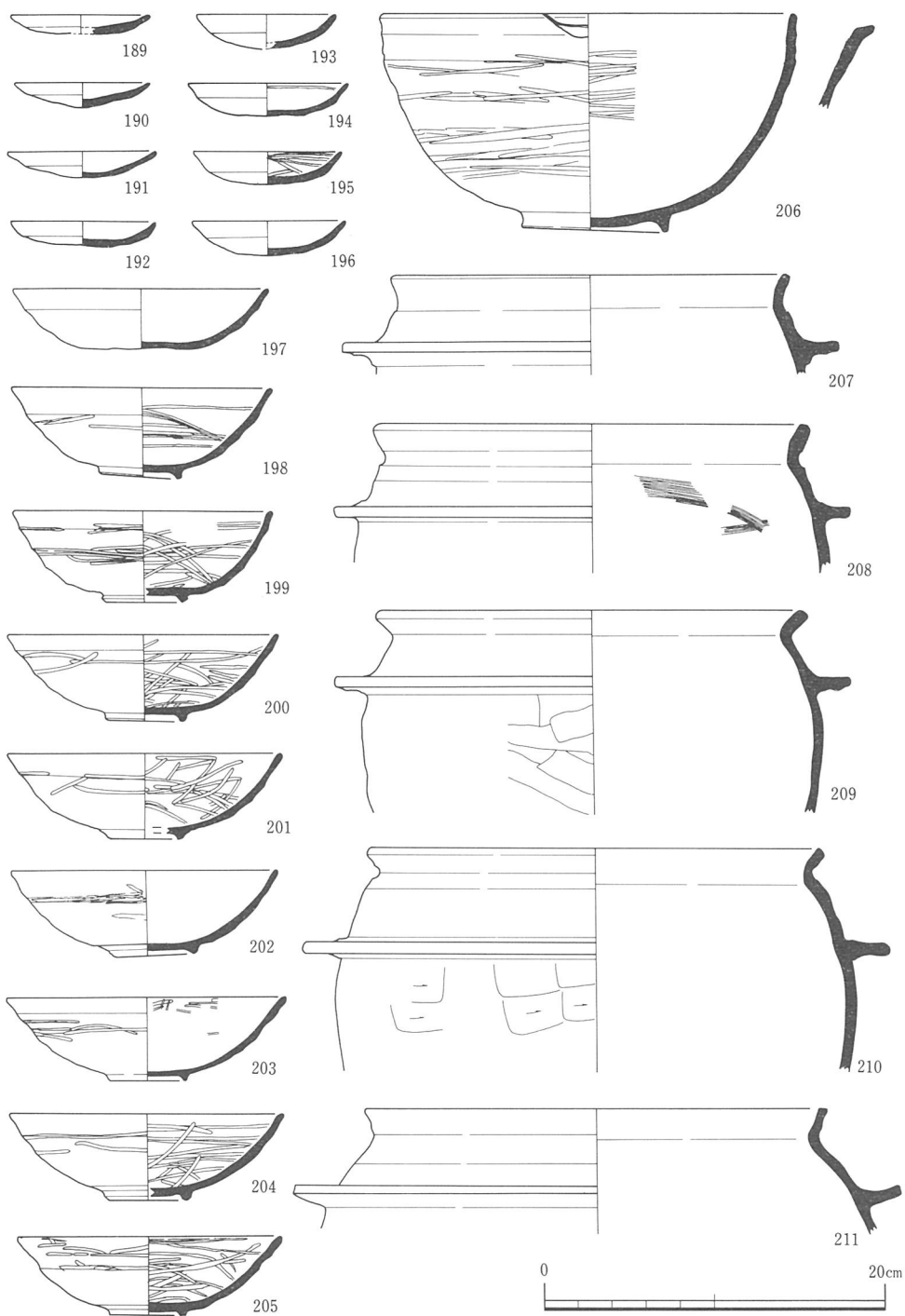
第90图 B地区 掘立柱建物出土遺物実測図



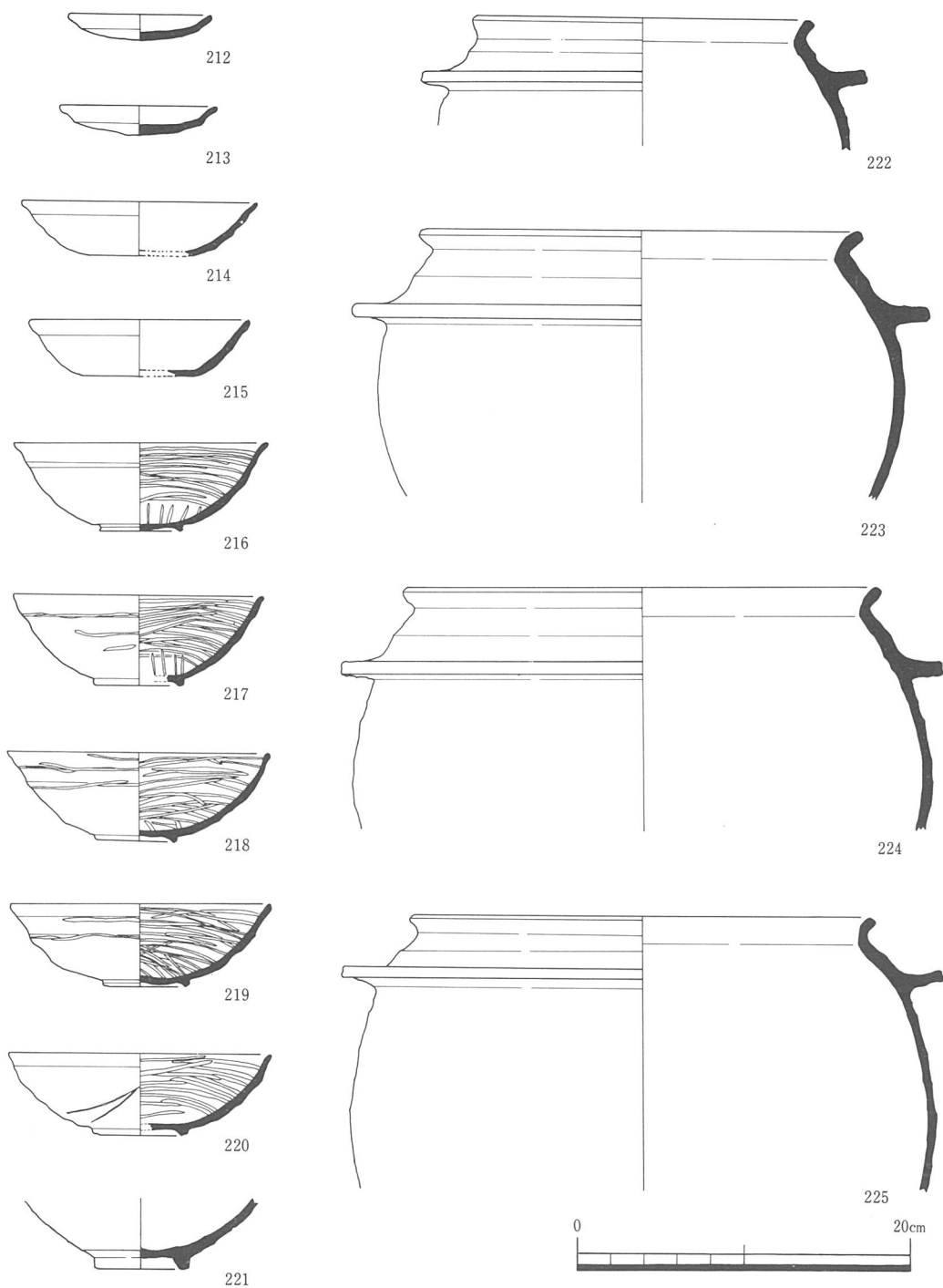
第91図 D地区 01、02-OB、ピット出土遺物実測図



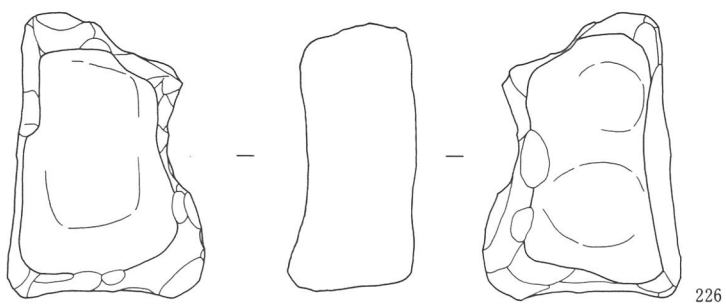
第92图 A西地区 OB、OP、OO出土遺物実測図



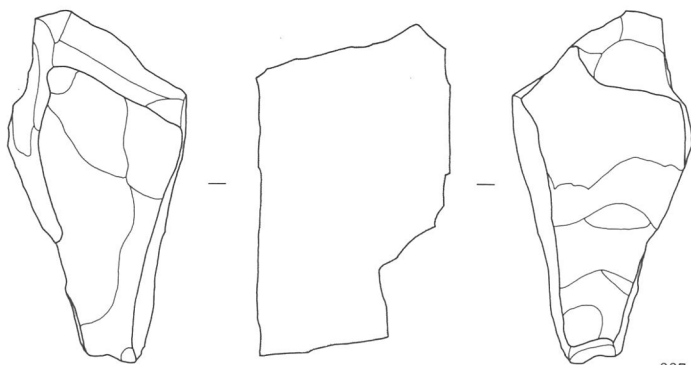
第93图 A地区西 377-〇〇出土遺物実測図



第94图 B地区 229—〇〇出土遺物実測図



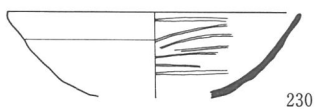
226



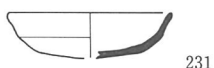
227



229



230



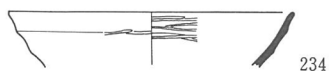
231



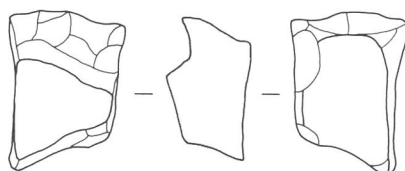
232



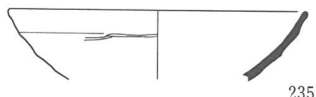
233



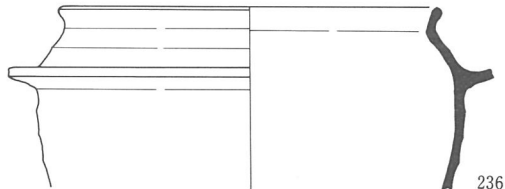
234



228

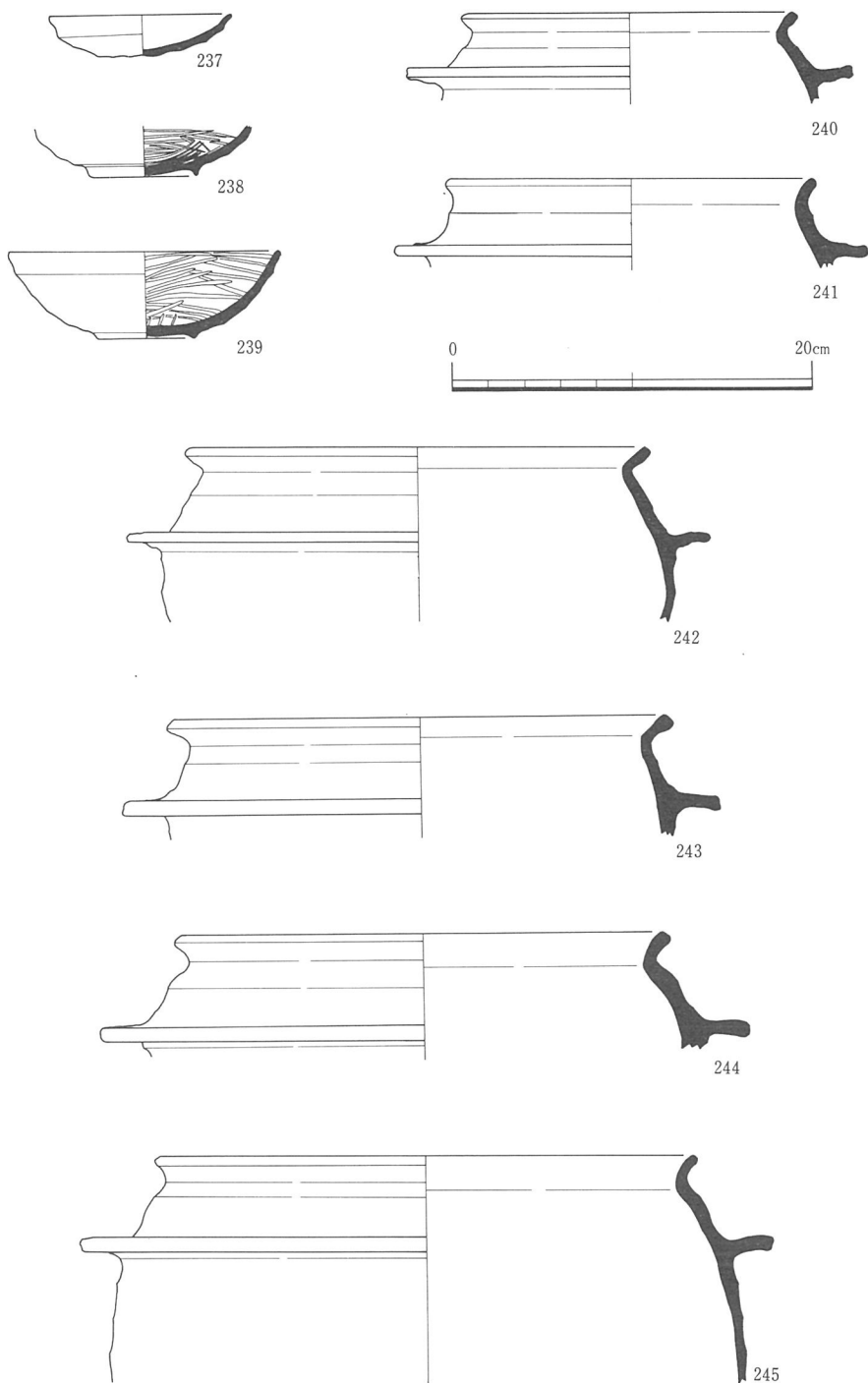


235

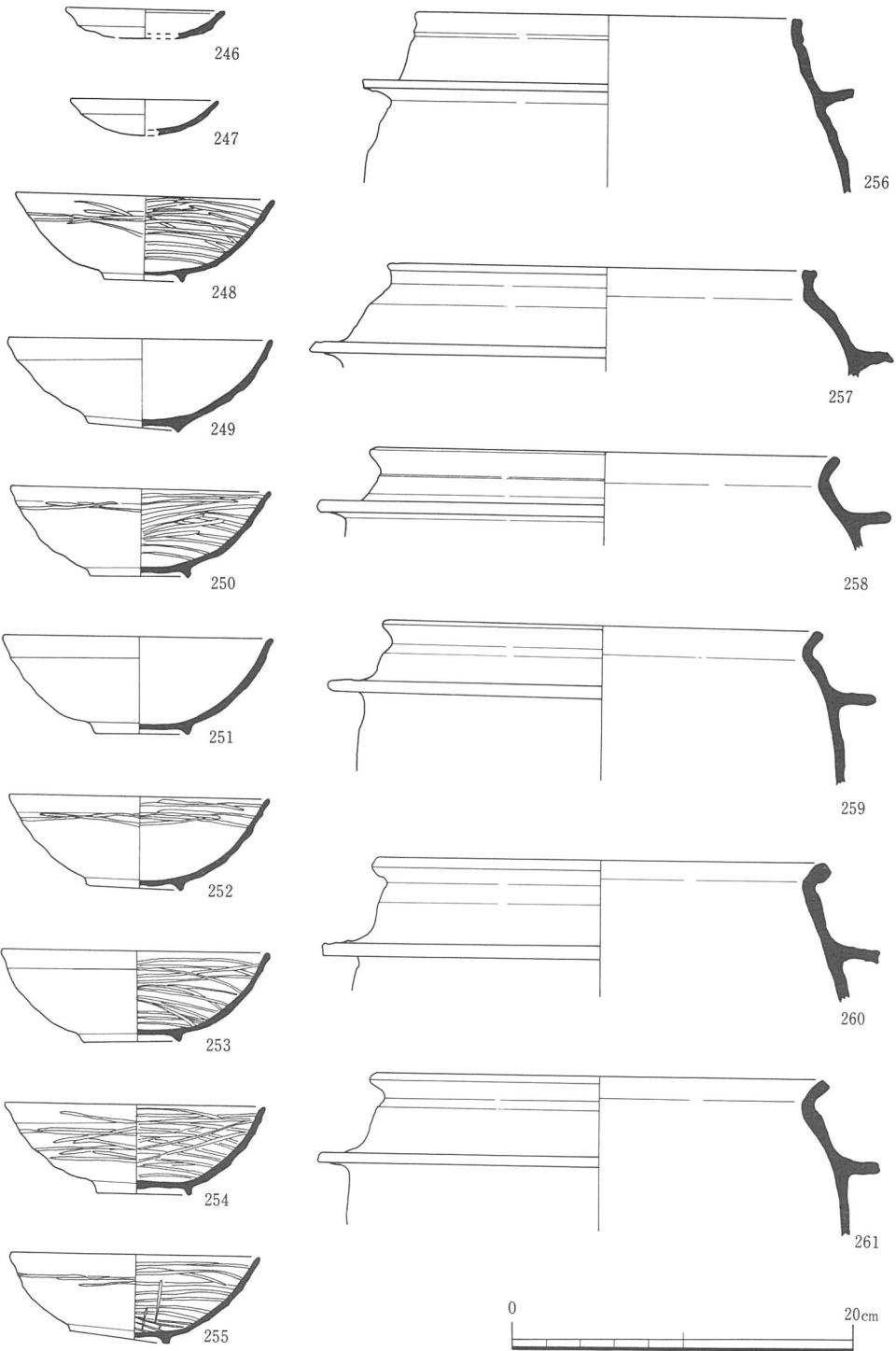


236

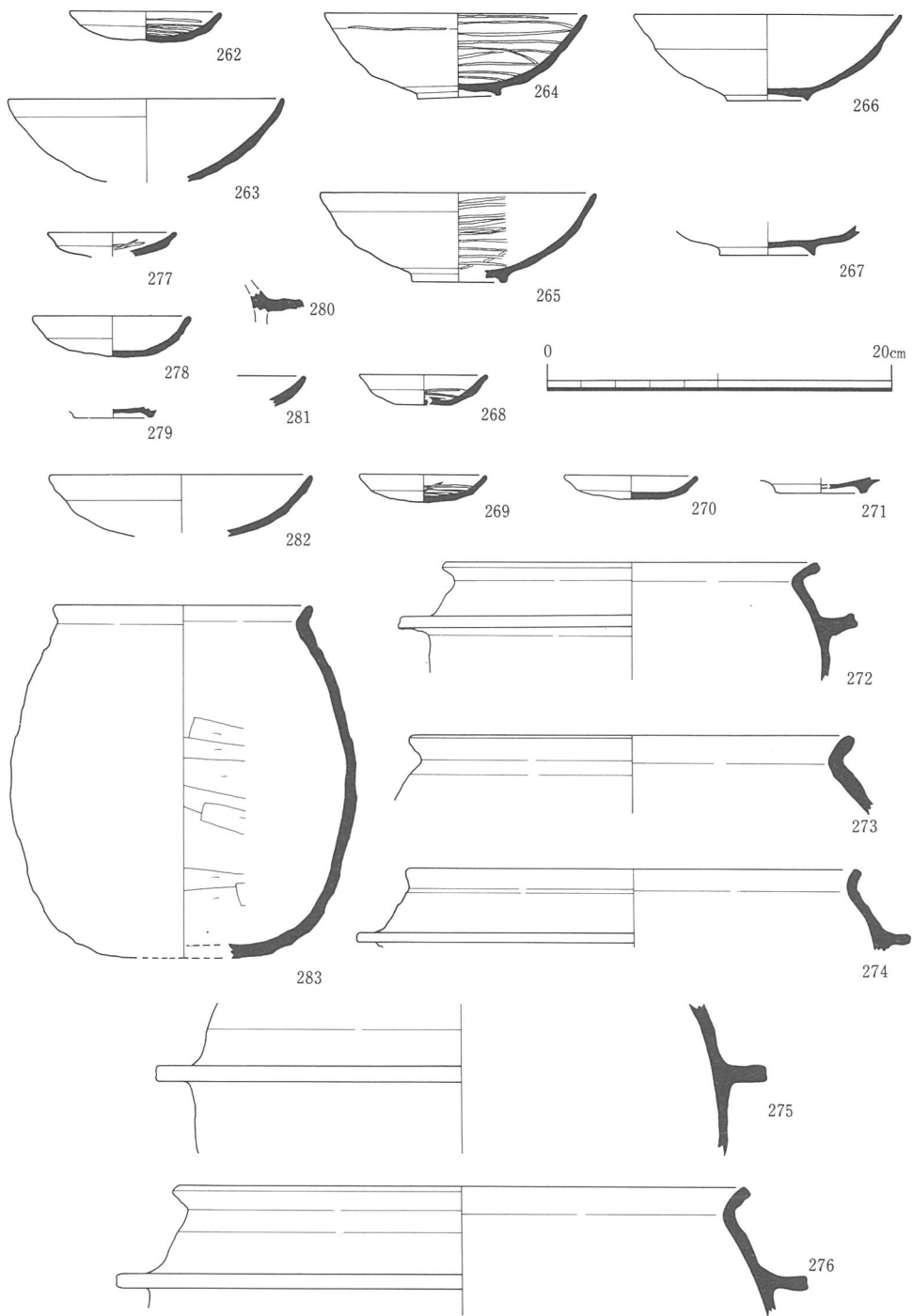
第95图 B地区 229,1610,1746-〇〇出土遺物実測図



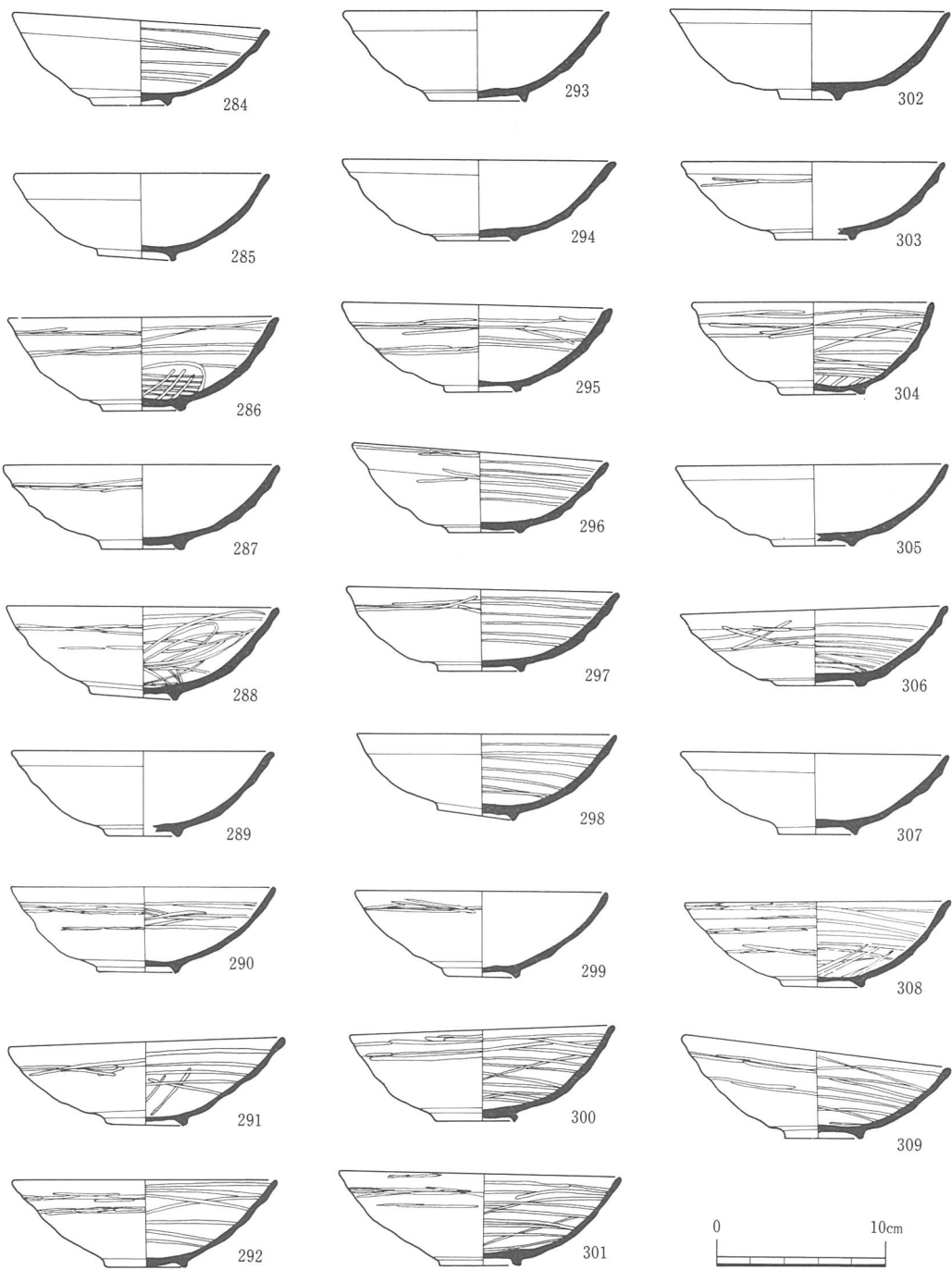
第96图 B地区 292-〇〇出土遺物実測図



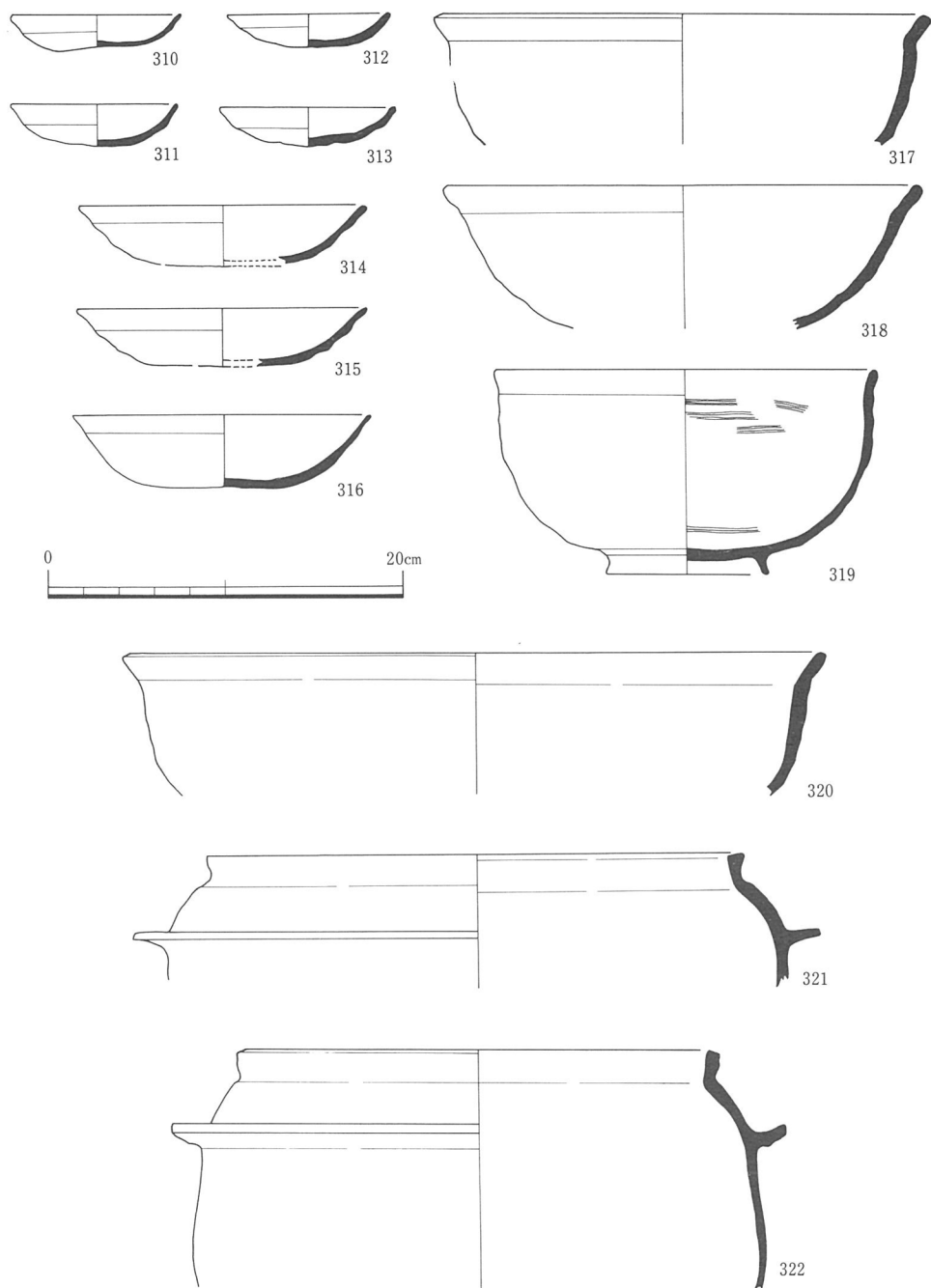
第97图 B地区 296-〇〇出土遺物実測図



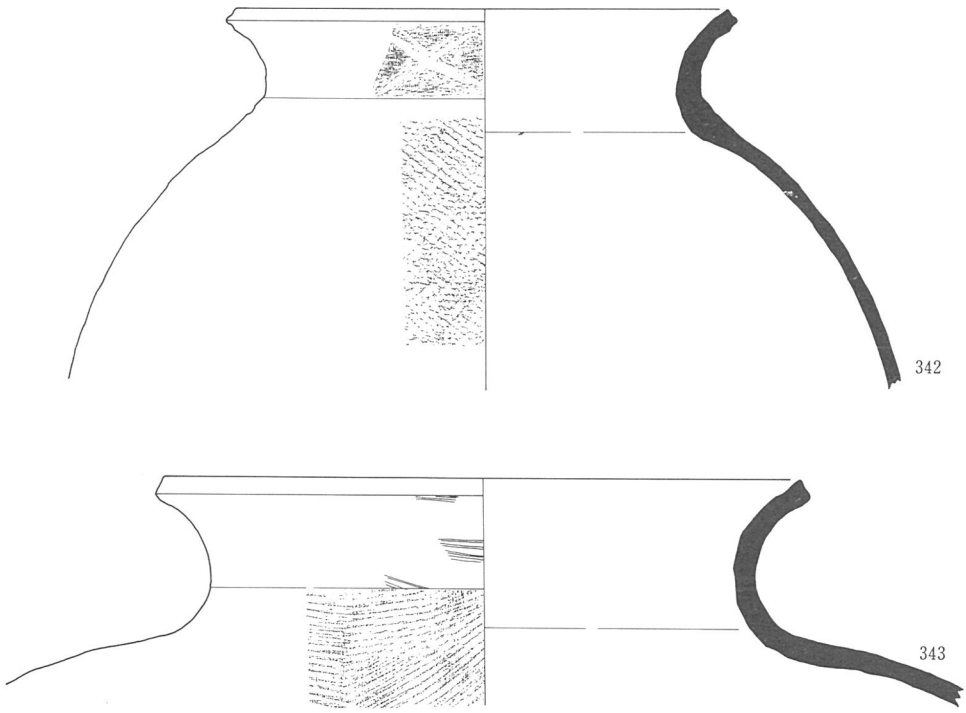
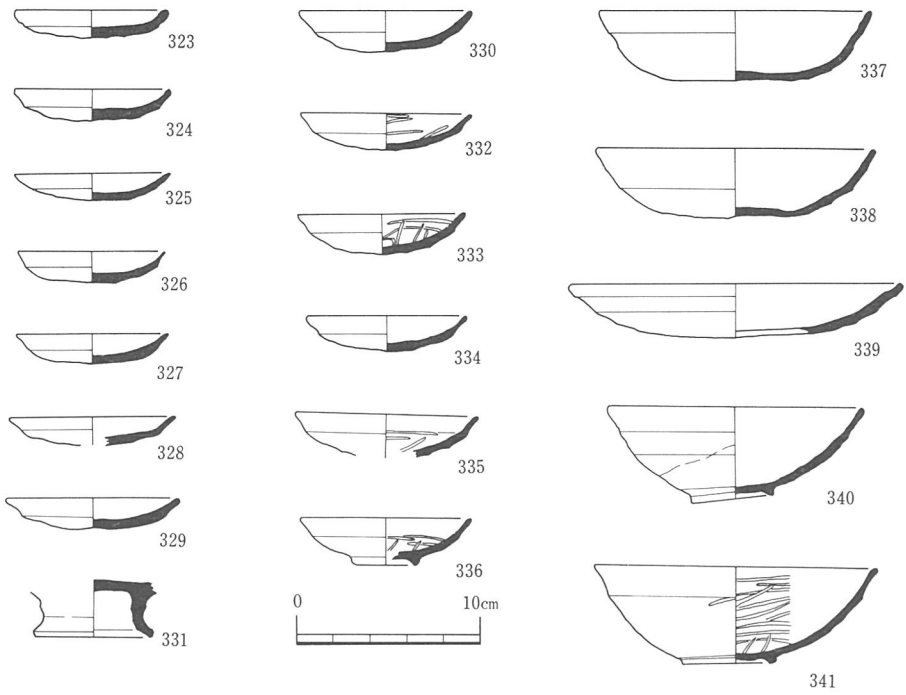
第98图 B地区 302,304,1029—〇〇出土遗物实测图



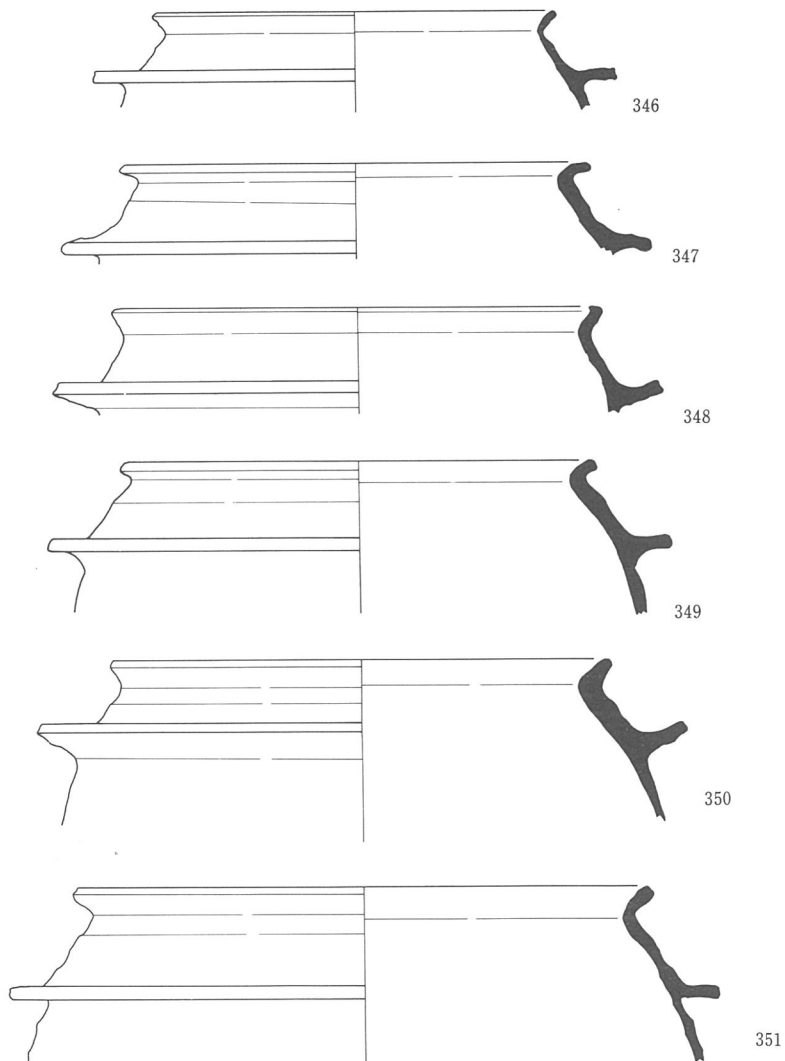
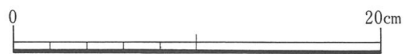
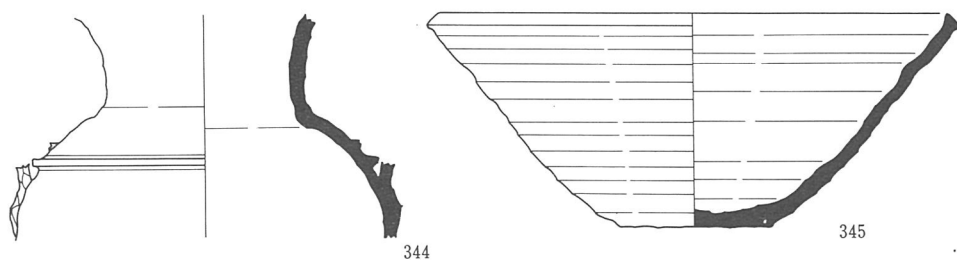
第99图 B地区 1028-〇〇出土遺物実測図



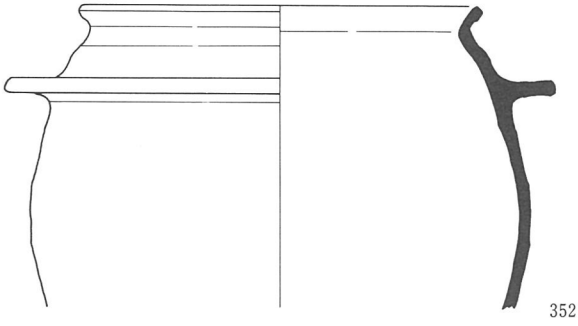
第100图 B地区 1028-〇〇出土遺物実測図



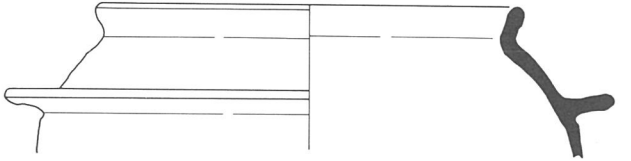
第101図 B地区 291-O S 出土遺物実測図



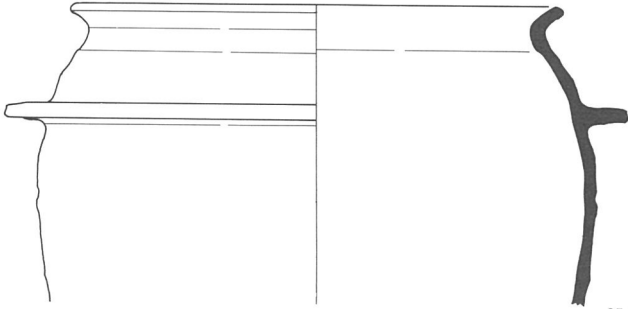
第102图 B地区 291-O S 出土遗物实测图



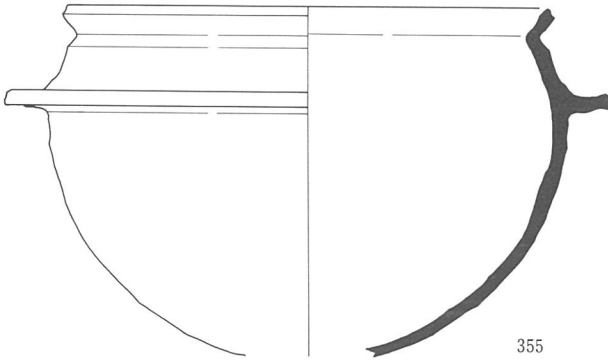
352



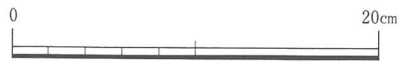
353



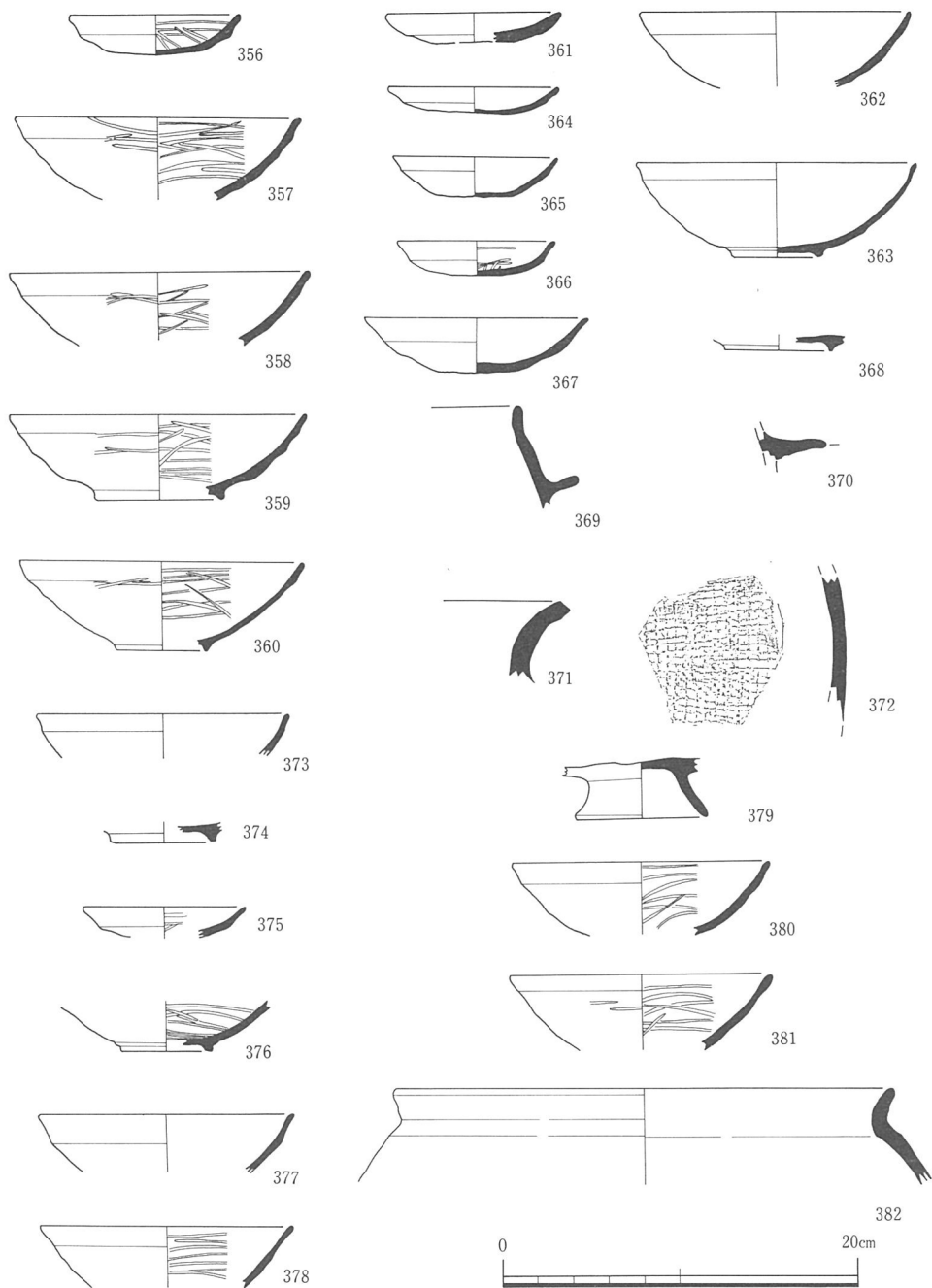
354



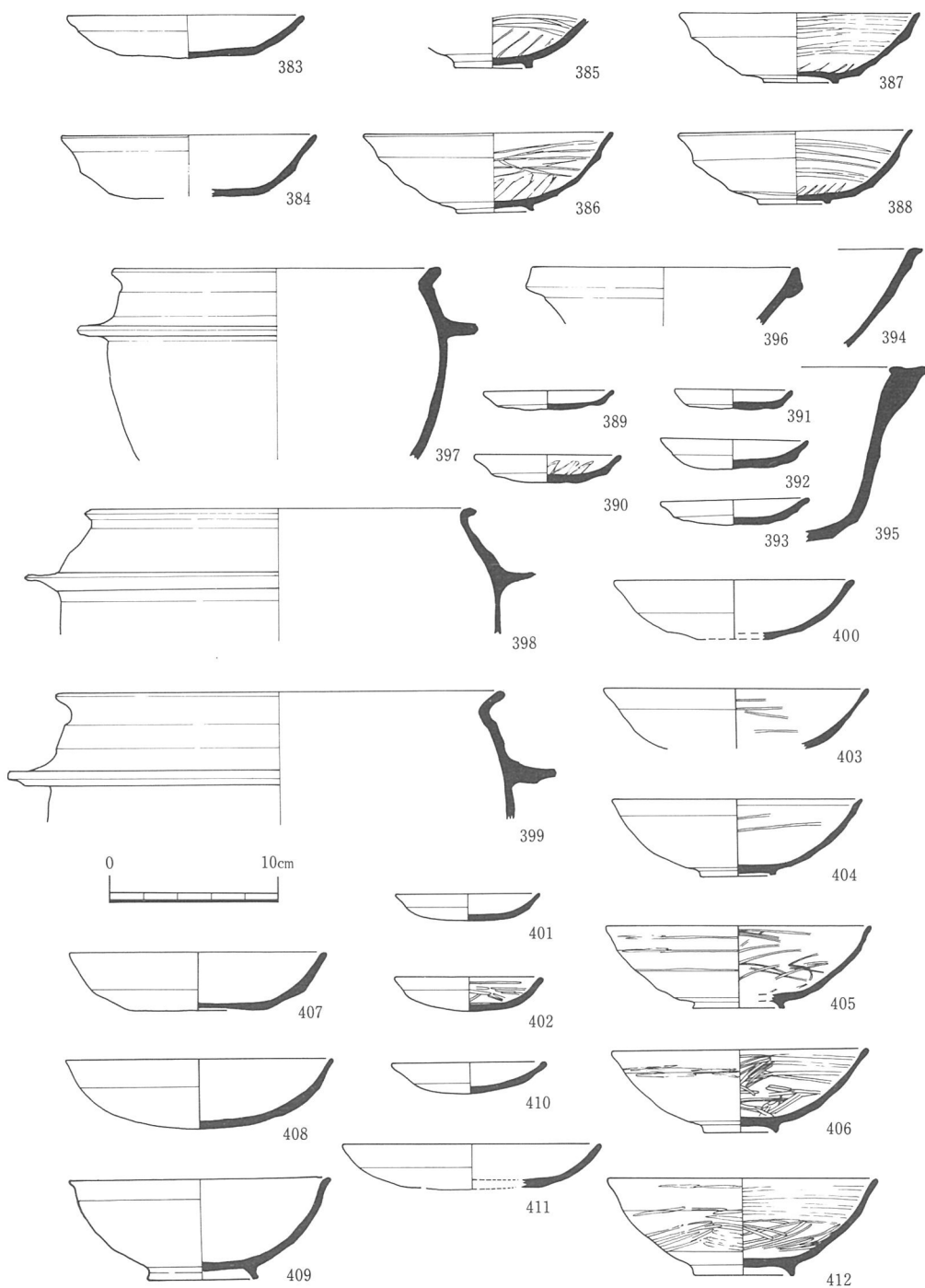
355



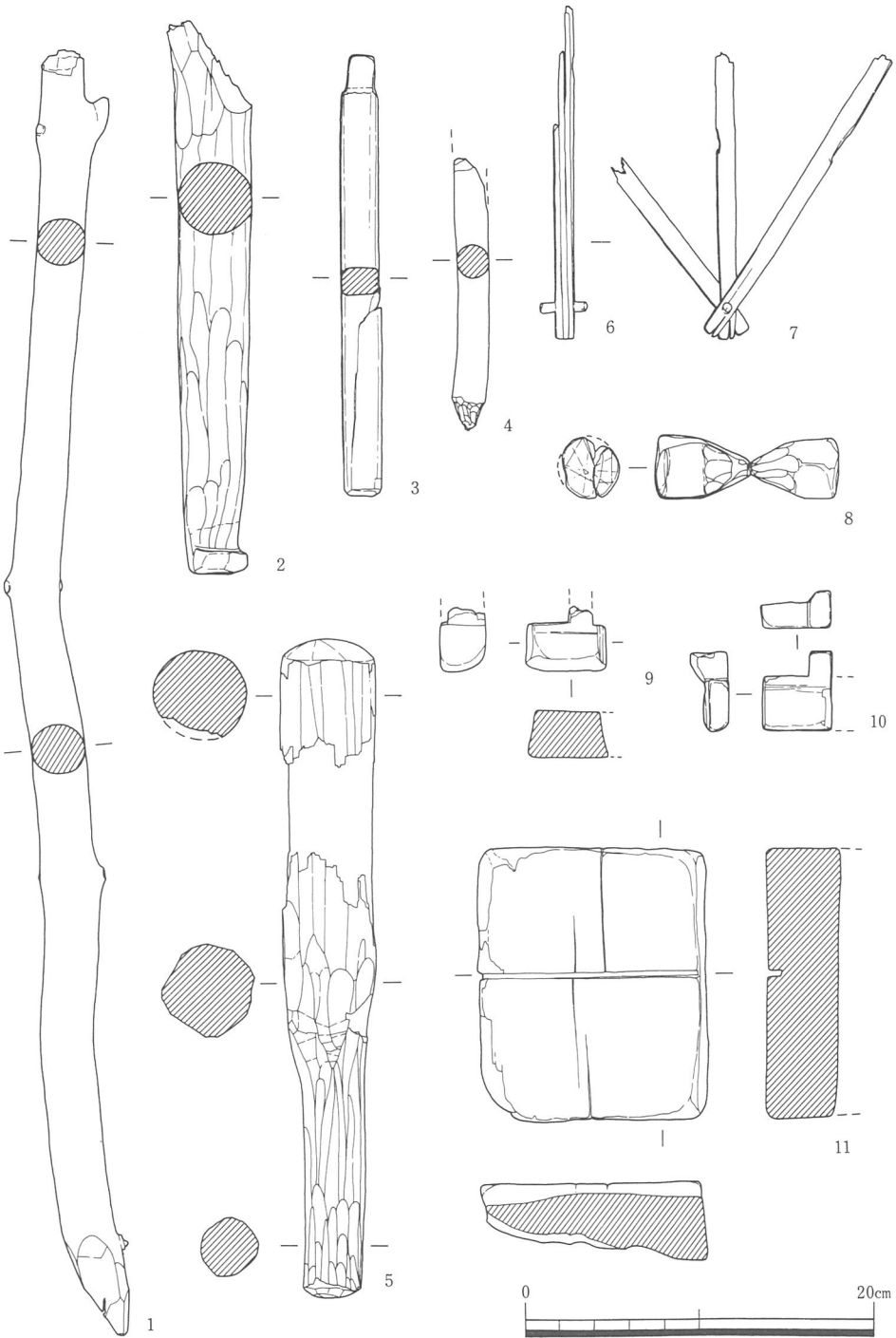
第103图 B地区 291-O S 出土遺物実測図



第104図 B地区 127,193,251,367,493,502-O S出土遺物実測図



第105图 D地区 108-O S、354-O S、219-O O出土遺物実測図

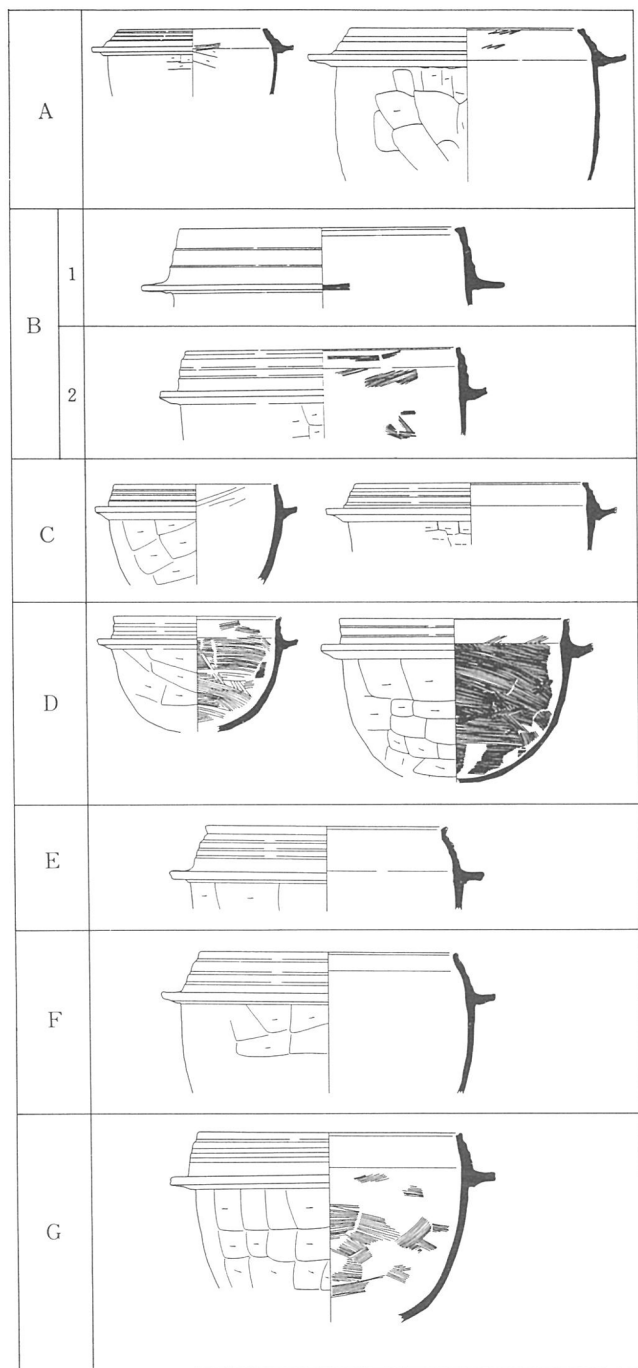


第106图 D地区 原池低地 j、k 层出土遗物实测图

何らかの加工痕をもつ材はD区で約50点を数え、他に、自然木、炭化した木片、桃の種、松ボックリ等も出土した。加工木の主体は木杭であるが、全形の推測し難い厚さ1cm前後の板材、曲げ物もみられる。材質鑑定を実施していないので、ここでは触れない。

(1)は全長87cm、径3.2cmの杭。先端を粗く削り出している。(2)は現在長32.5cm、太さ4.5cm。一端の片面を削って縄止めのような突起を作っている。図の上端も削りを加えている。(3)は槌の柄。長さ25.4cm、握りの断面形部は1.6×2.0cm。大きさ形状から鉄槌の柄と思われる。(4)は現存長15.7cm、径1.9cmの細身の棒の先端を細かいタッチで削っている。(5)扇は両側を欠失して中側の骨部の3枚分が残っている。長19.5cm。(6)は中央部を削り込んで紐がかりとしたもので、蓆などの藁細工をする時の錘りであろうか。(7)の木槌は柄部をゆるやかに削って細くしている。全長37.9cm、径5.5cm、槌部中央が剥落しているのは、使用時の傷みの名残りかも知れない。(8)~(10)は、用途、形状不明の加工品。(8)、(9)は図の下部が接地面になっていたと思われ、よく磨耗し、砂粒が木目に食い込んでいる部分もある。(10)は板状の中央に幅4.5mm、深さ9~5mmの溝がある。 (藤田)

第5節 室町～江戸時代



1. 器種分類

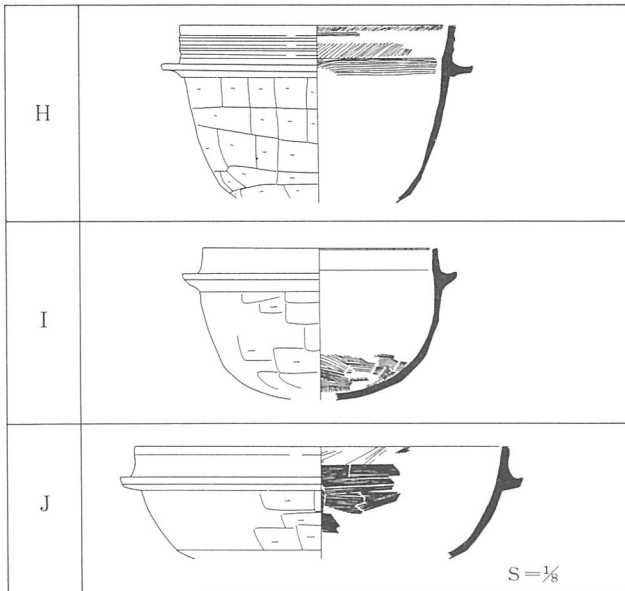
本遺跡からは、15～16世紀と考えられる遺物が多量に出土した。主要な遺構には、B地区2109-O SやD地区02-O Xなどがある。以下で、当該期の最も主要な器種である瓦質、土師質の羽釜、搦鉢、甕の三器種について型式分類を試み、遺物の説明はこの型式分類を用いる。

羽釜

羽釜は主に、口縁部の形態の違いにより11型式に分類した。

A類 口縁部は内傾し、口縁部外面に段、沈線を施す。口縁部の長さは、3 cm前後である。体部外面はヘラ削り、内面は横方向にハケ調整するもの。のちナデ調整するものもある。焼成は、比較的良好で、瓦質のものが圧倒的に多く、土師質のものは、ほとんど存在しない。

B類 A類に対し、口縁部の長さは、4～5 cm前後と長



第107図 羽釜器種分類表

く、しっかりしたつくりである。調整はA類と同じである。焼成は、良好な瓦質のものが多く、口縁部形態の違いにより、B1類、B2類の2型式に分類できる。

B1類 直立もしくは、やや内傾する口縁部を有す。口縁部外面は、明瞭な段を施す。

B2類 口縁部外面は内弯気味に立ち上がり、口縁端部が屈曲する。口縁部内面が内弯するものもある。

C類 口縁部はA類に比べ直立気味である。調整はA類と同様である。瓦質と土師質の製品があるが、瓦質の製品は焼成不良のものが目立つ。

D類 直立もしくは、やや外傾する口縁部を有す。口縁部外面には、段、凹線、沈線を設ける。体部外面には粘土紐の接合痕が目立つ。体部外面のヘラ削りは、鏝直下まで削りを施さないものもあり、全体に粗い。内面のハケ調整も粗い。土師質製品が大半を占めるが、瓦質製品もある。

E類 内弯したのち端部付近が直立する口縁部を有す。口縁部外面に凹線を施す。体部外面は粗いヘラ削り、内面はナデ調整のものがある。土師質が大半を占める。

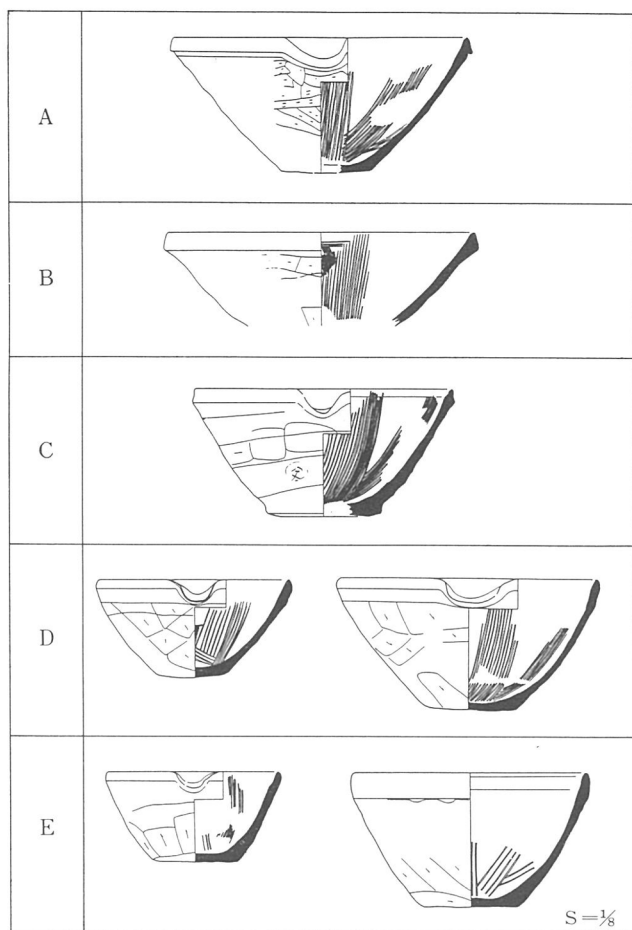
F類 E類と同様な口縁部を有すが、E類ほど明瞭な端部の直立はない。調整は、E類と同じである。

G類 F類と同様な口縁部を有すが、口縁部の厚さが厚くしっかりしている。調整は、E・F類と同じであるが、内面に粗いハケ目を施すものもある。土師質が大半を占める。

H類 直立もしくは、外傾する口縁部を有し、口縁部の長さは4～5cm前後と長い。調整は、G類と同じであるが、体部内面をナデ調整するものもある。

I類 器形、調整はD類とまったく同じであるが、口縁部外面に段、凹線、沈線を設けないことで区別できる。土師質のものが多く。

J類 口縁部外面に段、凹線、沈線を設けないことはI類と同じであるが、器高がI類に



S = 1/8

第108図 挿鉢器種分類表

比べ低く、厚さも厚い。

挿鉢

口縁部の形態により、4型式に分類した。

A類 口縁部は外傾する面をなし、面の下端が突出する。口縁端部は断面三角形を呈す。体部外面は口縁部直下までヘラ削りがおよび、内面はナデ調整ののち挿目を施すもの、ハケ調整ののち挿目を施すものがある。瓦質が主体を占める。

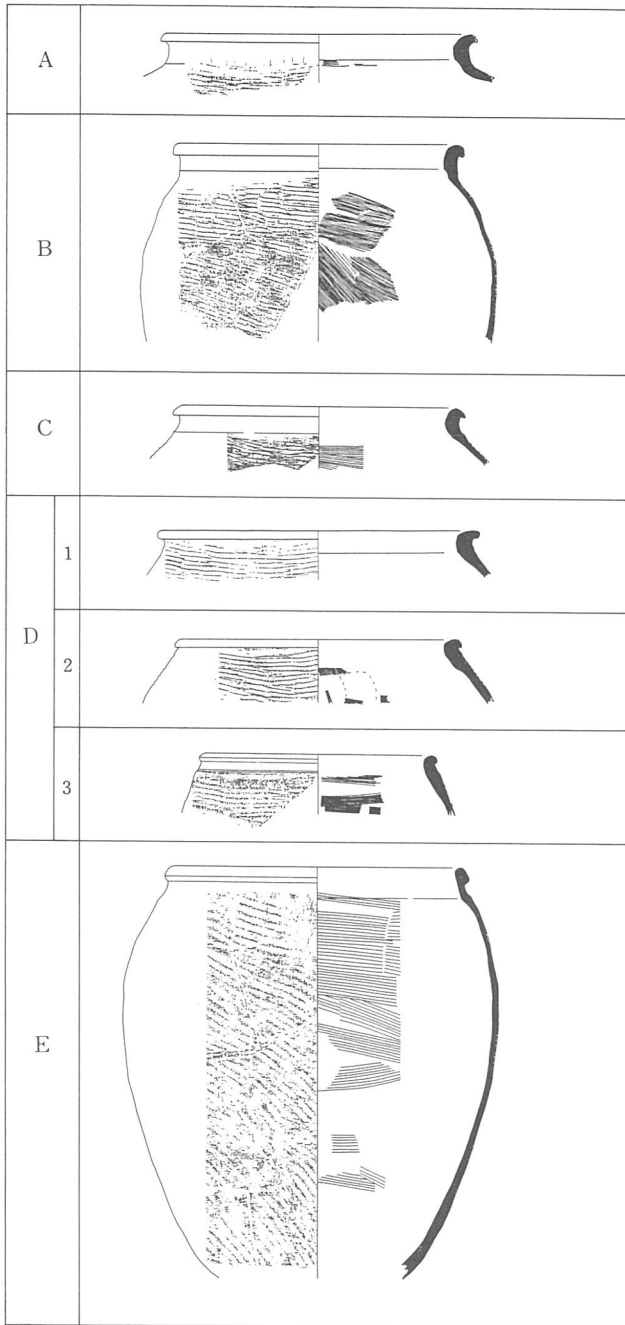
B類 器形、調整はA類と同じであるが、口縁部の外傾する面の下端が突出せず、「く」字形を呈して体部に移行する。瓦質が主体を占める。

C類 B類と同様な口縁部を有すが、外傾する面は凹面

を成し、体部外面のヘラ削り調整も粗く、粘土紐の接合痕が目立つ。瓦質の他に土師質の製品もある。

D類 口縁部は、口縁部直下に強いヨコナデ調整を施すことにより外傾もしくは、直立する面をもつ。口縁端部は、断面三角形のものと端部を丸く仕上げるものがある。体部外面のヘラ削り調整は粗く、粘土紐の接合痕が目立つものが多い。内面は、ナデ調整ののち挿目を施すもの、ハケ調整ののち挿目を施すものがある。挿目も、A・B類に比べ粗い。土師質製品に混じり、瓦質製品もある。

E類 口縁部に外傾する面をもたず、口縁端部は丸く仕上げる。口縁部直下の強いヨコナデ調整は施さない。土師質製品が主である。



甕

甕も口縁部に主体をおき、9型式に分類した。

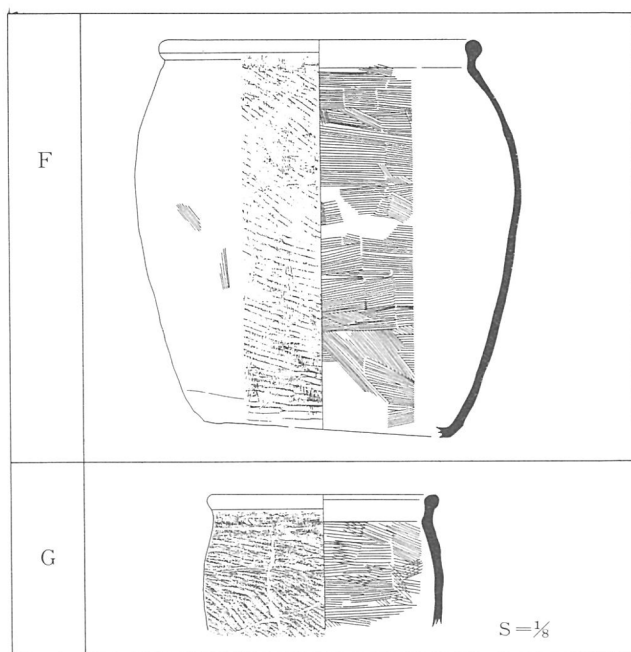
A類 肩の張る体部から直立する頸部がつき、口縁部は短く上外方に折り曲がる。口縁端部は面を成すもの、突り気味におさめるものがある。体部外面は、細かな平行叩き、内面は、ハケ調整のちナデ調整を施し、口縁部は、内外面ともナデ調整である。焼成良好な瓦質製品が主である。

B類 緩やかに肩の張る体部から、3 cm前後の直立する頸部がつき、口縁部は下方に短く折り曲がる。口縁端部は突り気味におさめる。体部外面は、平行叩き、内面はハケ調整を施す。口縁部は内外面ともナデ調整、頸部外面にヨコナデを施す。焼成良好な瓦質製品が主である。

C類 B類と同様な形態であるが、頸部の長さが、1.5 cm前後とB類に比べ短い。焼成良好な瓦質製品が主である。

第109図 甕器種分類表(1)

D類 緩やかに肩の張る体部に直接口縁部がつくものである。口縁部の形態、体部外面の調整の違いにより、3型式に分類した。



第110図 甕器種分類表（2）

D 1 類 口縁部は、外側に屈曲するものもしくは、下方に短く折れ曲がるものである。体部外面は、口縁部直下から平行叩きを施し、体部内面はナデ調整である。瓦質製品が主である。

D 2 類 玉縁状の口縁部がつく。体部外面は口縁部直下から平行叩きを施す。瓦質製品が主である。

D 3 類 口縁部の形態はD 2 類と同じであるが、体部外面の口縁部直下に一回の強い

ヨコナデ調整を施すことで、D 2 類と区別できる。瓦質製品に混り、土師質製品もある。瓦質製品は焼成不良のものが目立つ。

E 類 肩の張りの少ない体部に、直接玉縁を引きあげた口縁部を有す。口縁部直下に強いヨコナデを施す。体部外面は荒い平行タタキ、体部内面は比較的荒いハケ調整を施す。土師質製品が主体を占める。

F 類 肩の張りの少ない体部に、直立する短い頸部がつき、口縁部は玉縁状を呈する。体部内外面の調整は、E 類と同様であるが、頸部外面に強いヨコナデ調整を施す。土師質製品が主である。

G 類 肩の張らない体部に、やや上外方に直線的にのびる頸部がつき、口縁部は玉縁状を呈す。体部外面は粗い叩き、内面は粗いハケ調整である。土師質製品が主である。（小谷）

2. A 東地区

A 東地区からは、13～14世紀の遺構は検出されず、当該期のものが主である。

A 東-1-O S（第160図）

挿鉢（396） 挿鉢D類、復元口径約24.2cm、下半部を欠く。口縁付近は、指ナデによって、不明瞭な端面を作る。体部外面の削りは、下半で縦方向に、上方で横方向に施される。

内面は主に横方向の細かい刷毛目調整の後、放射状に挿目を入れている。一単位、8本以上の挿目を数える。 (藤田)

A東-06-O S (第157~159図)

本溝の出土遺物には、14世紀後半から16世紀後半のものが含まれている。遺物の種類には、瓦質土器、土師器、陶器及び土製品がある。

瓦質土器 瓦質土器には羽釜、鉢、甕がある。

羽釜 (361、363、365、367) A類(361)とC類(363、365、367)がある。A類のものは、口縁部の内弯が強く、端部は、ナデ調整のため平坦面をもつ。C類のものは比較的大型のもの(363、365)と小型のもの(367)があり、口縁端部がわずかに凹面をなすもの(363、367)もある。

鉢 (368~371) A類(369)、B類(368)、C類(370、371)の3型式がある。A類のものは体部がわずかに内弯気味に立ち上がり、口径に比して体部が深いものである。C類のものは口縁端部外面がわずかに凹面をなして立ち上がるもの(370)と内面が直線的なもの(371)に別れる。これらC類の体部内面には、横方向の細かいハケ目調整を施し、その後縦方向のすり目を施したものである。

甕 (373、374) A類(373)とB類(374)がある。A類のものは、口縁端部に面をもち、体部外面に叩き目調整が施されている。B類のものは、頸部が特にふくらんだもので、体部外面に叩き目調整が施されている。

土師器 土師器は羽釜、鉢、蓋がある。

羽釜 (362、364、366) C類(363)、D類(366)、H類(362)の3型式がある。C型式のものは口縁端部がわずかに凹面をなす。D型式のものは比較的小型で、口縁端部は内傾し、凹面をなす。鏝は外上方にのび、端部は口縁部同様凹面をなしている。H型式の口縁部はわずかに内弯し、G型式に近い形態を示す。口縁端部はわずかに肥厚し、凹面を呈する。

鉢 (372) D類に属する片口のすり鉢である。

蓋 (375) 口縁部を肥厚させたもので、鍋の蓋と考えられる。口縁部の外面はヨコナデ調整、体部外面はヘラケズリ調整を施し、内面はハケ目調整を施す。

陶器 (376) 備前のすり鉢である。口縁部はわずかに内傾し直線的に立ち上がり、体部との境には稜が認められる。16世紀後半のものであろう。

土製品 (377) 鼓形を呈した用途不明の土製品である。外面には指押さえ痕が明瞭に残り、直径7mmの円孔が穿たれている。 (岡本)

A東-07-O S (第160図)

瓦質羽釜 (393) 羽釜A類で、復元口径23.4cm、最大径29.5cm、鏝から下を欠損している。内傾する。口縁は、口縁部を平坦にナデ、外面も指によるナデで凹凸を作っている。内面は横方向に粗い刷毛目が施されている。(藤田)

A東-70-O O (第160図)

瓦質挿鉢 (395) 挿鉢A類、小片のため復元口径傾き等は、確実さを欠くが、推定31cm、口縁端は指ナデして、下方に少し張り出している。体部外面は横方向の削り、内面刷毛目調整した後、放射状に挿目を入れている。挿目は7本以上で一単位となっている。(藤田)

A東-04-O Z (第160図)

面子 (400) 計3点出土している。うち1点を図示した。直径2.5cm、厚さ0.7cm、重さ6g。瓦質土器片を加工したもので周辺をよく磨っている。今回出土面子の中では、最も小さいタイプである。時期は出土した畑から江戸時代の中で考えておく。(藤田)

A東-05-O Z (第160図)

面子 (401~404) 計9点出土したうちの4点を図示した。大きさに変化があり、図示したものは径3.9~2.5cm、厚さ0.8~0.6cm、重さ16~6gを計る。径4cm弱、重さ15g前後が平均的な面子の大きさのようである。図示したものは全て土師器片で、瓦質土器片の加工品も出土している。時期は前述のものと同じである。(藤田)

A東-9-O Z (第160図)

土師質火舎 (397) 「く」の字に内傾する口縁をもつ、鉢形の火舎。三脚をつける。口径22.2cm、最大径24.6cm、高さ9.4cmを計る。口縁付近を指ナデしている他は、外面は全体的にヘラ等による粗いナデ調整が施され、内面下手は細かい刷毛目調整がみられる。(藤田)

A東-85-O W (第160図)

瓦質羽釜 (394) 羽釜B類、復元口径約30cm、最大径約36cm、鏝から下を欠損している。直立気味の口縁は外面を指ナデして凹凸を作っており、口縁部もナデで平坦面を作る。内面には粗い横方向の刷毛目を施している。土師質に近い生焼けのような焼成である。(藤田)

A東-62-O X (第160図)

面子 (398) 径5.5cm、厚さ0.9cm、重さ35gを計る。土師質の甕ないし鉢の薄い胴部

片を加工しており、器面に細かい刷毛目痕を残す。周囲を粗く打ち欠いて形を作った後、磨って角を落としている。土器そのものが軟質なため、端部の欠損、剥落が著しい。今回出土した面子の中では最大のものである。時期を限定し難いが、江戸時代の中で考えておきたい。

A東-77-OX (第160図)

面子(399) 直径3.1cm、厚さ0.8cm、重さ12g。土師質の土器片を再加工している。土器片のもとの形態は不明。周辺を粗く磨っている。時期は前述のものと同じであろう。

(藤田)

3. A西地区

A西-172-OX (第156図)

瓦質播鉢(358) 口縁部はナデ調整、体部外面はヘラケズリ整形を施す。また、体部外面には粘土紐の接合痕2条が明瞭に残っており、粘土紐の高さは約4cmとなっている。外面灰褐色(7.5Y R4/2)、内面褐灰色(7.5Y R6/1)を呈する。口径28.1cm、器高13.9cmを計る。体部の下位1/5の部分にススが付着しており、火にかけられた可能性がある。

A西-13-OO (第156図)

土師質火舎(357) 全面ナデ調整で、色調は内外面とも橙色(5Y R6.5/6)を呈する。胎土はやや粗い。全体の1/3ほどが遺存するが、わずかに歪みが認められる。口径約19.4cm、器高8.4cmを測る。

(宮野)

4. B地区

B-2109-OS (第112~119図)

2109-OSからは羽釜、播鉢、甕、瓦質・土師質皿、鍋、鉢、壺、火舎、井筒、瓦が出土した。染付の碗も少量出土したが、上層(近現代の水田層)からの混入の可能性が考えられる。

羽釜(13~33) A類(14~32)とB類(33)が出土した。A類の羽釜は復元口径16~17cmを測るもの(14、16)、復元口径20~25cmを測るもの(15、17~19、22~24)、復元口径26~29cmを測るもの(20、25~27、30、31)、復元口径30cm以上のもの(21、32)がある。33は復元口径30.9cmを測る。A類には口縁部外面に段をもつものの他、凹線を施すもの(15、16、19、23、25)がある。A・B類は瓦質製品ばかりである。1は、水平にのびる鏝に内弯し

たのち口縁端部付近が短く直立する。瓦質製品で時期的にはA類より古いタイプの羽釜である。

挿鉢 (34~45) A類(34~39・42)、B類(40・41、43~45)が出土した。復元口径27~28cm前後を測るもの(34、40)、復元口径30~33cm前後を測るもの(35~38、41~45)、復元口径35cmのもの(39)がある。内面の調整は、ナデ調整の後挿目を施すもの(34、36、40、45)と細かなハケ調整の後挿目を施すもの(37、41~44)がある。35、38、39、42は遺存状態が悪く内面の調整は不明である。瓦質製品が主である。

甕 (47~54) A類(51)、B類(49、50)、C類(52)、D1類(53)がある。47は、肩の張る体部に直立する頸部がつき、大きく外反して開く口縁部を有す。口縁端部は面を成す。48は、肩の張る体部に直立する短い頸部がつき、上外方に直線的にのびる口縁部がつく。2109-O S出土の甕は、瓦質製品が主であるが、54は土師質である。48は、他の瓦質甕に比べ厚手で焼成も須恵質に近いものである。47、48は、A類より古いタイプのものと考えられる。

皿 (63~73) 皿には口径7.3~7.7cm、器高0.9~1.4cmの土師質の小皿(63~65)と口径9.8~11.0cm、器高1.7~2.3cmの瓦質の小皿(66~73)がある。前者は、平らな底部から直線的に上外方にのびる口縁部がつき、口縁端部は丸く仕上げる。63は、底部中央が凸条に盛り上がる「ヘソ皿」である。底部外面は指押さえ、口縁部外面にヨコナデを施す。内面はナデ調整である。後者は、丸味をもつ底部から内弯気味に上外方にのびる口縁部を有すもの(66~70)と外反気味に上外方にのびるもの(71~73)がある。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面はヨコナデを施す。内面は細かなハケ調整を施す。66、69、71は、内面調整不明である。

鍋 (74~77) 体部は直線的に上外方にのび、外側に張り出したのち内弯気味に直立もしくはやや上外方にのびる口縁部を有す。口縁端部は、外傾する面を成すもの(74、75)、平面を成すもの(76)、内傾する面を成すもの(77)がある。体部外面はヘラ削り、口縁部は内外面ともヨコナデにより仕上げる。体部内面はナデ調整であるが、横方向のハケ調整により仕上げるもの(74)がある。すべて瓦質である。

火舎 (55、56) 55は、円形の瓦質の火舎で、口縁端部は肥厚し面を成す。口縁端部から約3cm下に凸帯が巡り、その間に文様を施す。57は正方形になるものと考えられる瓦質の火舎で、4隔に脚が付く。

井筒 (58~62) 瓦質の井筒で、直線的に上方あるいはやや内側にのびる体部に、肥厚

する口縁部を有す。口縁端部は平面を成すもの(60, 61)と口縁部直下に太い凸帯がつくもの(58, 62)がある。

鉢 (46, 57) 46は一見挿鉢のように見えるが、内面に挿目を施さないもので、口縁部を上方につまみあげる。土師質である。57は、厚目で上外方に内弯気味にのびる瓦質の鉢である。

壺 (56) 須恵質の壺で、大きく外反する口縁部がつき、口縁端部は丸くおさめる。

(小谷)

5. C地区

C地区からは、15～16世紀の遺物が多量に出土した。主要なものには、C-280-O S、49-O S、1-O Sがある。これらの溝は、1、2、3次調査と分割して調査されたため調査終了後に、一連の溝と把握されたものである。調査に際しては、280-O Sのみ分層発掘され、他の1-O S、49-O Sと層位的に一致しないため、C-280-O Sは層位的に記述し、他は一括して記述する。

C-280-O S (第120～124図)

280-O Sの埋土は前述の通り4層に分層できるが、第1層は溝の一部分にのみ存在する層で遺物はあまり含まない。第2～4層は多くの遺物を含み、第3次調査では3層に分けて遺物を取りあげた。遺物の大半は、小破片である。

第2層出土遺物 第2層には、羽釜、挿鉢、甕、井筒がある。

羽釜 (82) A類が出土した。炭素は付着していないが瓦質製品と考えられる。

挿鉢 (83～85) B類(83)、D類(85)、E類(84)がある。83は瓦質で、84、85は土師質ある。

甕 (78～80) D2類(78, 79)、D3類(80)がある。78、79は瓦質であるが、80は遺存状態が悪く不明である。

井筒 (81) 81は瓦質の井筒で、口縁直下に太い凸帯を有すものと考えられるが、小破片のため詳細は不明である。

第3層出土遺物 第3層には、羽釜、挿鉢、甕、井筒、蓋がある。

羽釜 (86～91) A類(88)、B1類(89～91)、C類(87)がある。86は、口縁部欠損のため形成は不明である。すべて瓦質であるが、86、87は焼成不良である。

挿鉢 (96～99) B類(96, 97)、C類(98)、E類(99)がある。99以外はすべて瓦質である。

甕 (100~107) D 1 類(101、104)、D 2 類(102、103)がある。100は、肩の張る体部に直立する頸部がつき、口縁部は外反すると考えられる。105は「く」字形に屈曲する口縁部で比較的厚手である。106は大きく外反する口縁部で、口縁端部は上下は肥厚し、凹面を成す。107は、肩の張らない体部から連続して口縁部に移行し、口縁部は肥厚する。口縁部外面に一条の凸帯が巡る。

第4層出土遺物 第4層には、羽釜、挿鉢、甕、井筒、須恵質の鉢がある。

羽釜 (114~116) A 類(114、115)がある。A 類はすべて瓦質である。116は口縁部欠損のため不明である。

挿鉢 (117~122) A 類(118~120)、D 類(121、122)がある。A 類は瓦質で、D 類の122は土師質である。

甕 (108~111、113) D 3 類(110)がある。瓦質であるが、焼成不良である。108は上外方に大きく外反する口縁部がつく。109は、直立する頸部に短く開く口縁部がつく。113は口縁部の小破片で、須恵質であると考えられる。

井筒 (112) 口縁端部を欠損しているが、口縁部が肥厚する瓦質の井筒である。

鉢 (117) 口縁部は肥厚し、口縁下端は丸味をもち体部に移行する須恵質の鉢である。

1、2次調査の280-O S 出土の遺物には、羽釜、甕、挿鉢、井筒、鉢、蓋、瓦がある。

羽釜 (123~126) A 類(123、125、127、128)、B 1 類(129)、H 類(130)がある。A・B 1 類は瓦質であるが、125、127は焼成不良である。H 類は瓦質である。126は口縁部欠損のため詳細は不明であるが、A 類にあたるものであると考えられる。124はJ 類になるものと考えられる。

挿鉢 (139~142) A 類(140、141)、D 類(139)、E 類(142)がある。A 類は瓦質で、D・E 類は土師質である。

甕 (131~134) A 類(131)、C 類(133)、D 1 類(132)、D 2 類(134)がある。すべて瓦質であるが、134は焼成不良である。

鍋 (145) 外方に張り出し、さらに上方に立ちあがる口縁部を有す。口縁端部は内傾する面を成す。瓦質である。

鉢 (136) 瓦質の片口の付く鉢である。体部は内弯して上外方にのび、口縁部は外反し、端部は丸く仕上げる。

火舎 (146) 円形を呈する瓦質の火舎である。口縁部は肥厚し、口縁端部から約1.5cm 下に凸帯が巡り、その間に文様を施す。瓦質である。

井筒（143、144） 143は口縁部直下に太い凸帯が巡り、口縁部は肥厚する。144は口縁部が肥厚するもので、ともに瓦質である。

蓋（137、138） 天井部は平らで、外反気味に下外方に下る口縁部がつく。土師質である。

唐津焼（135） 唐津焼の丸皿である。

軒平瓦（147） 連珠文をもつ軒平瓦である。

軒丸瓦（148） 内区外周に珠文帯がめぐり、中央に巴文を施す軒丸瓦である。

丸瓦（150～152） 凸面はナデ調整、凹面は布目痕。

平瓦（149、153～157） 凸面は布目痕。指押さえ、凹面に糸切り痕がみられる。149は凹面に文字が確認できるが、小破片の為不明である。

C-49-O S、1-O S（第125～130図）

C-280-O Sと一連の溝である。

羽釜、甕、播鉢、鍋、火舎、蓋、瓦、井筒が出土する。

羽釜（123～130） 羽釜A類(127、128)、B2類(129、130)、C類(123～126)がある。全て磨滅した小破片である。

甕（131～134） 甕B類(131)、C類(133)、D2類(132、142)がある。体部外面に叩きを施し、内面ハケ目調整である。

播鉢（139～142） 播鉢A類(141)、C類(140)、D類(139、142)がある。各時期のものが出土する。

鍋（145） 口縁部は屈曲してのびる。瓦質である。

火舎（146） 瓦質である。直立してのびる口縁部直下に、スタンプによる文様を施す。

蓋（137、138） 共に土師質である。口径に大小がある。

井筒（143、144） 口縁部直下に鏝をもつもの(143)と鏝をもたないもの(144)がある。144は大型で、外面に細かい叩き、内面は、口縁部直下は横方向の刷毛目調整、のちナデ調整をおこなう。土師質の焼成である。

瓦類（147～149、150～157） 軒平瓦(147)、軒丸瓦(148)、丸瓦(150～152)、平瓦(149、153～157)がある。軒平瓦は、焼成良好で炭素が付着しない。文様は、珠文のみである。軒丸瓦は、巴文である。軒平、軒丸瓦は、一対になるものと考えられる。丸瓦は、玉縁が短く、炭素が付着せず、同一型式である。凸面肩部と下端部に二条の軒線を施すもの(150、152)と施さないもの(151、152)がある。平瓦は、凹面に布目痕、凸面に縄目叩きがある。149は、小破片ながら、凹面に線刻がある。文字は判明しない。 （小谷・渋谷）

6. D地区

D地区は、室町時代、15～16世紀にかけての遺物の出土例は多く、一括遺物も多量に出土する。

D-176-OP (第111図)

土師器皿、瓦器皿、瓦質播鉢が出土する。

土師器皿(1～3)は口径6.6～7.2cm、器高1.2cm前後と小さい。瓦器皿(4)は、口径11.6cm、器高2.4cmを測り、内面にはわずかにミガキが残存する。瓦質播鉢(5)は、A類で、口縁部のナデ調整がきつく、口縁部内面は凹む。薄手のつくりである。14世紀後半と考えられる。

D-85-OS (第111図)

羽釜(9) A類である。口縁部に明瞭な段を有す。

D-91-OS (第111図)

羽釜(11) 羽釜Aである。口縁部には、沈線によってつくられた段をもち、須恵質の焼成である。

甕(12) 甕Aである。体部外面には左上りの叩きがある。

D-112A-OO (第156図)

羽釜が出土する。

羽釜(359、360) 羽釜Dが完形で2点出土する。体部外面は削り調整を施す。

D-180-OO (第111図)

瓦器、土師器が出土する。

瓦器(7) 皿で口径11.2cm、器高1.9cmを測る。見込みから口縁部にかけてはナデ調整する。

土師器(6) 皿で、口径8cm、器高1.2cmを測る。口縁部の立ち上がりがきつい。14世紀後半から15世紀初頭と考えられる。

D-190-OP (第111図)

羽釜(8) 羽釜A類が出土する。内外面磨滅する。

D-269-OX (第111図)

甕が出土する。

甕(10) D2類である。須恵質の焼成である。

D-278-OX (第132図)

羽釜、插鉢、甕、火舎、白磁が出土する。

羽釜 (171~174) C (171、172、173)、H (174)がある。全て磨滅した小破片となっている。171が瓦質で、他は土師質である。

插鉢 (169、176) A類が出土する。169は、外面に叩きを残した状態である。

甕 (175、176) B (175)、D 3 (176)がある。

火舎 (176、177) 176は、瓦質で、口縁部外面にスタンプで文様を施す。178は、直立する口縁部破片で、外面に文様は施さない。

白磁 底部破片である。高台径4 cm前後を測る。

D-352-OO (第131図)

羽釜、插鉢、甕、火舎、壺が出土する。D-351-OSの東側のくぼみ状の凹地に堆積した遺物である。

羽釜 (161~163) 羽釜C (162)、D (161、163)がある。Cは、瓦質で、Dは土師質である。163は、段に一孔を穿つ。

插鉢 (164) A類がある。焼成は、良好で、瓦質である。

甕 (165、166) 甕B、D 3がある。Bは瓦質、D 3は土師質である。

火舎 (167) 小破片で、口縁部外面に、刻み目を入れる。土師質である。

壺 (168) 口縁部の破片で壺と考えられる。陶器である。

D-355-OO (第138図)

量的に少なく磨滅した破片が多い。羽釜、插鉢、甕、火舎、青磁、瓦が出土する。

羽釜 (234) A類ばかりで、口縁部外面の段が凹線や沈線をつけるものがあり、内面刷毛目は、細かいものから粗いものまでである。外面煤の付着が著しい。

插鉢 (235) A (235)、B類が出土する。A類は、体部外面削り調整を施す。

甕 甕は口縁部破片が存在せず、体部破片がある。体部外面は叩き、内面は刷毛目調整を施す。瓦質のみである。

火舎 (232) 瓦質で、内湾する口縁部を有し、端部は平坦である。

青磁 (233) 椀で、蓮弁文を施す。

瓦 (231) 軒平瓦、丸瓦、平瓦、鳥衾瓦が出土する。231は、巴文をもつ。

D-88-OO (第131図)

羽釜、插鉢が出土する。

羽釜 (158、159) A・B類である。共に小破片となっている。

播鉢 (160) A類である。

D-127-O S (第133、134図)

土師器皿、瓦器皿、羽釜、播鉢、甕、火舎が出土する。瓦類の出土量は多い。

土師器 (187) 皿である。口縁部から底部にかけて丸みを持ち、口縁部のナデ調整は目立たない。内外面磨滅する。

瓦器 (188) 皿である。口径10.5、器高2.1cmを測る。口縁部はナデ調整し、内面はナデ調整で、刷毛目調整は施さない。

羽釜 (179～186、191) A (181～183、185)、B 1 (184)がある。他に、他地域からの搬入品と考えられる186や土師質の焼成で口縁端部が玉縁状になるもの(179)口縁端部のおりまげが更に短くなり、瓦質の焼成のものがある。179、180は、土師質から瓦質への転換点に位置する資料と考えられ、14世紀後半代と考えられる。185の資料以外、煤の付着はない。186は、口縁部上位にやや上向きの鏝をつける。内面は、細かい刷毛目調整を横方向に施す。

播鉢 (192、193) A類がある。192は、体部外面に粘土紐の接合痕がある。削り調整はほどこされない。共に瓦質である。

甕 (189、190、194、195) B (190、194)、D 3 (195)がある。B類の体部外面叩きは細かく、D 3類は粗い。常滑産の甕(189)があり、混入と考えられる。

火舎 (196) 瓦質である。体部は直立し、口縁部は内側におりまげられる。上端には縦方向に刻み目状の文様を付す。脚部は、四方に有すると考えられる。

瓦 (197) 軒平瓦、軒丸瓦(197)、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦は、巴文で、外面には炭素は付着しない。

D-148-O S (第136図)

瓦器皿、土師器羽釜、瓦質羽釜が出土する。

瓦器皿 (216、217) 口径8cm、器高1.4cmと口径9.8cm、器高1.4cmのものがある。共に口縁部をナデ、底部指おさえ調整をおこなう。

土師器羽釜 (208～210) 直立する体部にわずかに内弯する口縁部をつけ、口縁端部はわずかに直立するもの(208)や外反するもの(209、210)がある。体部上半につける鏝は、水平(208)、上向き(209)、下向き(210)がある。白色粒を含む。

瓦質羽釜は、A類である。土師器羽釜と瓦質羽釜の共伴例である。14世紀後半～15世紀

前半代と考えられる。

D-249-O S (第136図)

羽釜、播鉢、甕、面子、瓦がある。上層(198~207)と下層(212~215)の層位区分がある。

下部層 羽釜、播鉢、甕、軒丸瓦、面子が出土する。

羽釜(198~201) A(201)、C(198~200)、I(202)がある。全体に磨滅する。

播鉢(203、204) D類がある。203は瓦質、204は土師質である。

甕(205) D2類がある。

軒平瓦(206) 巴文で、外面に炭素が付着する。

面子(207) 平瓦を打ち欠いて作られている。

中部層 羽釜、播鉢、甕が出土する。

羽釜(212、213) C(212)、H(213)が出土する。H類は、須恵質の焼成である。C類は、土師質である。

播鉢(214) B1類がある。瓦質である。

D-351-O S (第137、138図)

1~3層の層位区分があるが、出土遺物は各層によって時期的に区分されず、1層から3層まで、各時期のものが混在する。羽釜、播鉢、甕、鍋、瓦、火舎がある。

羽釜(223~227) A(223)、B1(225、226)、C(224)、H(227)があり、かなりの時期差がある。

播鉢(218、219) D(218)、B(219)がある。

甕(220~222) B(222)、C(212)と口縁部に面をもち、時期的に古いもの(220)がある。共に瓦質の焼成である。また、口縁部に厚みをもたせ、断面台形を呈するもの(229)もある。内面は、荒く横方向に刷毛目を施す。

鍋(228) 瓦質の焼成で、口縁端部は面をもつ。体部外面は削り、内面横方向の刷毛目、口縁部は内外面ナデ調整をおこなう。

瓦(230) 平瓦、丸瓦(230)、軒平瓦、軒丸瓦など、瓦類は小破片となったものが、かなり出土する。230は内面に「丸」の文字がある。

D-01-O X (第139図)

羽釜、播鉢、鉢、甕、蓋、陶器甕がある。

羽釜(238) 瓦質で焼成良好である。B2類である。

播鉢 A、B類がある。

甕 (239、240) C (239)、D 1 (240)類がある。外面に叩き調整、内面刷毛目、口縁部ナデ調整をおこなう。他に産地不明の陶器甕口縁部がある。

鉢 (241) 口縁部内弯がきつい。外面削り調整、内面ヨコ方向の刷毛目調整を施す。

(渋谷)

D-02B-OX (第143~155図)

羽釜、搦鉢、甕、鍋、土師器蓋、皿、火舎、香炉、壺、鉢、井筒、陶磁器に混り、古墳時代の須恵器、鎌倉時代の瓦器碗の小破片が出土した。

羽釜 (270~292) 羽釜はB 2類を除くすべての型式が出土した。A・B 1類は量も少なく小破片のものが多。C類(270~273)は、口径15.6~17.6cmを測るもの(270、271)と24.5~25.4cmを測るもの(272、273)がある。これらはすべて土師質である。D類(280~290)は、口径18~19cm前後を測るもの(280、281)と23~25cm前後を測るもの(282~289)、30cmを越えるもの(290)がある。瓦質製品は280~284で、土師質製品は285~290である。280、281、285の口縁部内面は直立するが、外面は少し内傾気味であり、C類に近いものと考えられる。E類(274)は復元口径25.8cm、F類(275)は復元口径27.6cmを測り、両者とも土師質製品である。G類(276)は口径28.3cmを測り、土師質製品である。H類(277~279)は口径26.8~30cmを測り、土師質製品である。I類(291)は口径25.3cmを測り、土師質製品である。J類(292)は復元口径40.3cmを測り、土師質製品である。02-OX出土の羽釜は完形品が多く、外面には煤が付着しているものが大半である。

搦鉢 (293~309) 搦鉢はA類からE類がある。A・B類は小破片である。C類(293)は口径27.7cm、器高13.8cmを測り、瓦質製品である。D類(294~296、298~302、304~307)は、口径20~22cm前後、器高9.2~10.6cm前後を測るもの(298~302)と口径27.5~30cm前後器高14.5~18.5cm前後を測るもの(294~296、304~307)がある。208、300、304は、瓦質製品である。E類(297、303、308、309)がある。口径18.4~20.3cm、器高9.8~10.4cmを測るもの(297、303)、口径24.8cm、器高14.6cmを測るもの(308)、復元口径32.4cmを測るもの(309)がある。E類は、すべて土師質であり、303、309は比較的軟質である。02-OX出土の搦鉢には内外面に煤が付着したものがみられ、転用された可能性が考えられる

甕 (310~321) 甕はB類からG類がある。B類は小破片である。C類(310、311)は復元口径28.8~30cmを測り、瓦質製品である。D 2類(312)は復元口径29.6cmを測り、瓦質製品である。D 3類(314~316)は復元口径24.4~30.4cmを測り、瓦質であるが焼成不良で

軟質のものが多い。E類(313)は口径31.0cmを測り、土師質製品である。F類(317、319)は口径30.4～33.0cmを測り、土師質製品である。G類(318)は口径24.0cmを測り、土師質製品である。320は口縁部が肥厚するもので、端部は平面を成す。土師質製品である。321は口縁部の破片で、かなり大型になるものとする。口縁部は肥厚し、端部は平面を成す。口縁部外面はナデ調整、体部外面は縦方向のハケ調整、内面は不整方向のハケ調整を施す。土師質製品である。

皿(322～329) 皿には瓦質の皿(323、327、328)と土師質の皿(322、324～326、329)がある。前者の323は口径5.8cm、器高1.2cmを測り、平らな底部に外反して上外方にのびる口縁部がつく。端部は丸く仕上げる。底部外面は指押さえ、口縁部外面は一回のヨコナデを施す。内面は粗いハケ調整である。327、328は口径8.6～10cmを測り、平らな底部に短く直立する口縁部がつくもの(328)と内弯気味に上外方にのびる口縁部のつくもの(327)がある。底部外面は指押さえ、口縁部外面はヨコナデを施す。内面はナデ調整(327)とハケ調整(328)がある。後者の322、324、326は口径5.6～7.4cm、器高1.2～1.4cmを測る。底部は平らで直線的に上外方にのびる口縁部がつくもの(322)、外反して上外方にのびる口縁部がつくもの(324)、丸味をもつ底部に内弯気味に上外方にのびる口縁部がつくもの(326)がある。底部外面は指押さえ、口縁部外面はヨコナデ、内面はナデ調整で仕上げる。325は平らな底部に直線的に上外方にのびる口縁部がつき、全体的に厚い。329は平らな底部には上外方にのびる口縁部がつき、底部には断面三角形を呈する高台がつく。

香炉(330) 口径5.8cm、器高6.6cmを測る土師質の香炉である。平らな底部に、脚が三ヶ所に付く。

壺(331) 口径8.4cm、器高7.8cmを測る須恵質の壺である。平らな底部に体部は内弯して上方にのび、短い直立する口縁部がつく。体部外面はヘラ削り、内面はナデ調整、口縁部外面から肩部外面はナデ調整、内面はナデ調整である。

蓋(332、333) 口径22～25.2cm、器高3.9～4.9cmを測る。比較的丸味をもつ天井部から下外方に直線的に下る口縁部をもつ。端部は丸く仕上げる。外面はナデ調整、内面はハケ調整を施す。土師質であるが、内外面とも煤が付着しているものがある。

鍋(334～337) 鍋には、瓦質のもの(334、335)と土師質のもの(336、337)がある。前者は外方に張り出し、さらに上方に立ち上がる口縁部を有す。口縁部は面を成す。後者のうち337は、口縁部直下に緩やかな屈曲が認められ、体部外面に粗い格子タタキを施す。336は、口縁部直下に突帯状の凸部が認められ、体部外面に平行タタキを施す。焼成は堅

緻である。

火舎 (338、339) 正方形を呈すると考えられる瓦質の火舎である。その他に円形を呈するもので、平らな底部に脚が三ヶ所につく、土師質の火舎もある。

鉢 (340、354) 復元口径36.0cmを測り、体部は直線的に上外方にのび、口縁部は、内方に大きく内弯するもの(340)と平らな底部から直線的に上外方にのびる体部に、短く外反する口縁部がつくもの(354)がある。両者とも土師質で、粘土紐の接合痕跡が認められる。

井筒 (356、357) 復元口径60.4~66.6cmを測る。直線的に上方にのび、端部は平面を成すもの(356)とたい凸帯がつくもの(357)がある。両者とも瓦質である。

瓦 (353) 瓦は小破片ばかり出土し、丸、平瓦がある。353は軒丸瓦で、内区外周に珠文帯がめぐり、中央に三つ巴文が施される。

瀬戸焼 (323、344、349) 瀬戸焼には天目茶碗(343、344)と小皿(349)がある。天目茶碗は口縁部直下でわずかにくびれたのち、短く外反し、端部は丸く仕上げる。内外面には褐色の鉄釉がかかる。小皿は平らな底部に断面台形を呈する高台がつき、体部は内弯して上外方にのび、口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸く仕上げる。全体に灰釉がかかる。内外面とも貫入が著しい。

白磁 (341、347) 白磁には、小皿(341)と碗(347)がある。(341)は高台がつき、内弯気味に上外方にのび、口縁部は大きく外反する。347は碗の底部で、高台は比較的幅広で削り出しが浅いため、底部の器肉が厚い。灰白色気味の釉がかかり、体部下半と底部には施釉されない。底部内面に沈線状の段を施す。

青花皿 (342) 口径9.0cm、器高2.1cm、高台径4.0cmを測る。口縁部は強く外反する。

青花碗 (345~352) 直線的に上外方にのび、端反りの口縁部を有すもの(346)、内弯気味に口縁部に続くもの(345、350)がある。高台は厚目で若干高いもの(351)と見込み部分がゆるやかに盛り上がる饅頭心の系統にあるもの(352)がある。 (小谷)

D-100-OX (第140~142図)

層位的に区分され、遺物の取り上げもなされているが、最下層と上層に遺物の型式差は存在しない。

土師器皿、羽釜、挿鉢、甕、井筒、瓦などある。

土師器 (242~245) 皿がある。口径9cm前後、器高1.6~1.8cmを測る。口縁部ナデ調整、底部指おさえ調整である。

羽釜 (254~260、262~269) A (254、263)、B 1 (255~257、265 ~269)、B 2 (264)、D (258~260)がある。他に口縁部外面に段を有さない262もあり、時期的には、A類の直前段階に位置するものと考えられる。D類は土師質で、それ以外はすべて瓦質である。A、B 1、B 2 共に調整技法は同一である。

挿鉢 (246~248) B類、備前挿鉢がある。246は、内外面煤の付着があるが、内面はとりわけ激しい。248は、備前挿鉢で、口縁部に沈線がめぐらされ、口縁端部の突出が激しい。15世紀後半~16世紀前半の時期と考えられる。

甕 (249~252) B (251)、D 1 (250、252)がある。また、頸部を有し、ほぼ水平にのびる口縁部をもつ249があり、時期的には古いと考えられる。体部外面は叩き、内面は刷毛目調整を施す。

井筒 (253) 直立する体部を有し、口縁端部は面をもつ。内面はヨコ方向に細かい刷毛目、上部は削り調整、外面は、上端をヨコ方向に削り、下端は縦方向に削り調整する。

D-272-O X (第111図)

羽釜が出土する。

羽釜(8) A類である。全体に磨滅する。

D-298-O X (第139図)

羽釜、甕、瓦が出土する。

羽釜 (237) 土師器で、口縁部が玉縁状になる。罫は水平につける。14世紀後半代と考えられる。甕 体部破片で、瓦質である。瓦 丸瓦、平瓦がある。全て小破片である。

D-263-O W (第139図)

羽釜、挿鉢、陶器、瓦が出土する。

羽釜 (236) A類である。

挿鉢 A類である。

陶器 産地不明ながら、体部破片がある。外面には叩き、内面はナデ調整である。

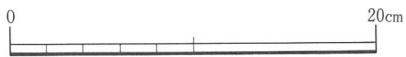
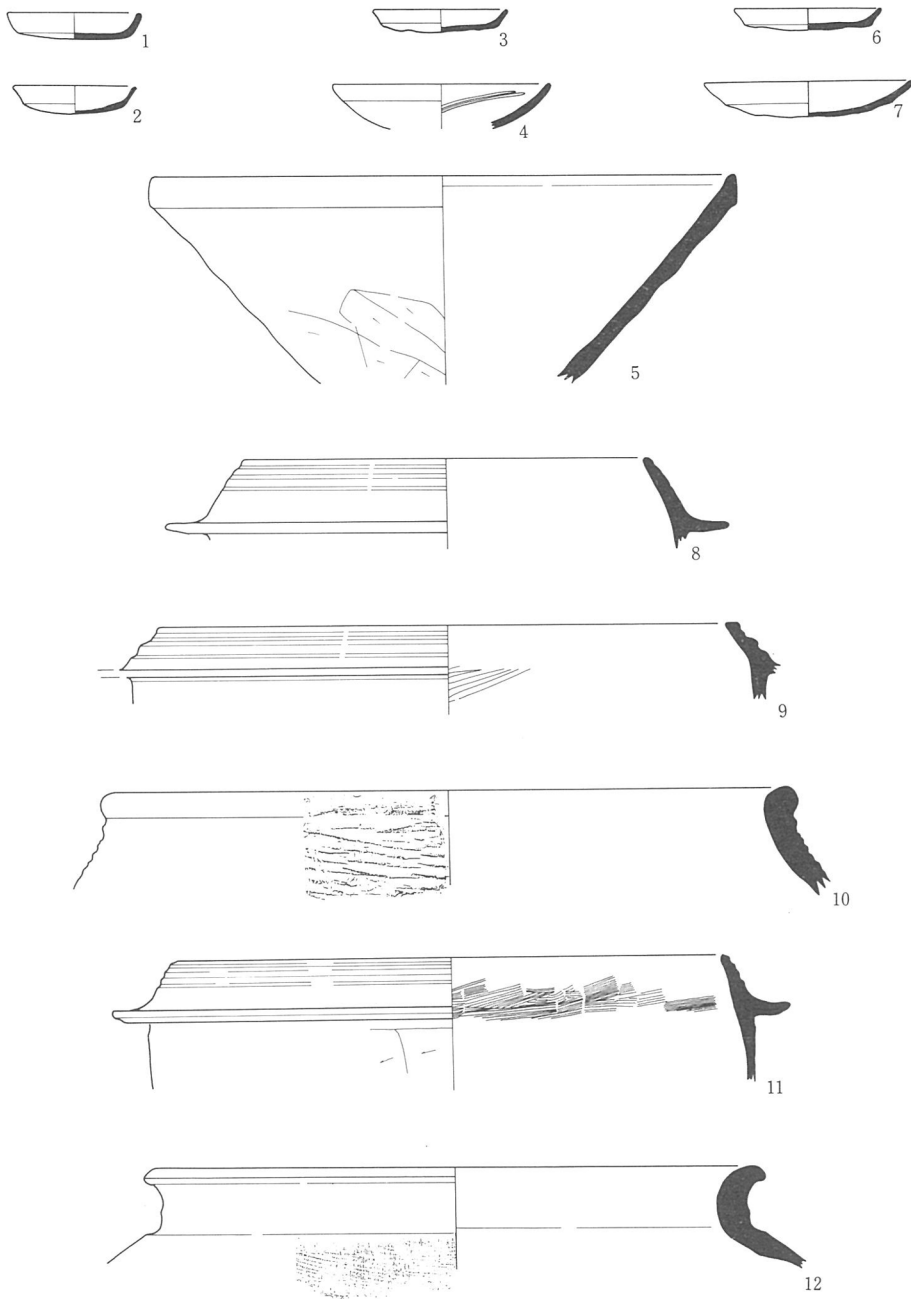
瓦 丸瓦、平瓦がある。小破片である。 (渋谷)

D-117A-O X (第159図)

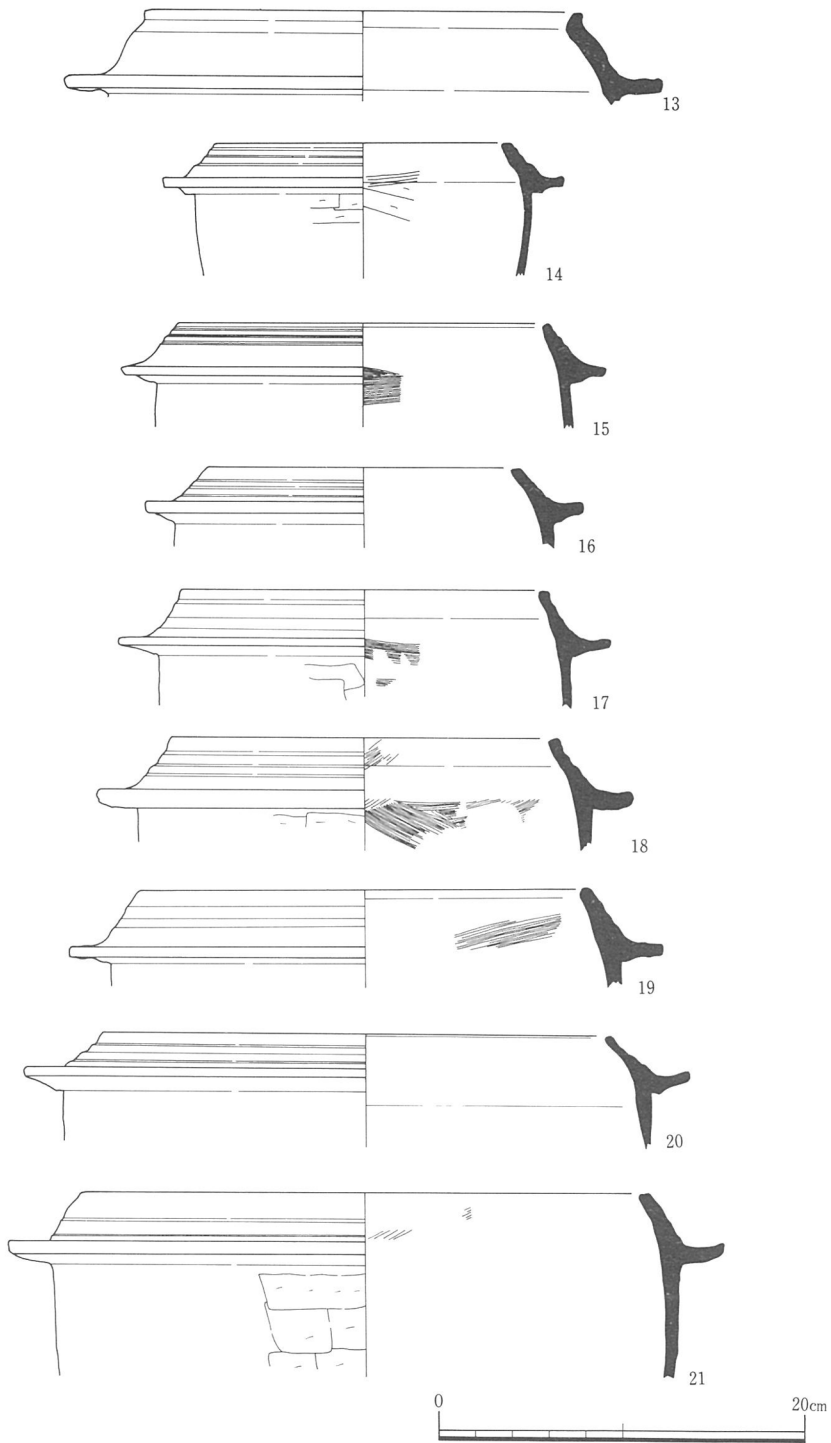
土師器皿、羽釜、挿鉢が出土する。

土師器皿 (378~391) 口径8 cm前後、器高1 cm前後を測る。良好は焼成である。

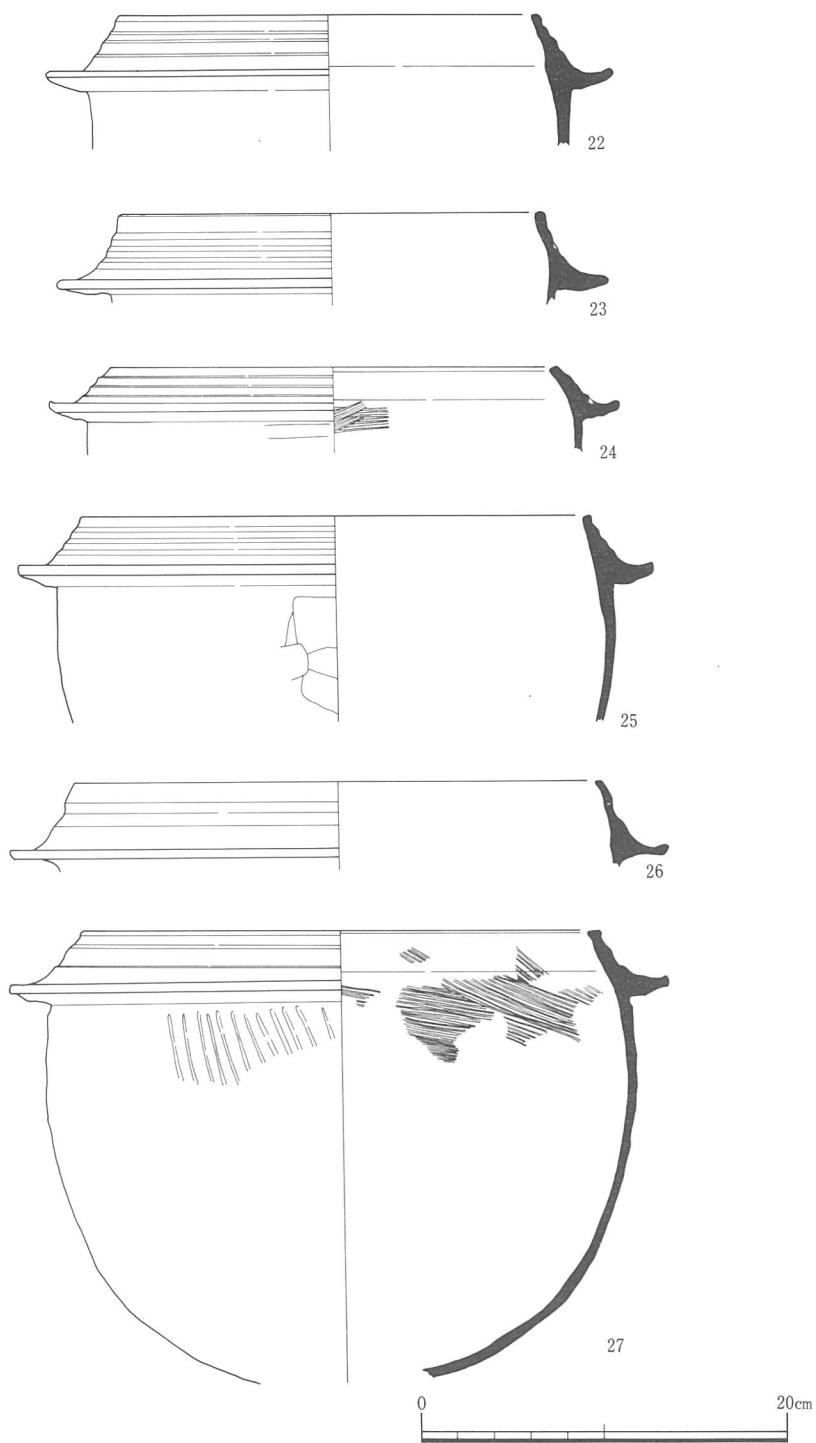
羽釜 (392) 羽釜Aが出土する。完形で瓦質製品である。 (宮野)



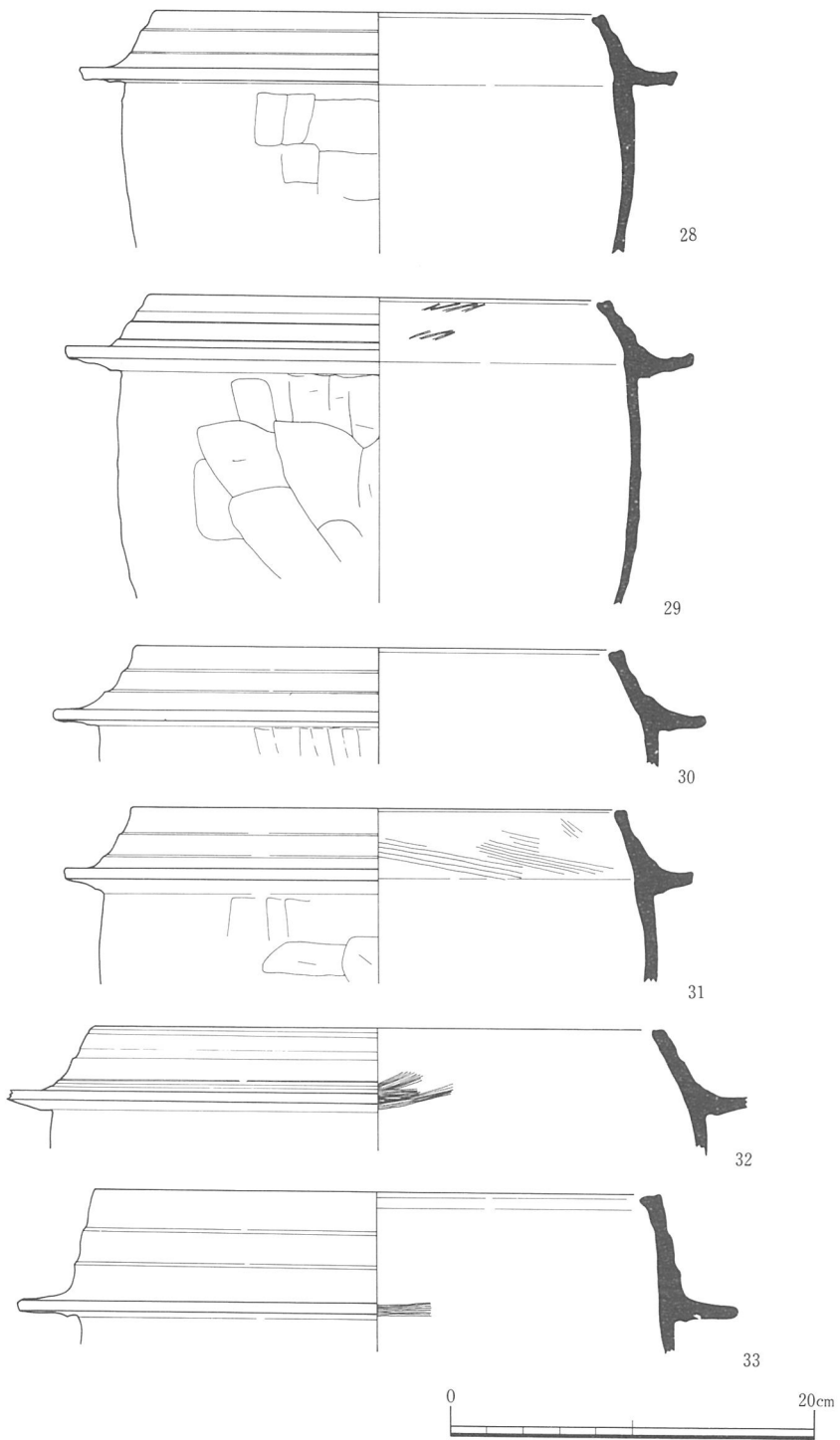
第111图 D地区 176-OP、190-OP、85-OS、91-OS
180-OO、269-OX、272-OX出土遺物実測図



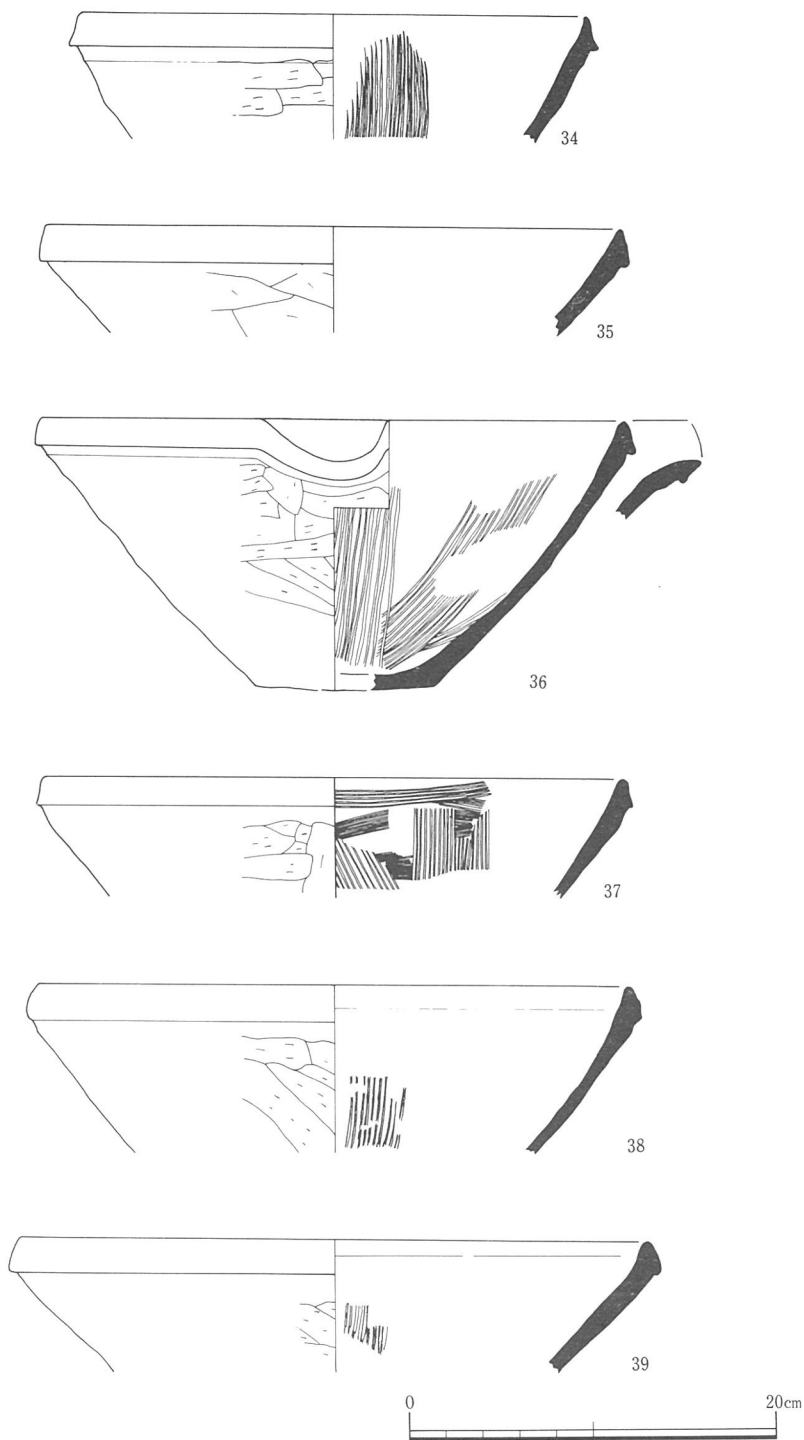
第112图 B地区 2109-O S 出土遺物実測図



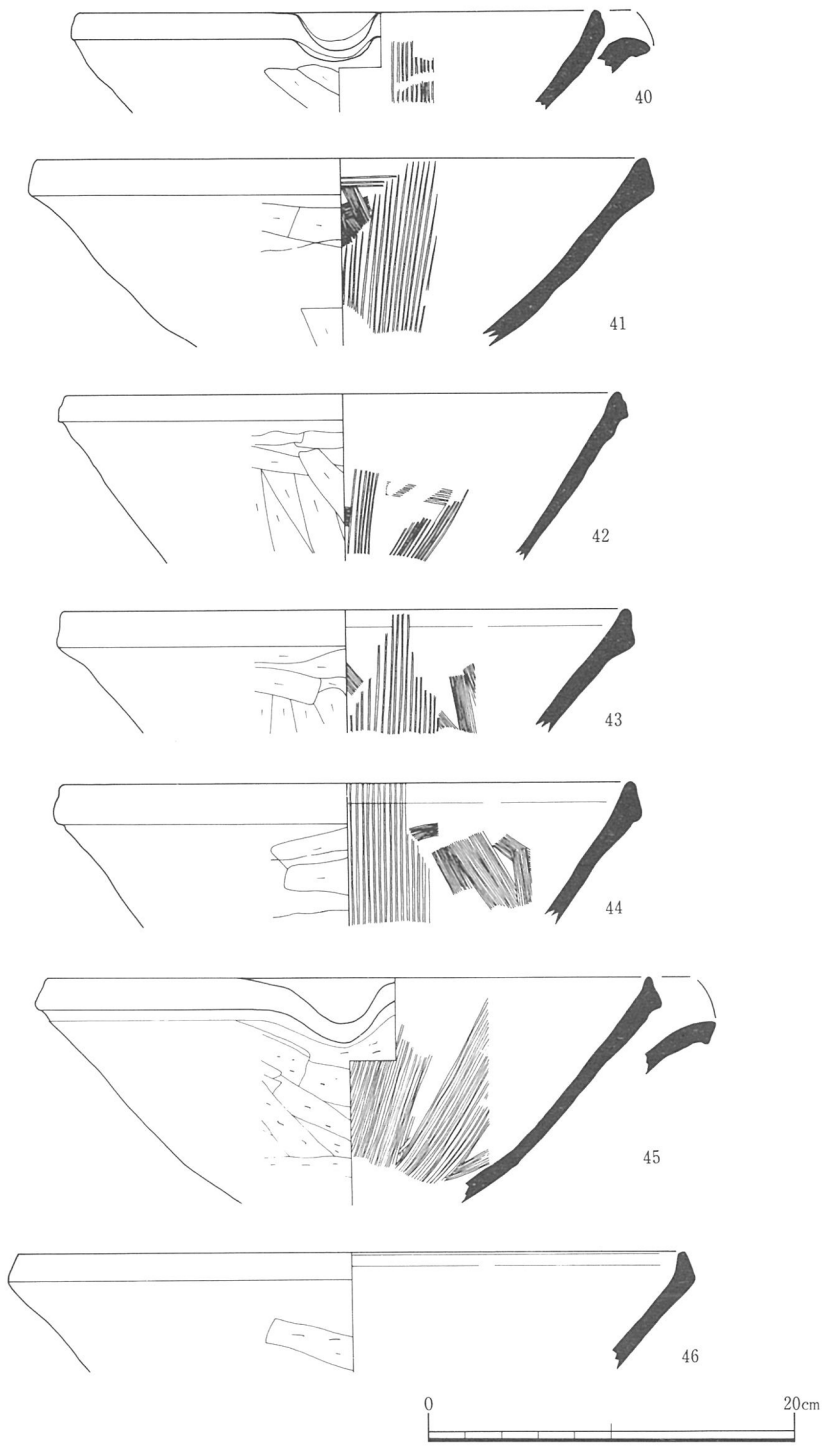
第113图 B地区 2109-O S 出土遺物実測図



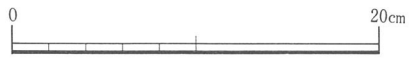
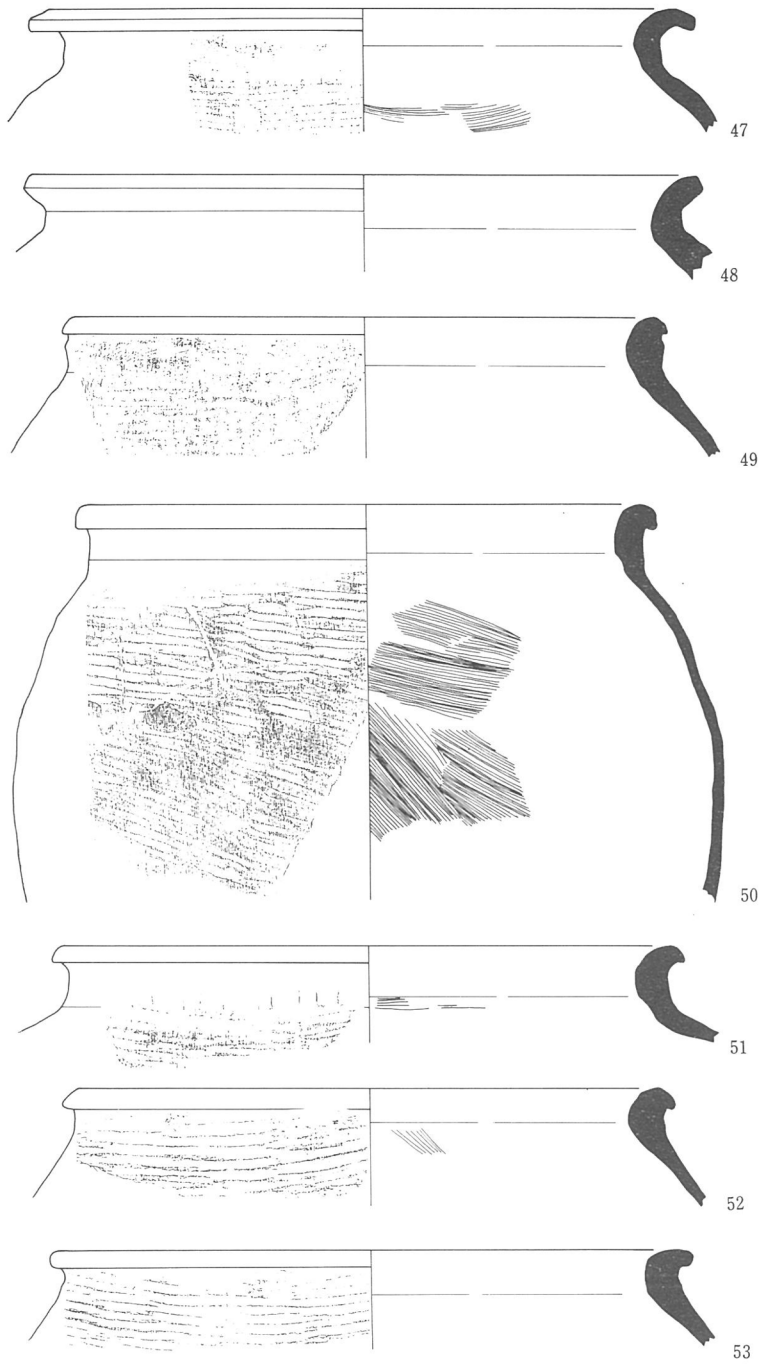
第114图 B地区 2109-O S 出土遺物実測図



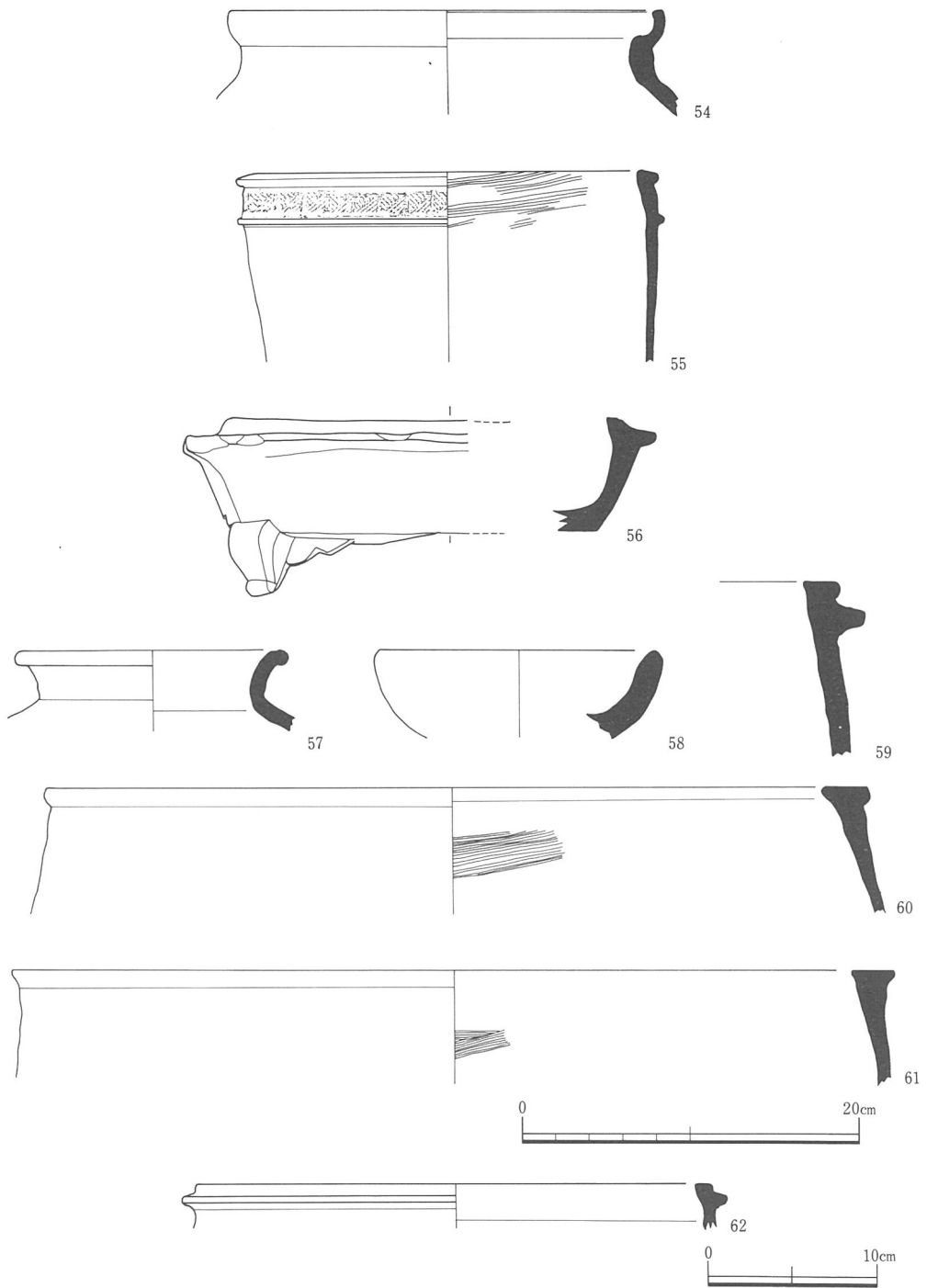
第115图 B地区 2109-O S 出土遺物実測図



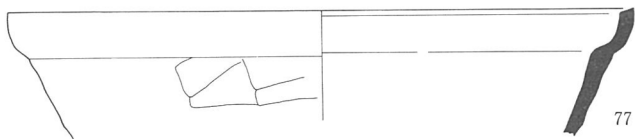
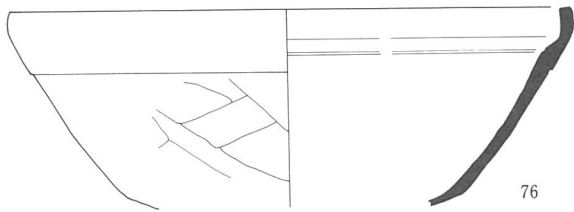
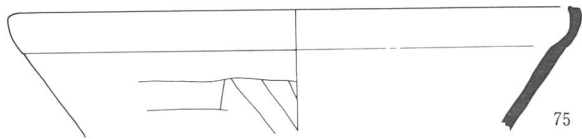
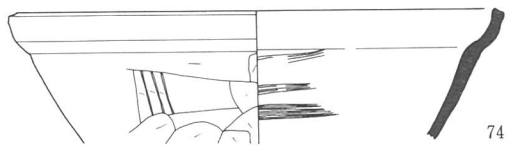
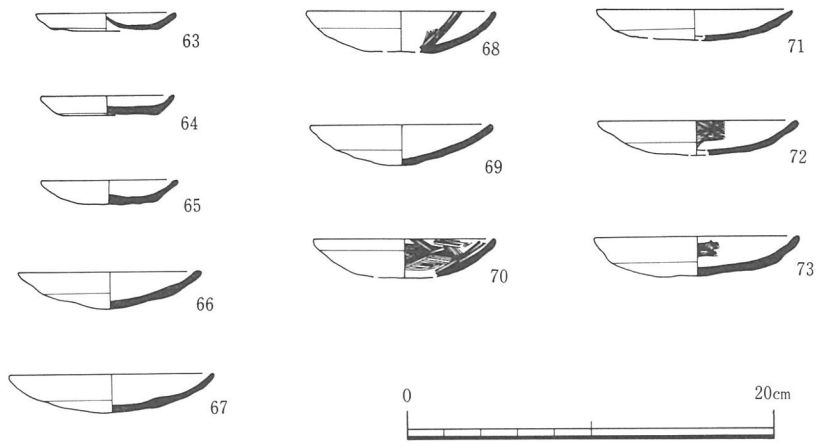
第116图 B地区 2109-O S 出土遺物実測図



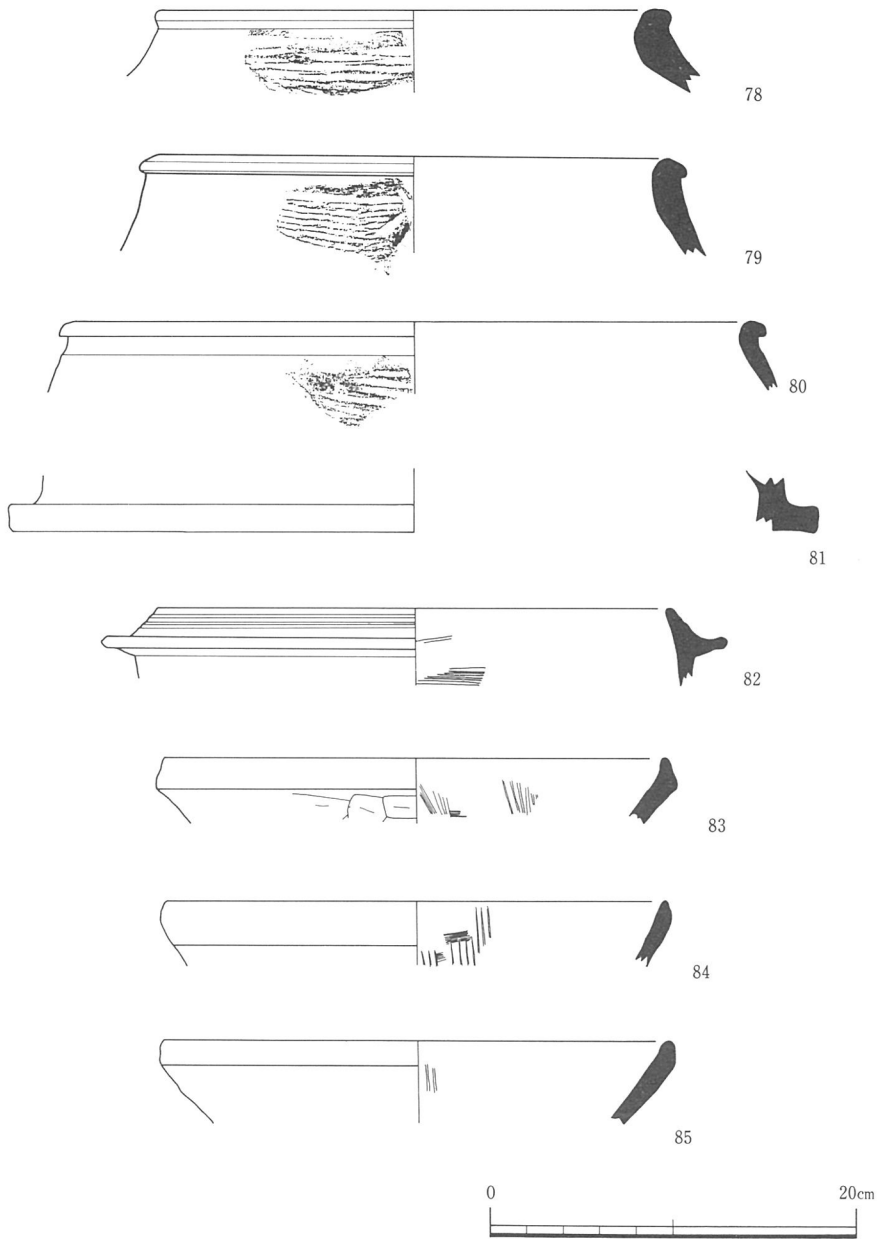
第117图 B地区 2109-O S 出土遺物実測図



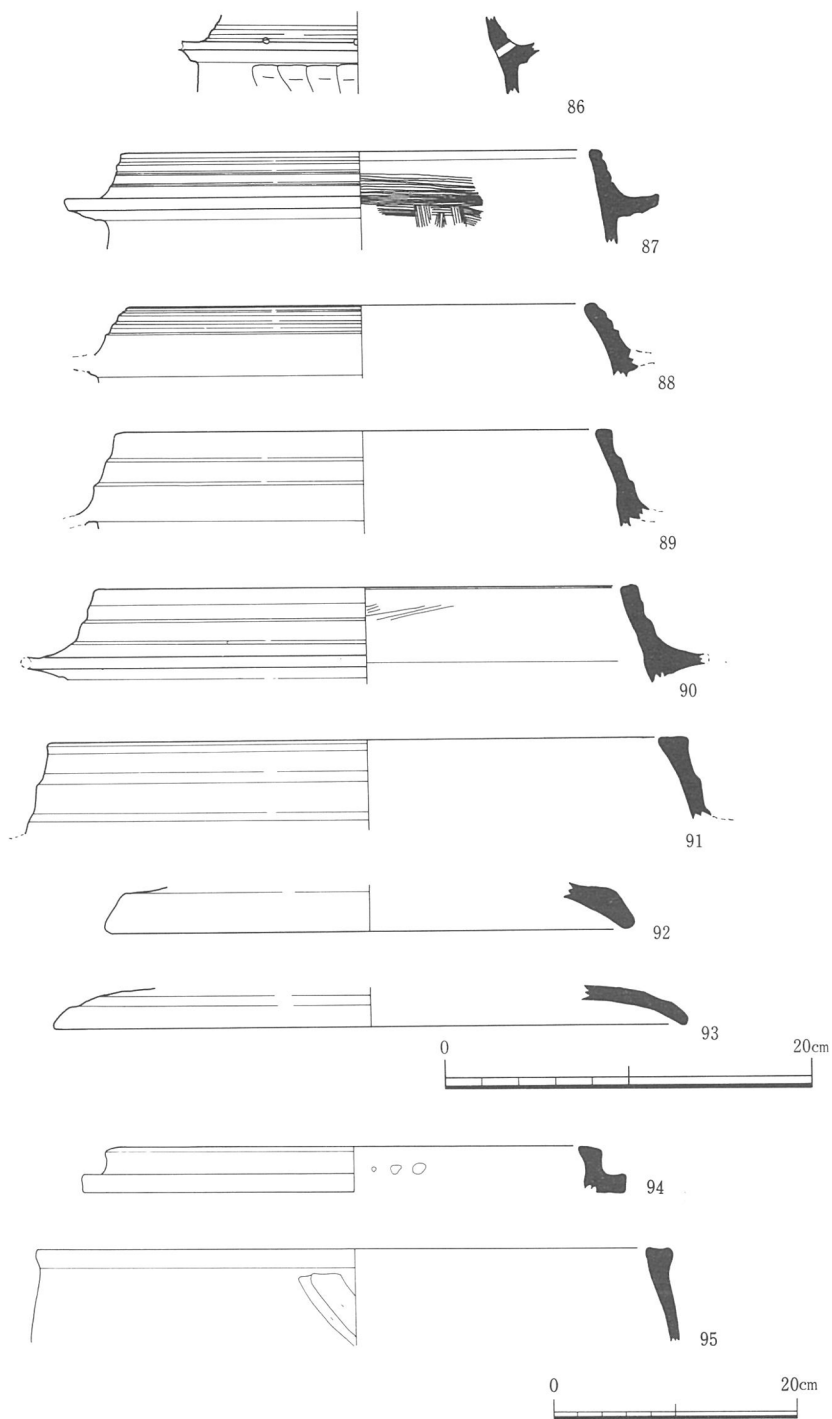
第118图 B地区 2109-O S 出土遺物実測図



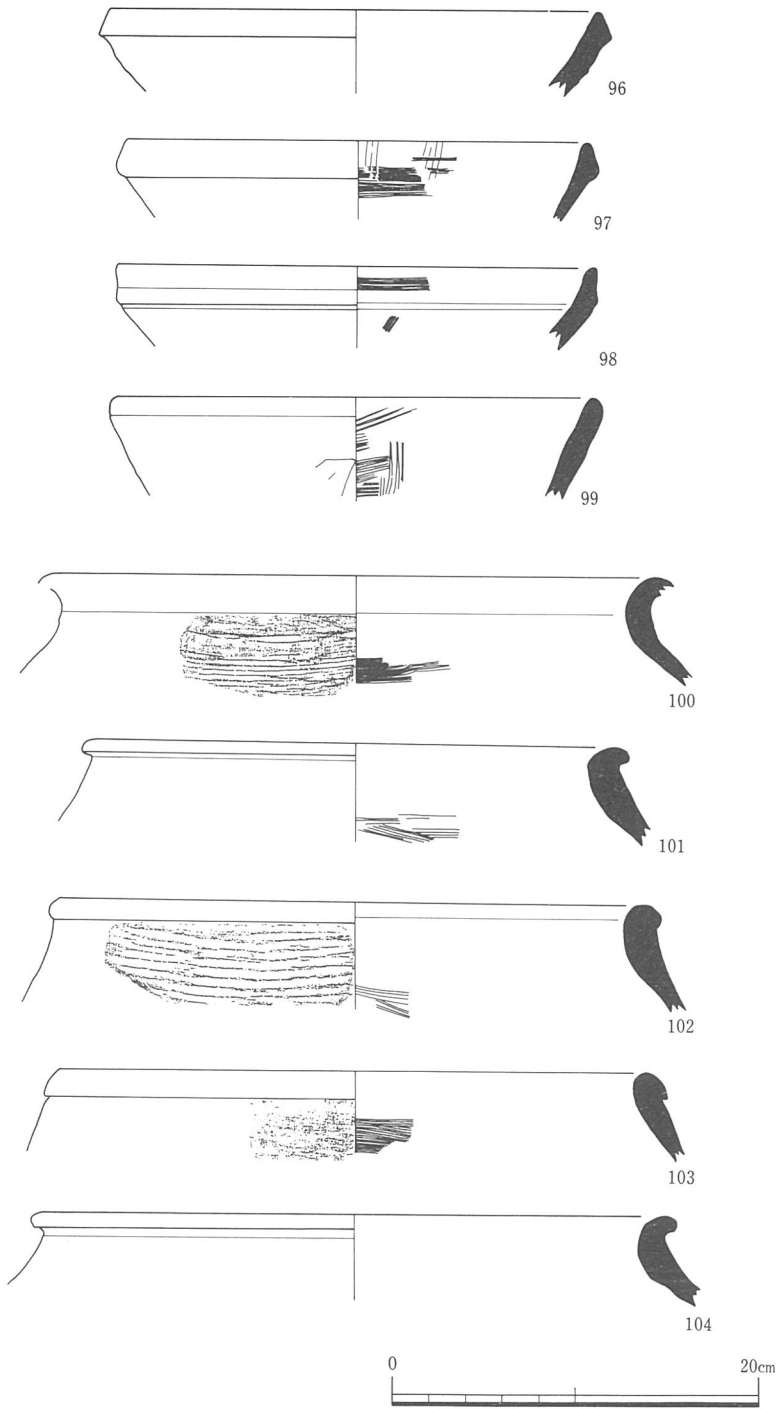
第119图 B地区 2109-O S 出土遺物実測図



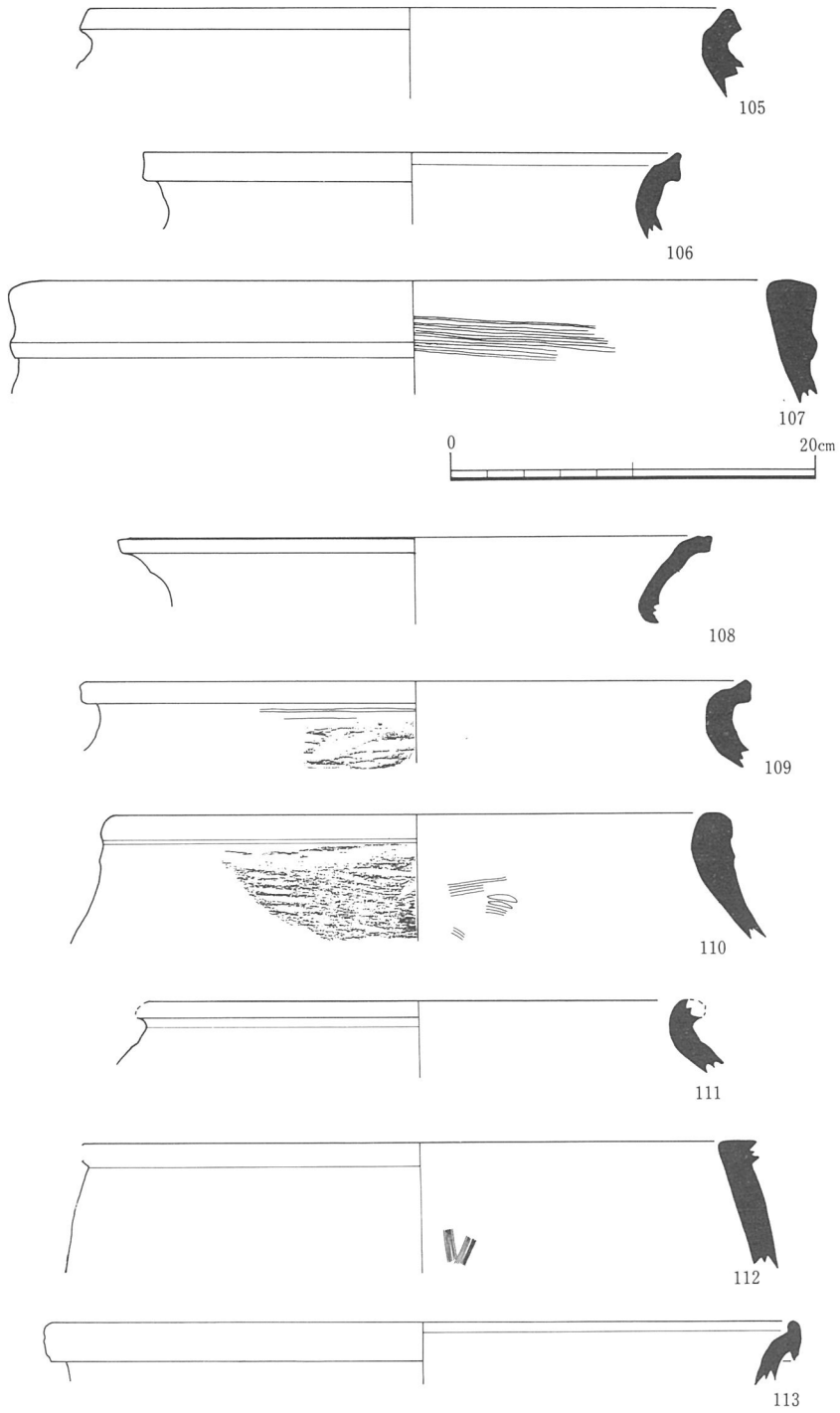
第120图 C地区 280-O S 2層出土遺物実測図



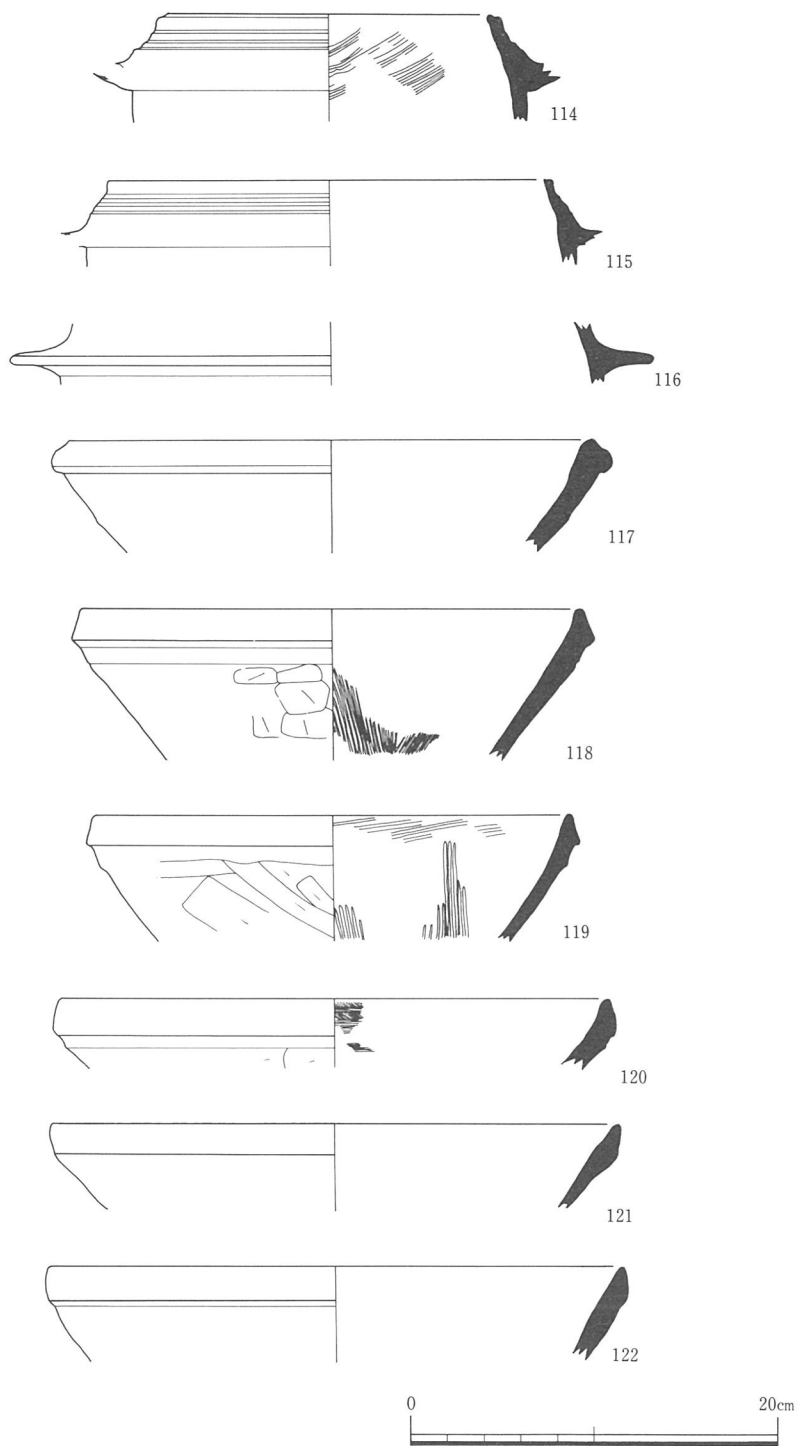
第121図 C地区 280-O S 3層出土遺物実測図



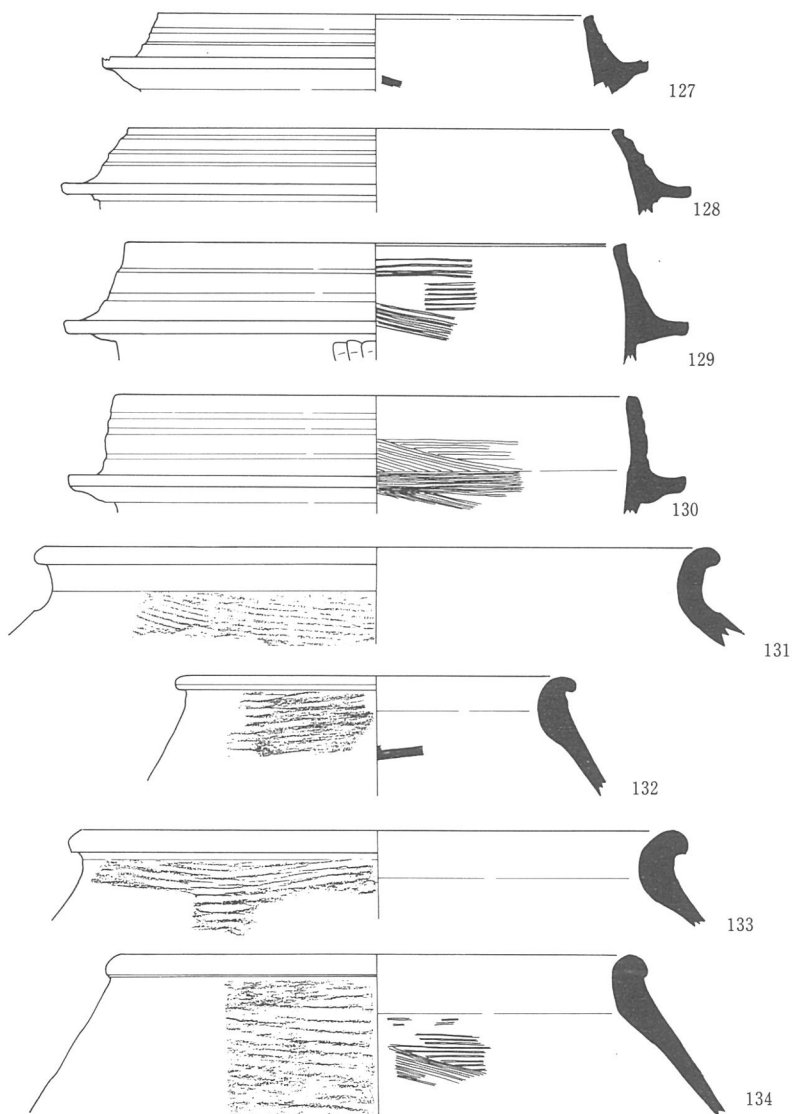
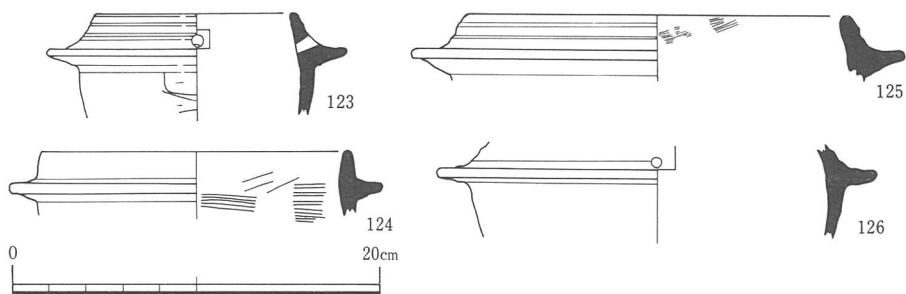
第122図 C地区 280-O S 3, 4層出土遺物実測図



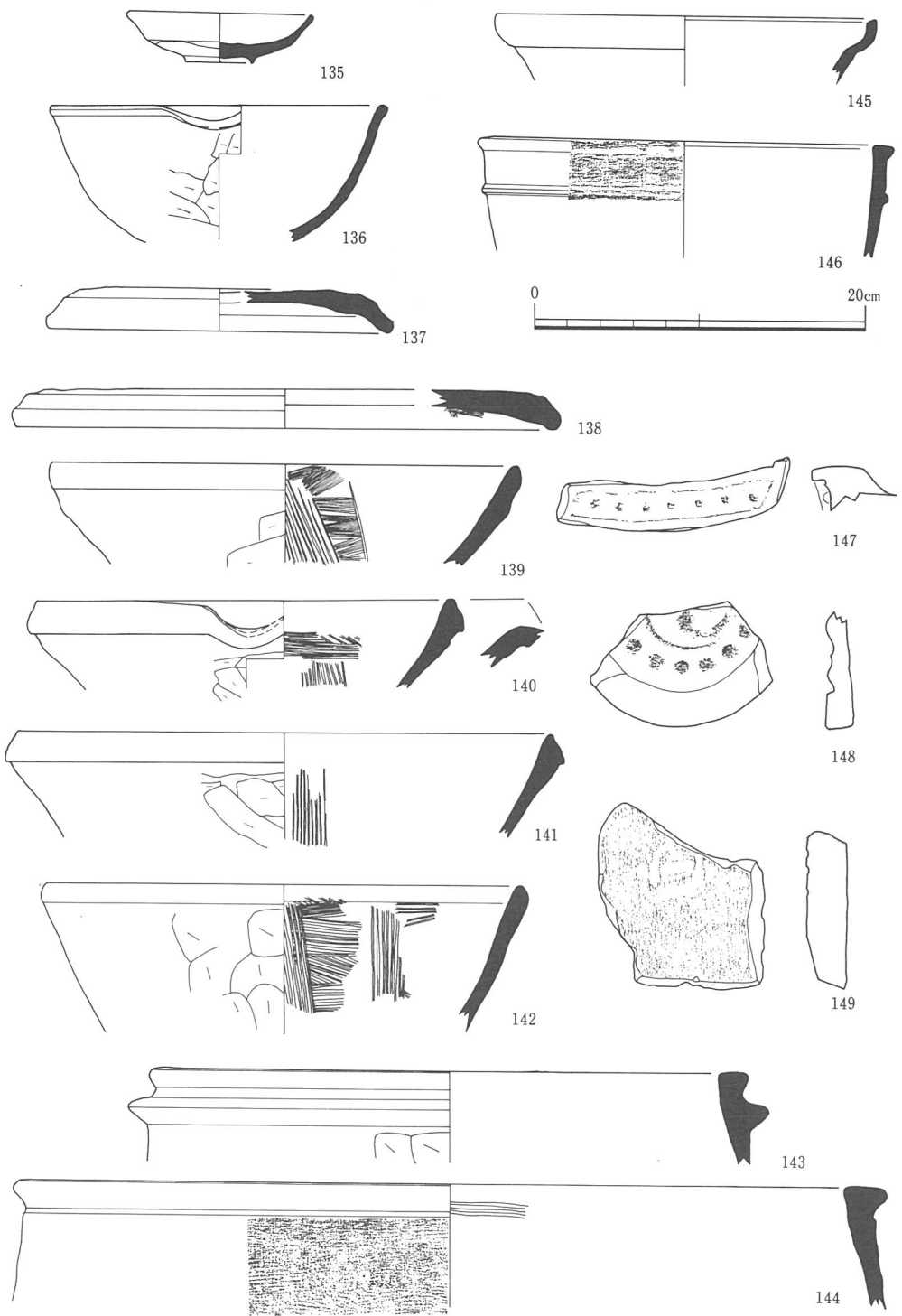
第123図 C地区 280-O S 3層出土遺物実測図



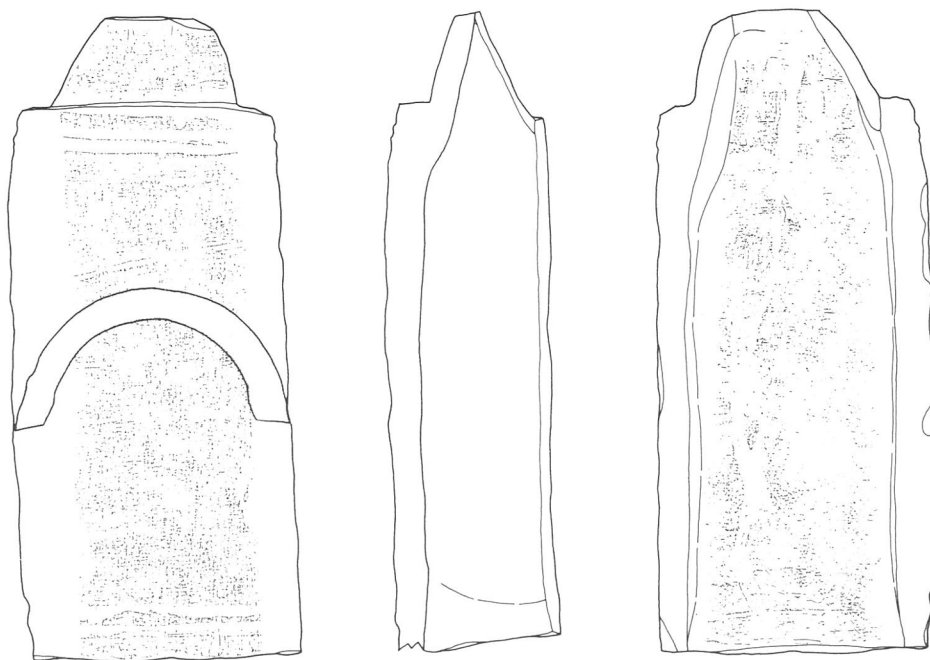
第124图 C地区 280-O S 3層出土遺物実測図



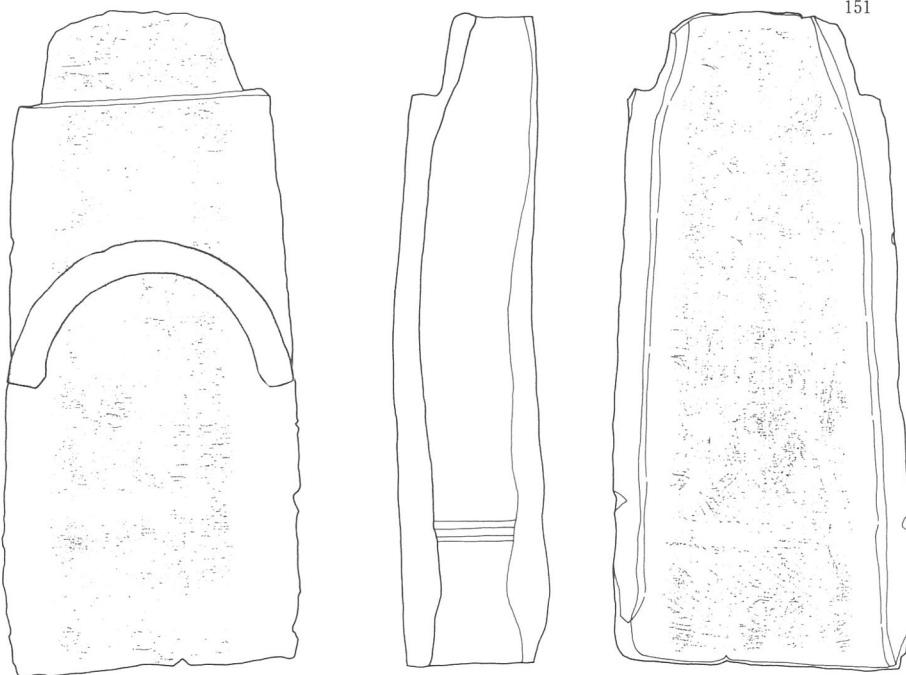
第125图 C地区 49-O S 出土遺物実測図



第126图 C地区 49-O S出土遺物実測図

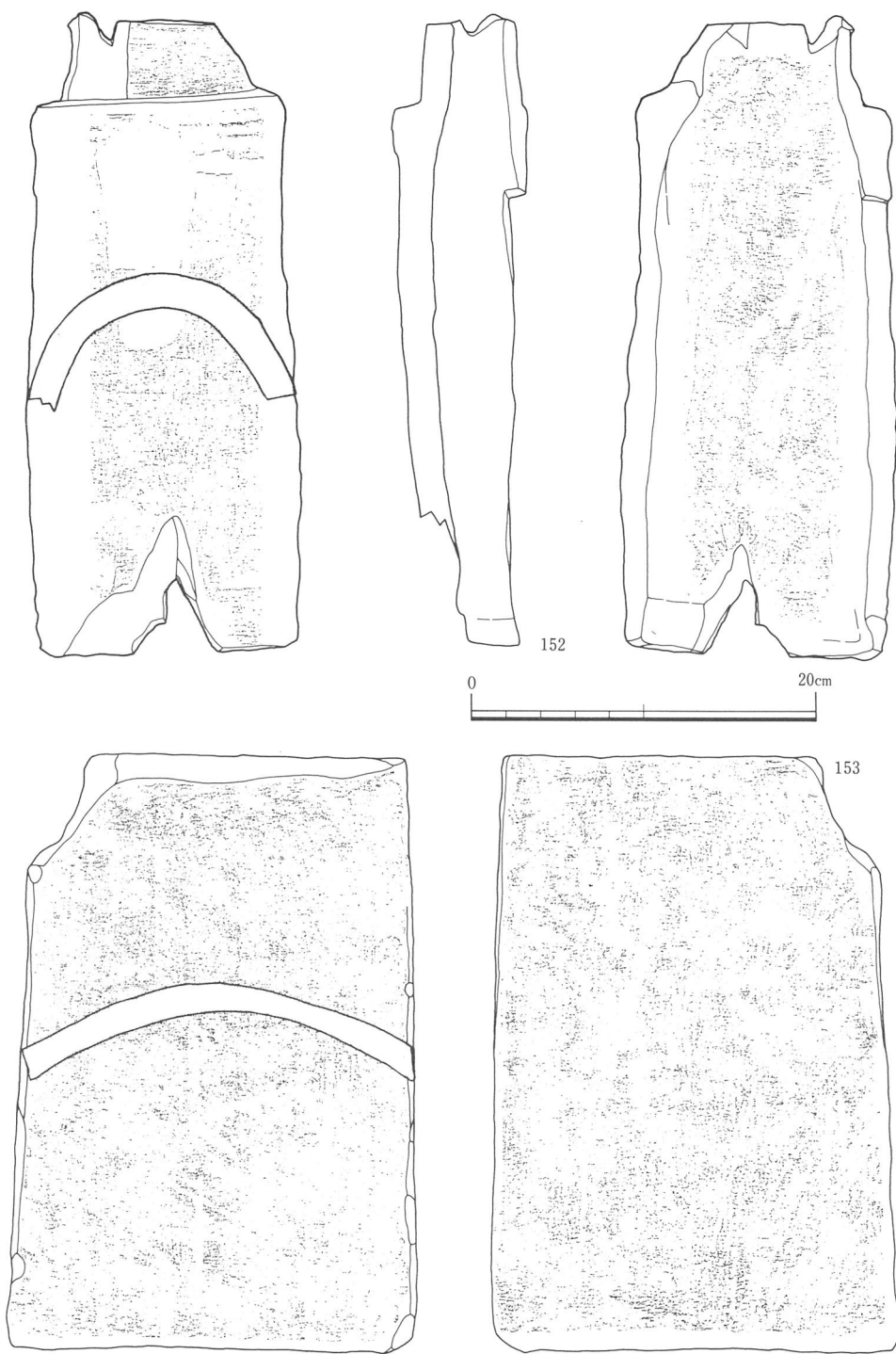


150

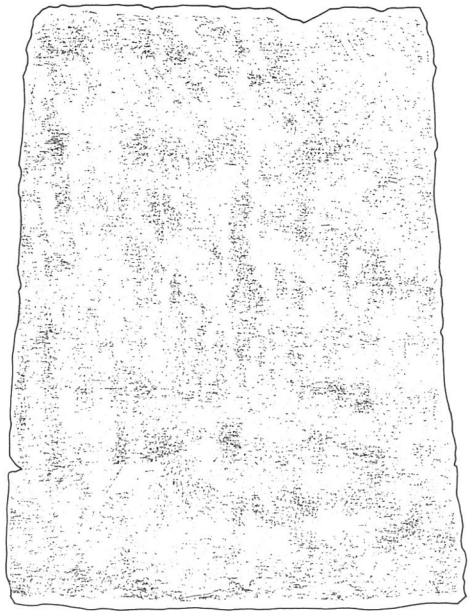
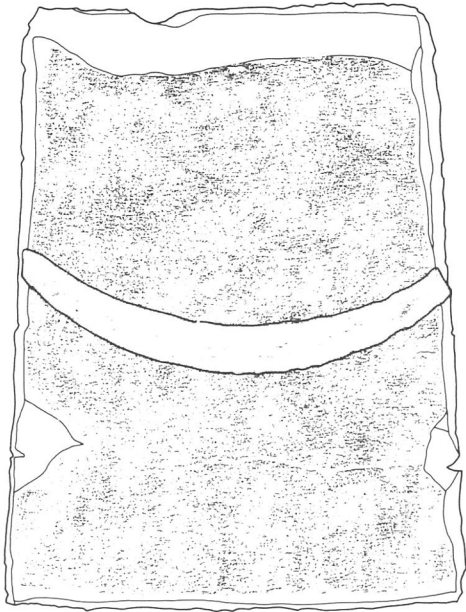


151

第127图 C地区 49-O S 出土遺物実測図



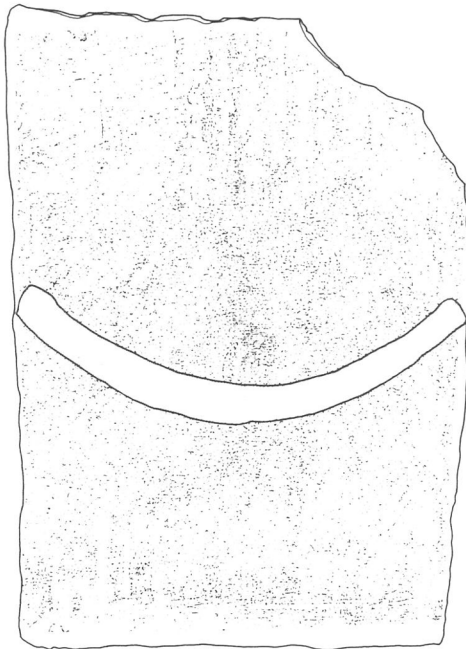
第128图 C地区 49-O S 出土遺物実測図



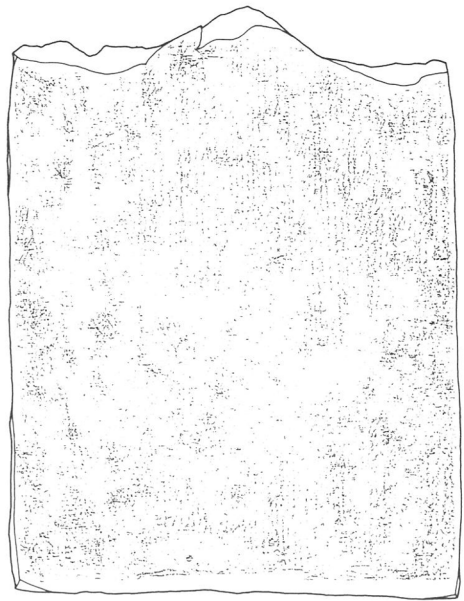
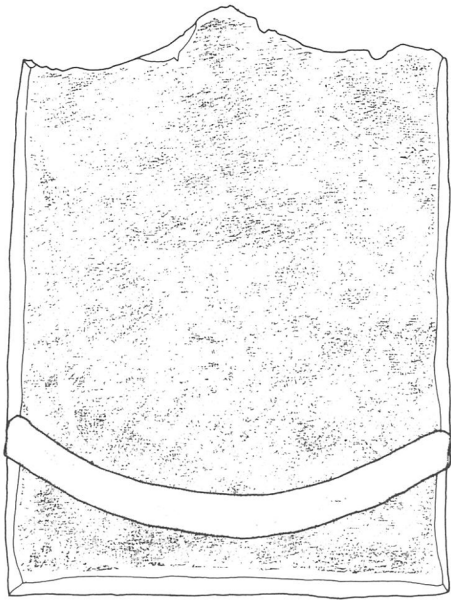
154



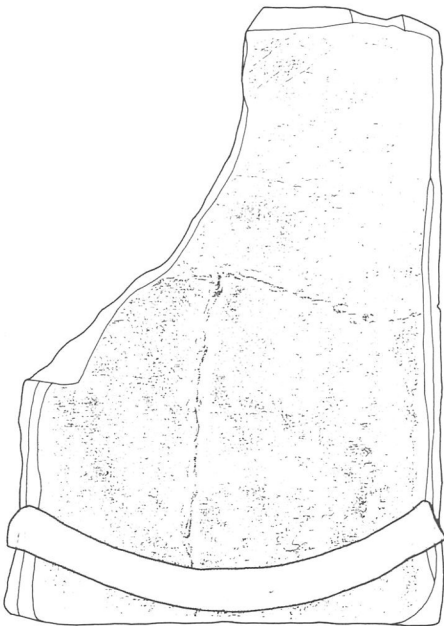
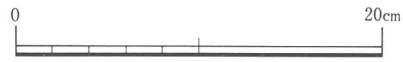
155



第129图 C地区 49-O S出土遺物実測図

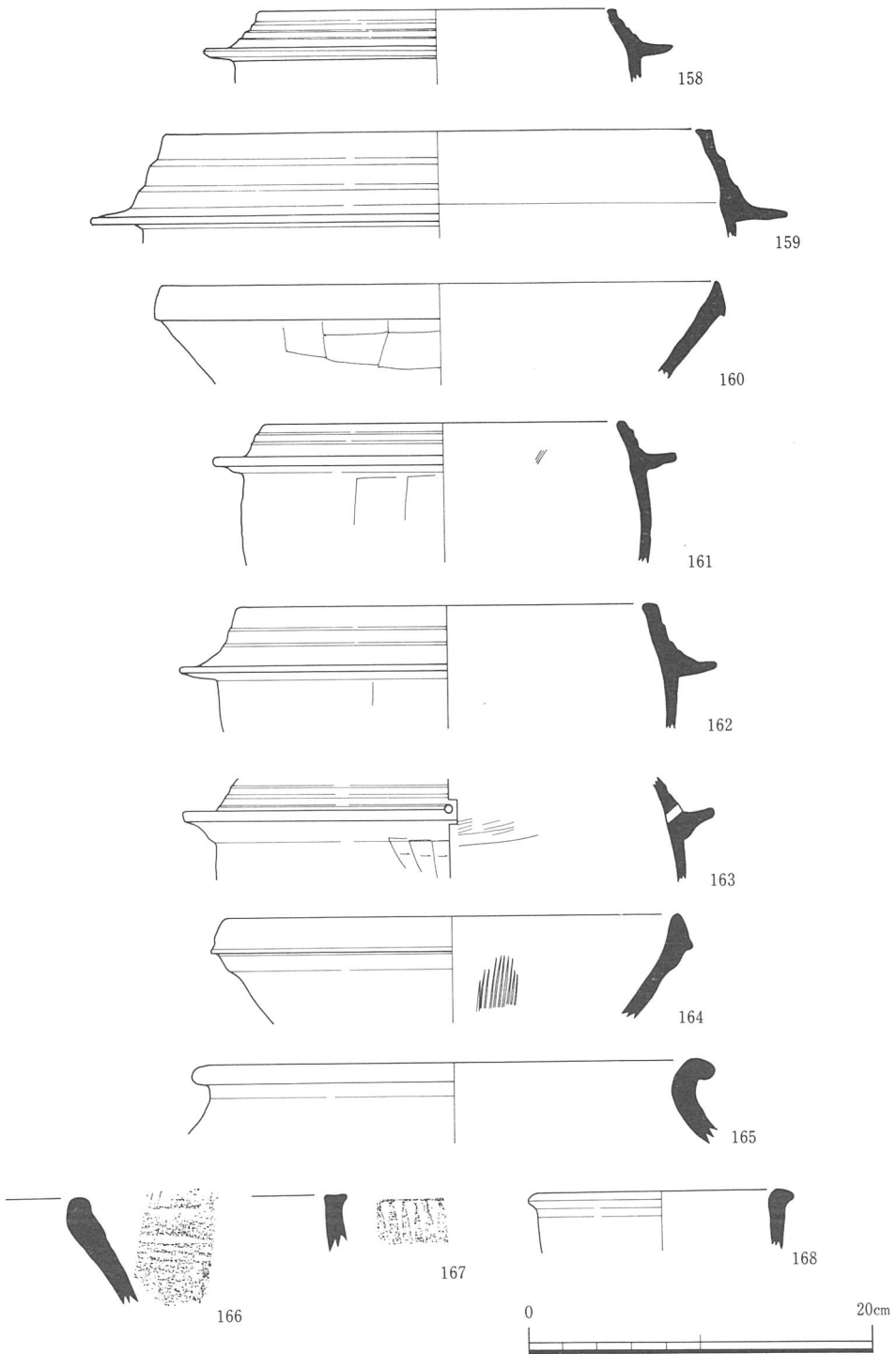


156

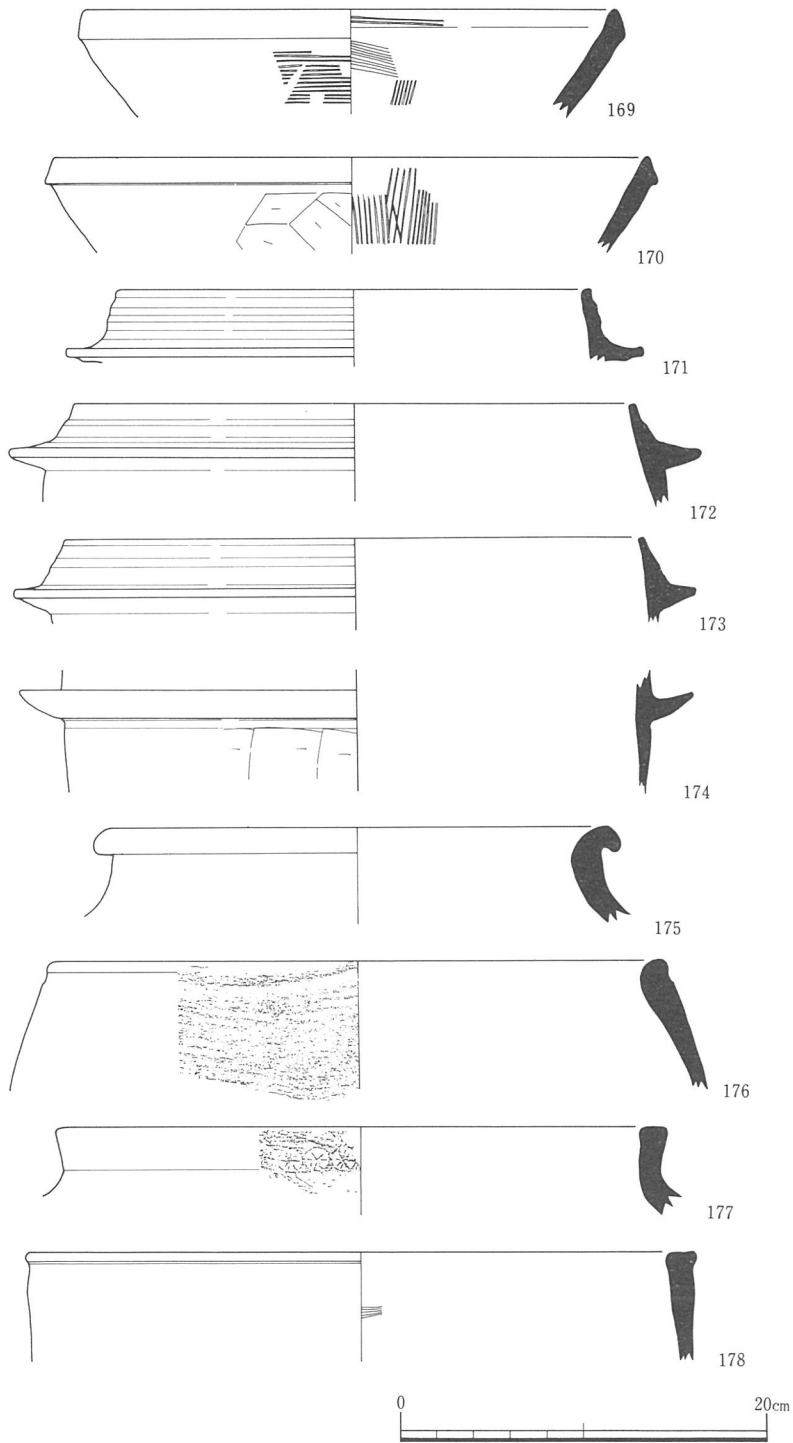


157

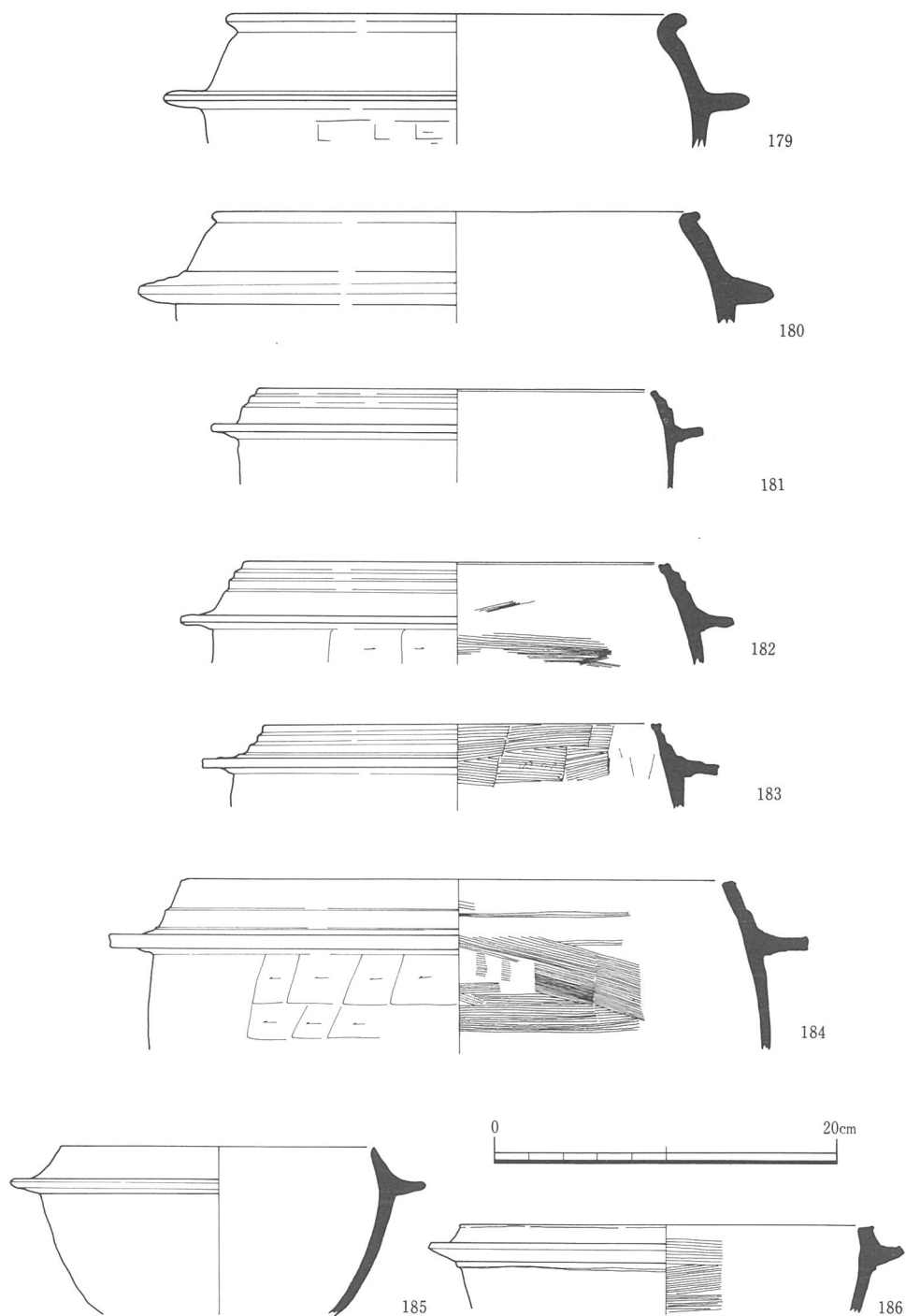
第130図 C地区 49-O S出土遺物実測図



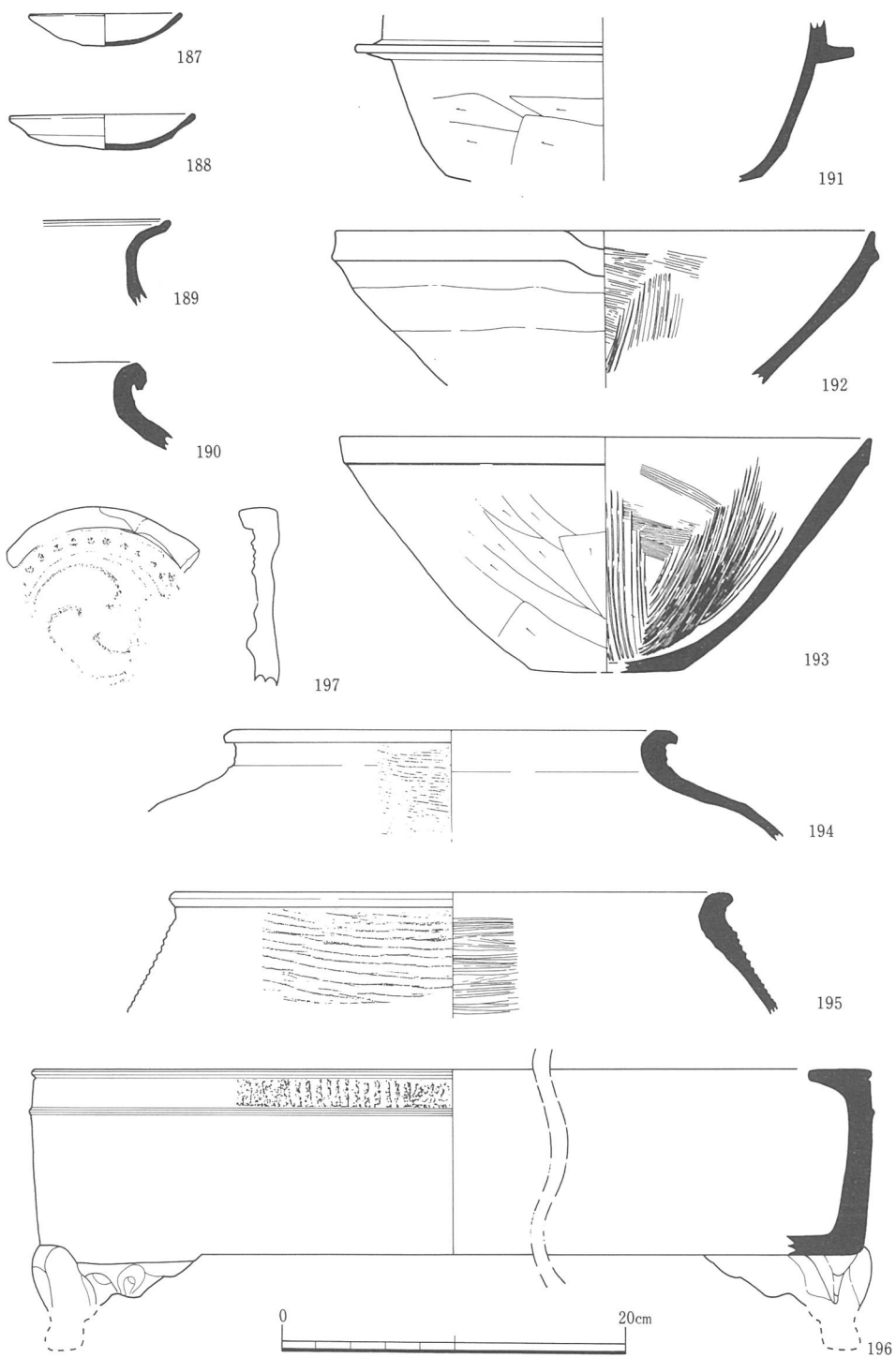
第131图 D地区 88-00、352-00出土遺物実測図



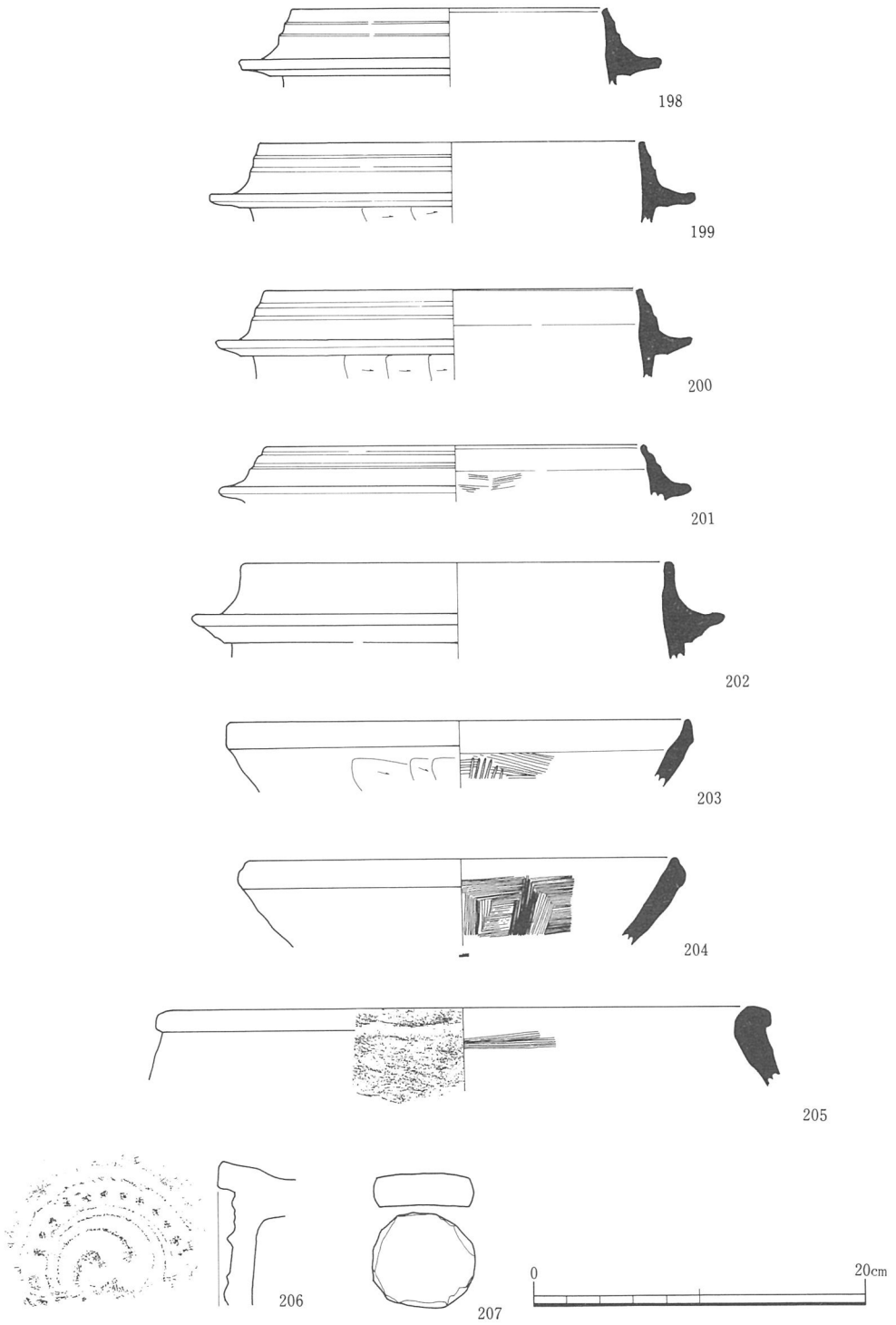
第132图 D地区 278-O X出土遺物実測図



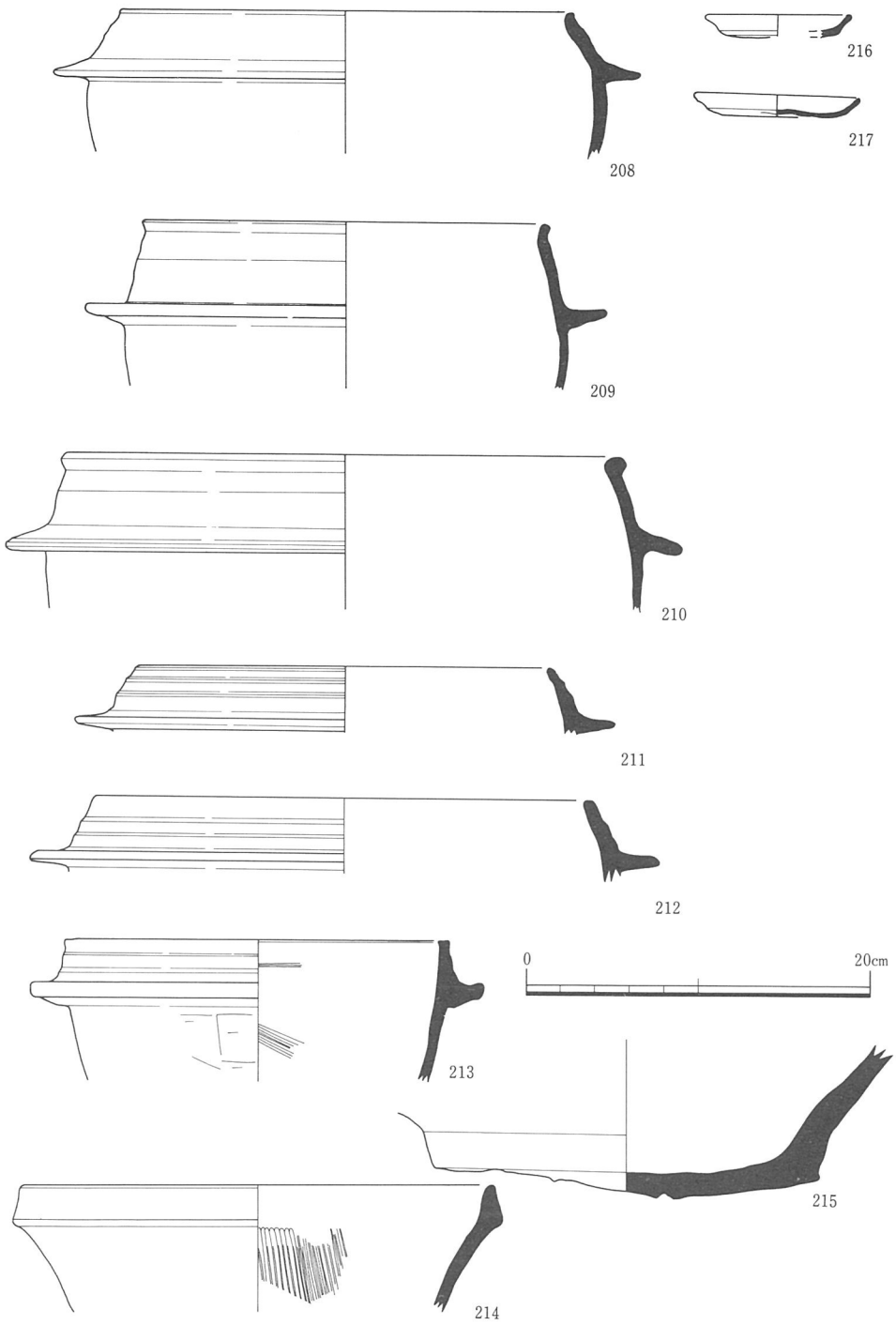
第133图 D地区 127-O S 出土遗物实测图



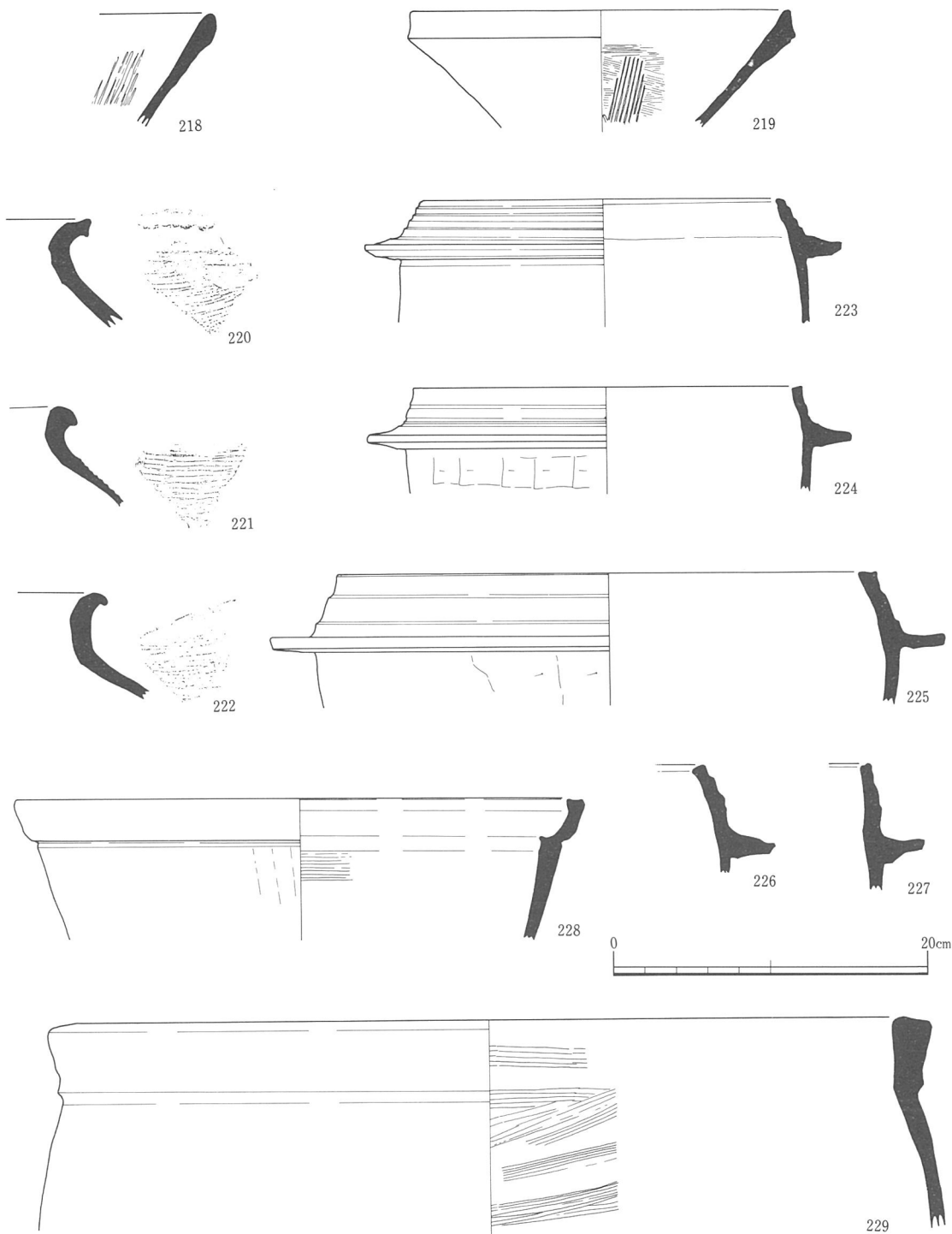
第134图 D地区 127-O S出土遺物実測図



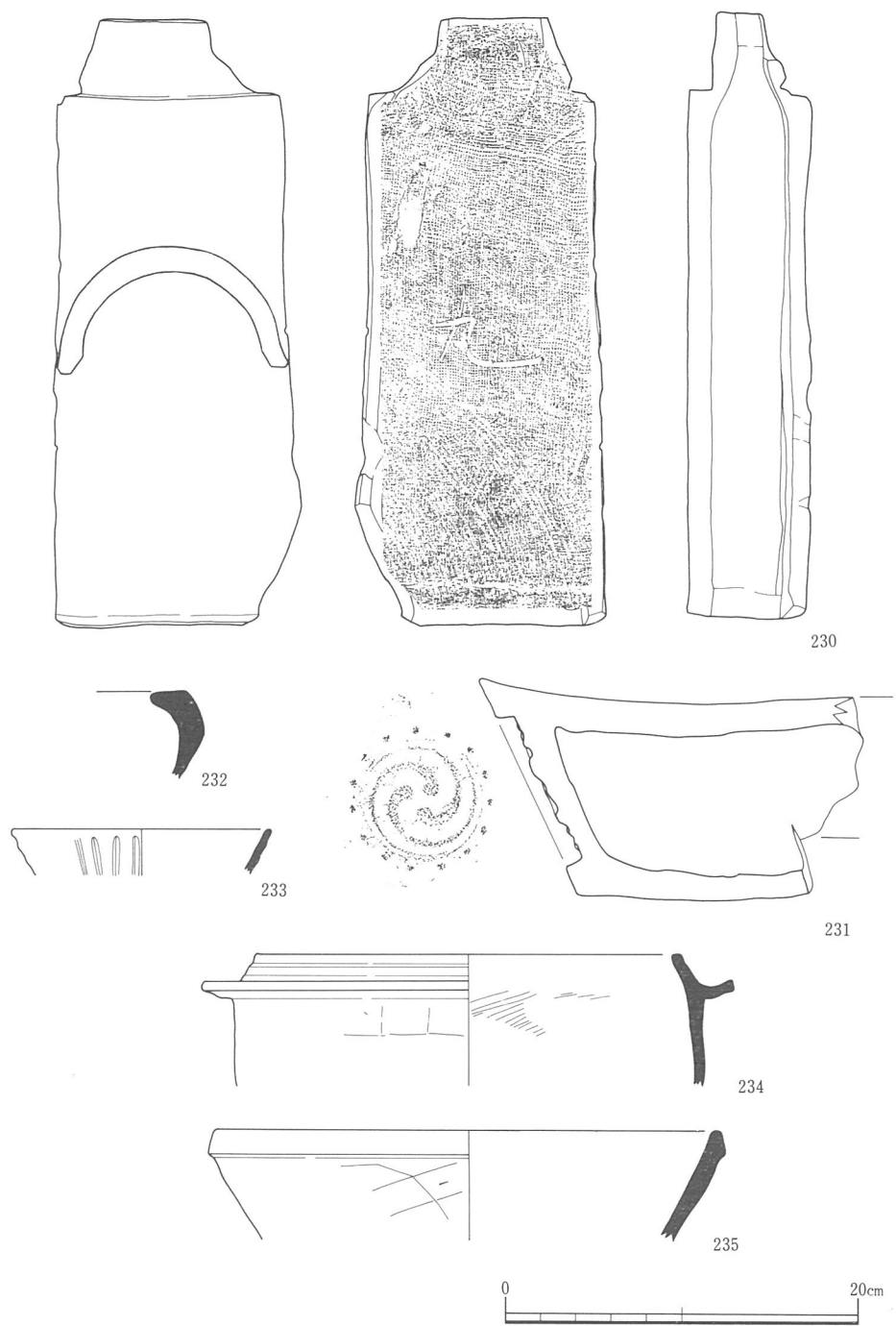
第135图 D地区 249-O S 出土遺物実測図



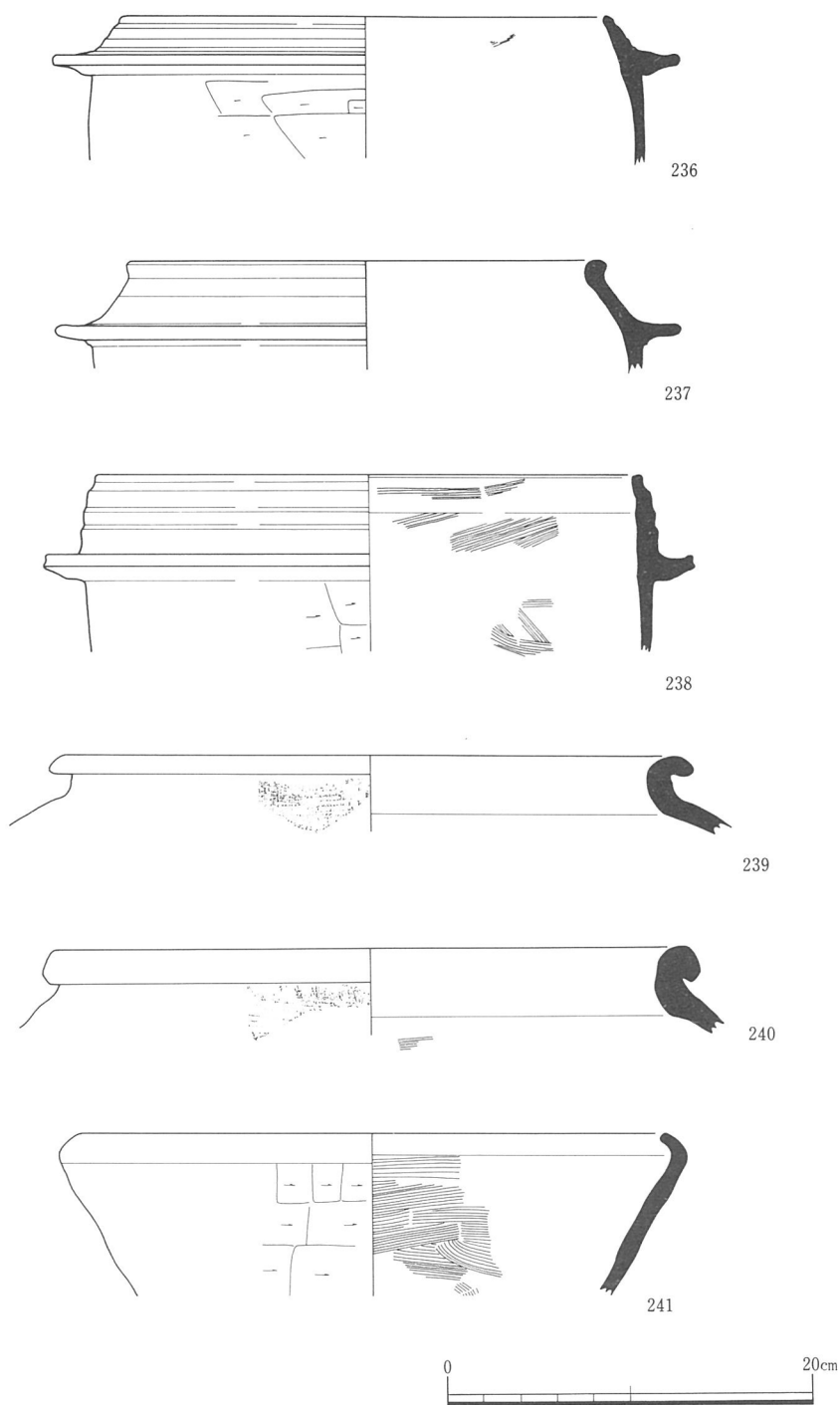
第136图 D地区 148-O S · 249-O X 出土遺物実測図



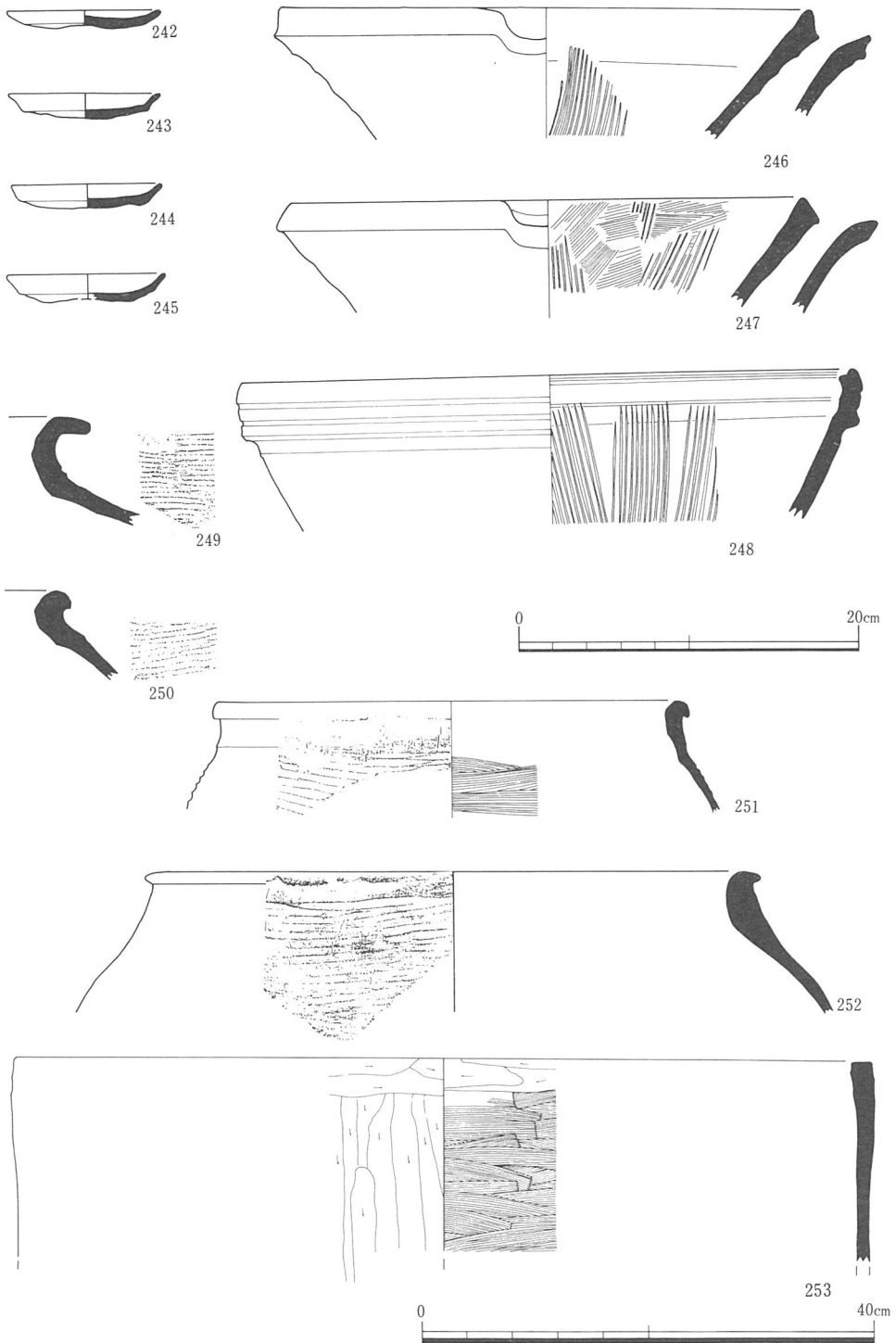
第137图 D地区 351—O S出土遺物実測図



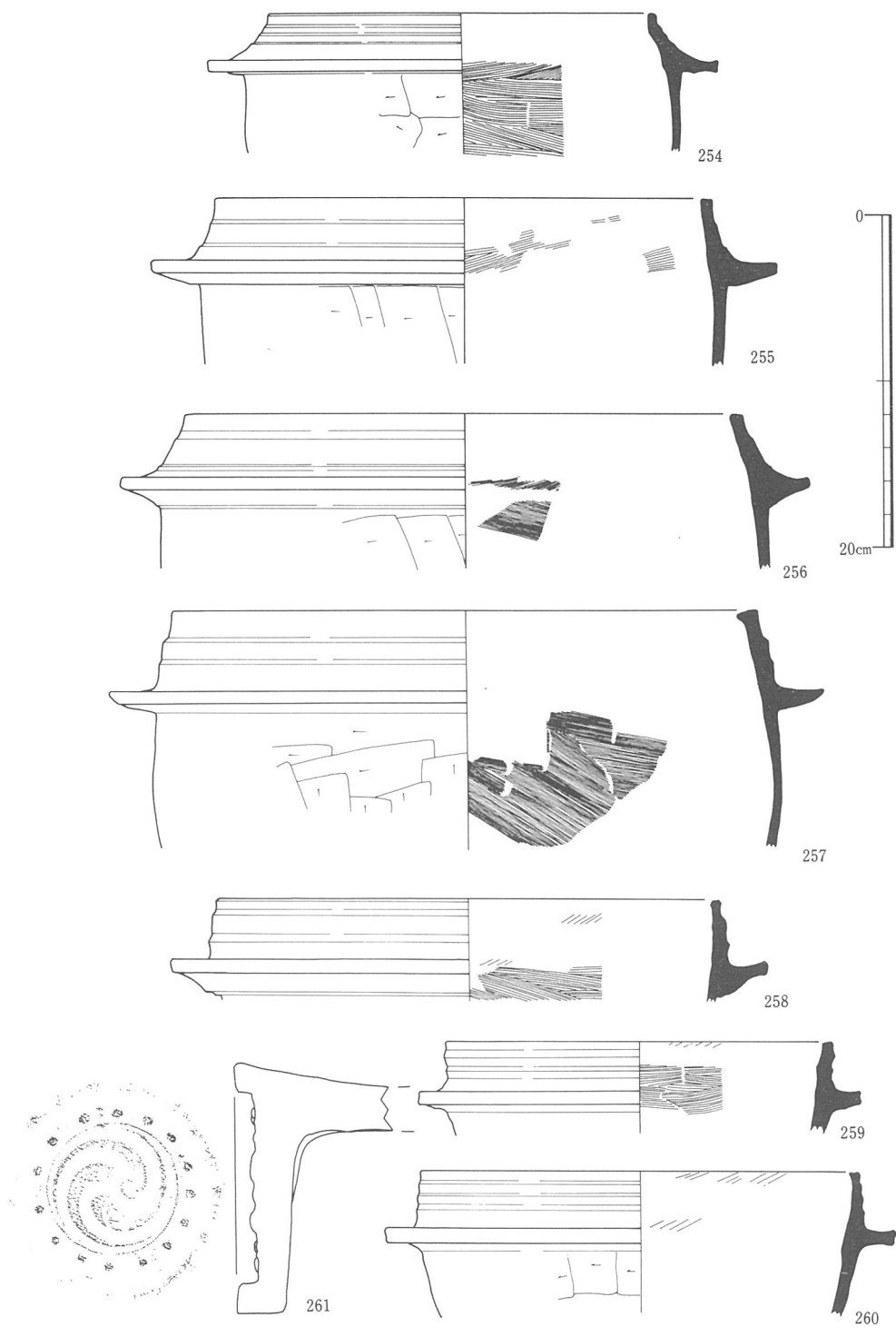
第138图 D地区 351-O S・355-O O出土遺物実測図



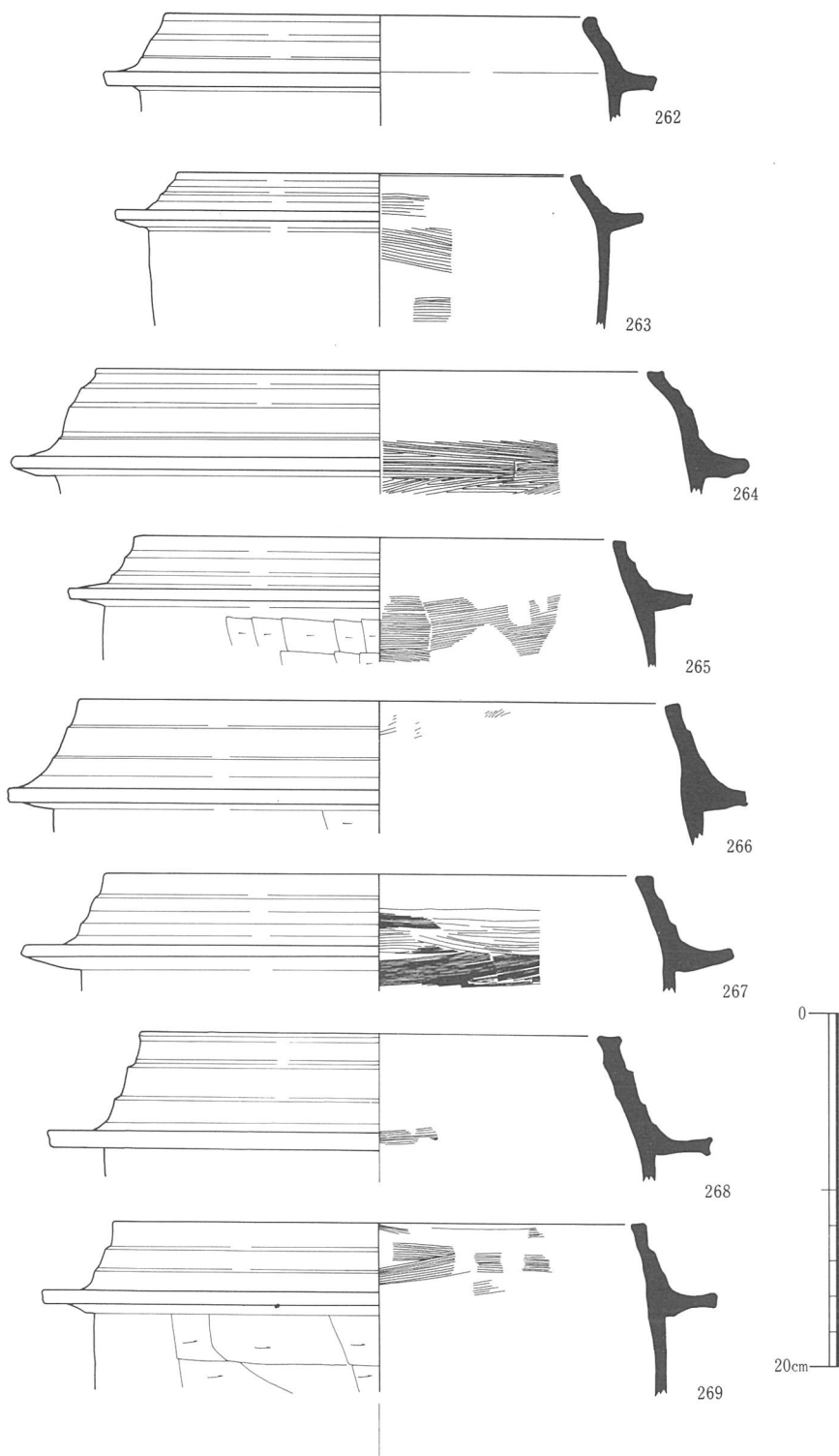
第139图 D地区 263-O W · 298-O X · 01-O X 出土遺物実測図



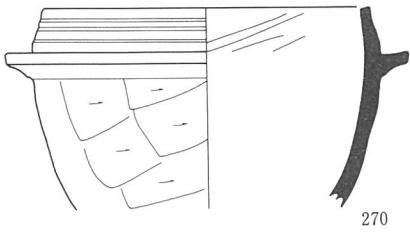
第140图 D地区 100-O X出土遺物実測図



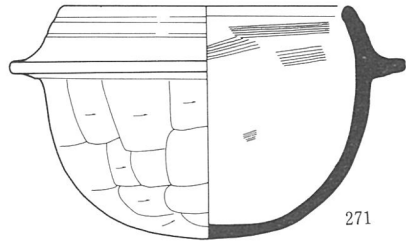
第141图 D地区 100-O X出土遺物実測図



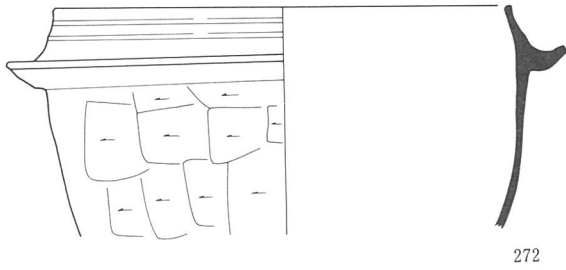
第142図 D地区 100-O X出土遺物実測図



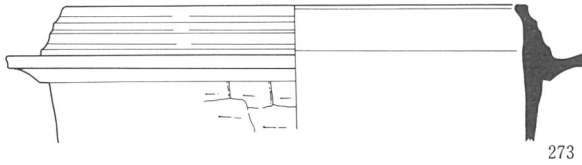
270



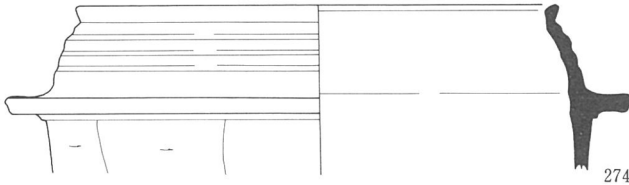
271



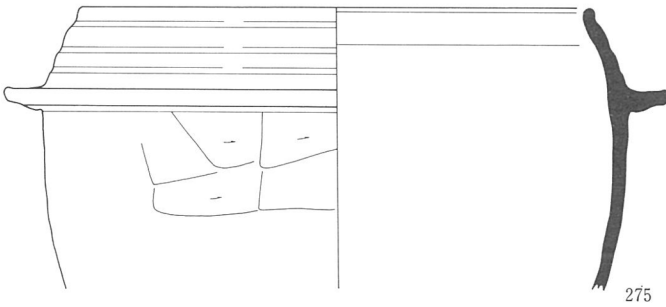
272



273



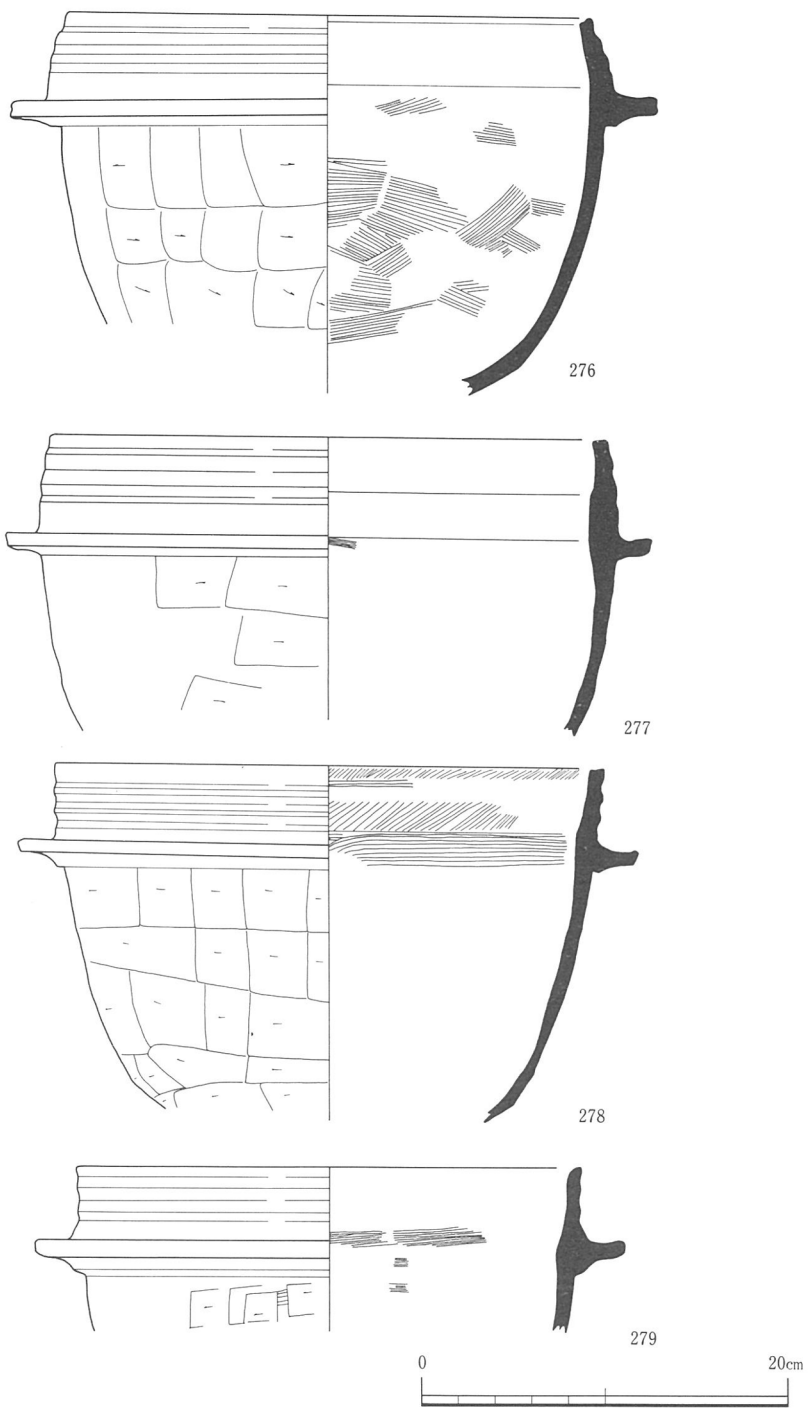
274



275



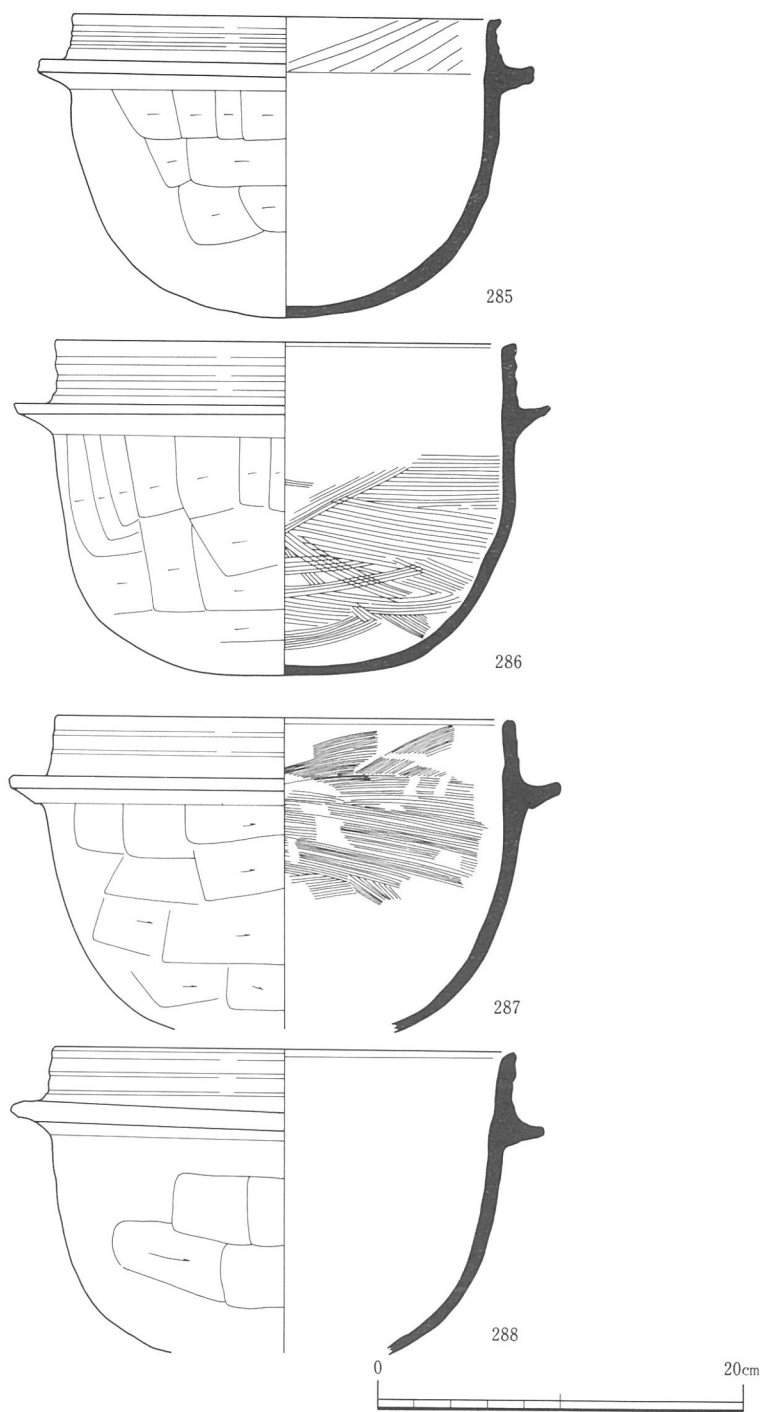
第143图 D地区 02B-O X出土遺物実測図



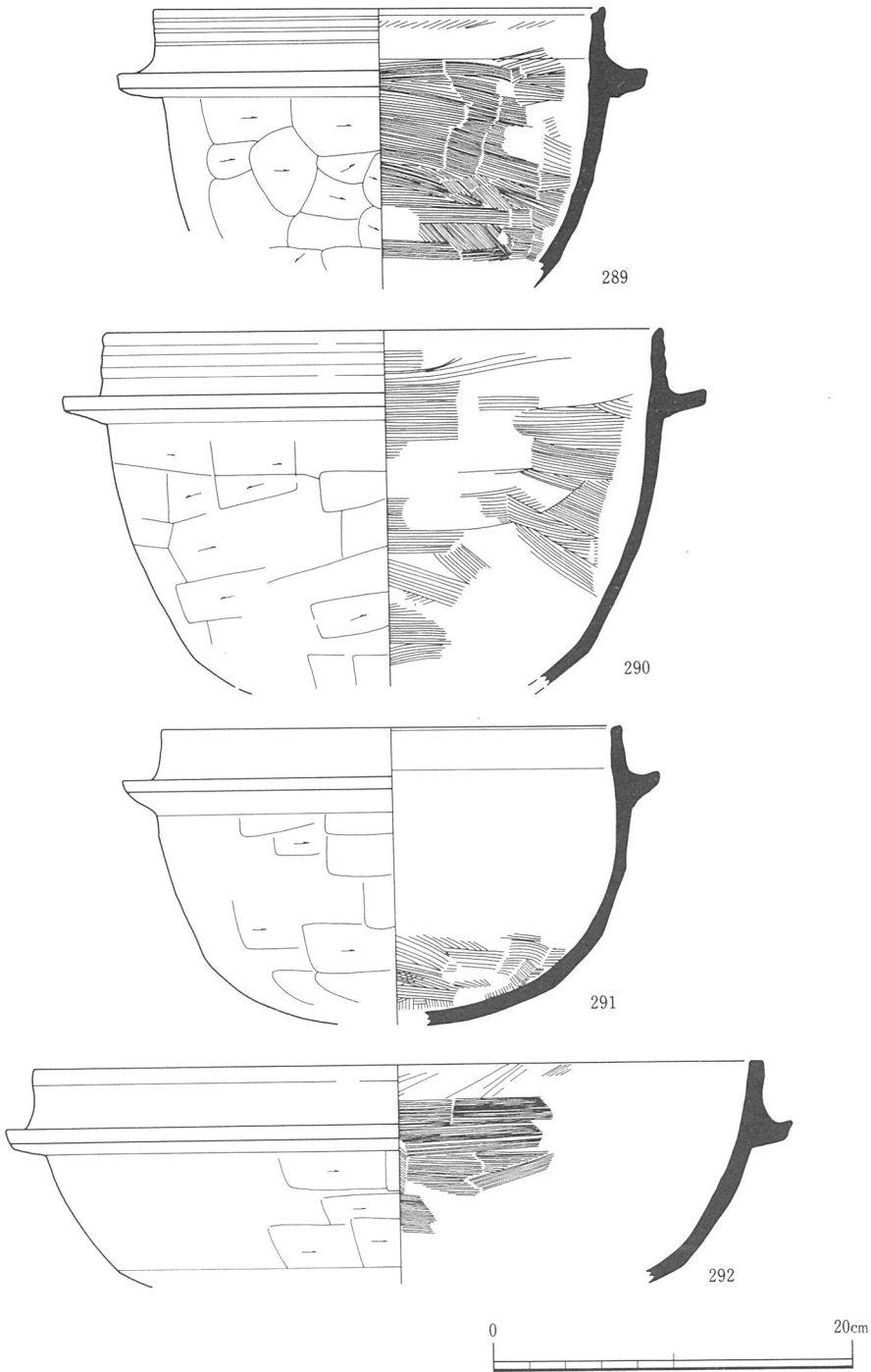
第144图 D地区 02B-O X出土遺物実測図



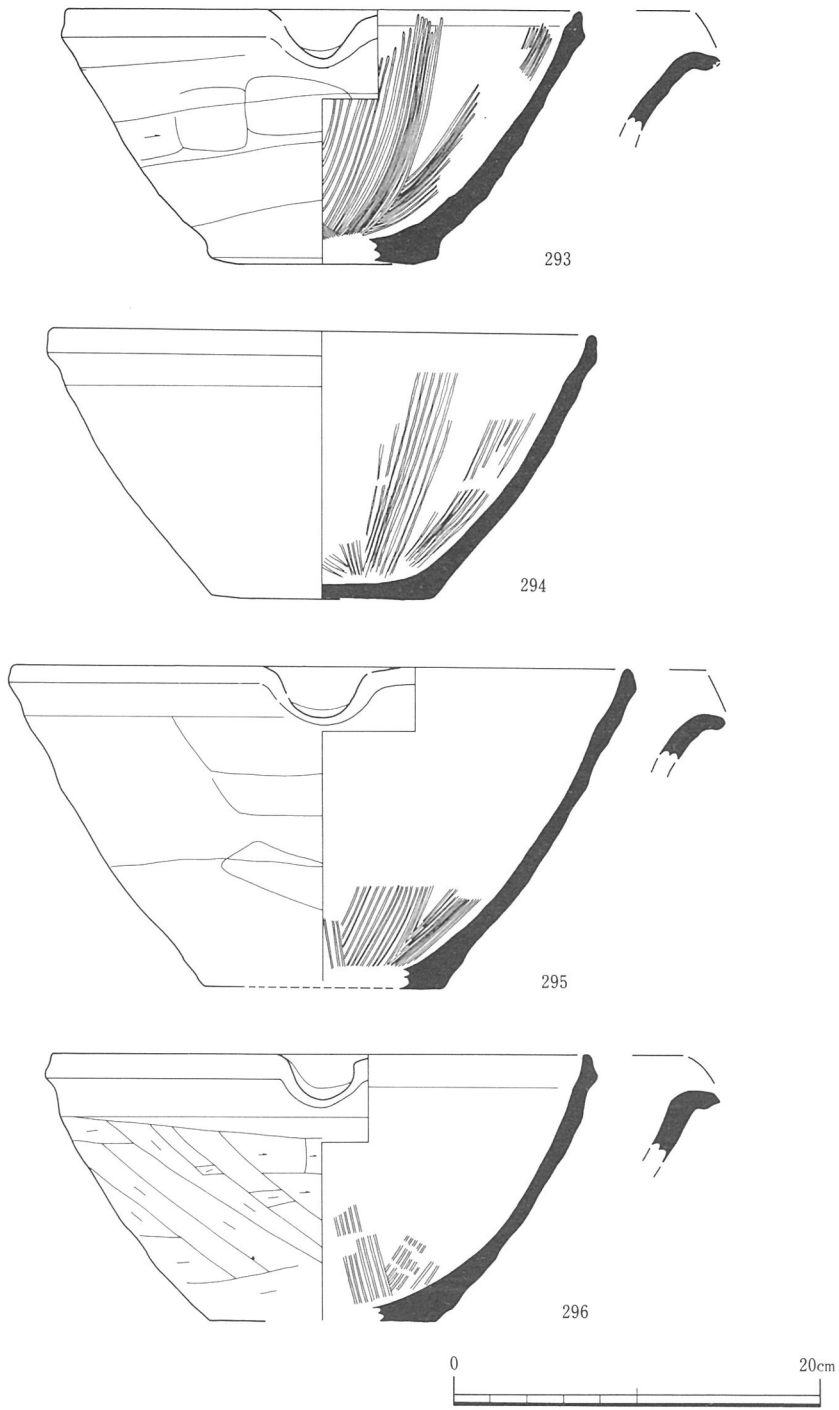
第145图 D地区 02B-O X出土遺物実測図



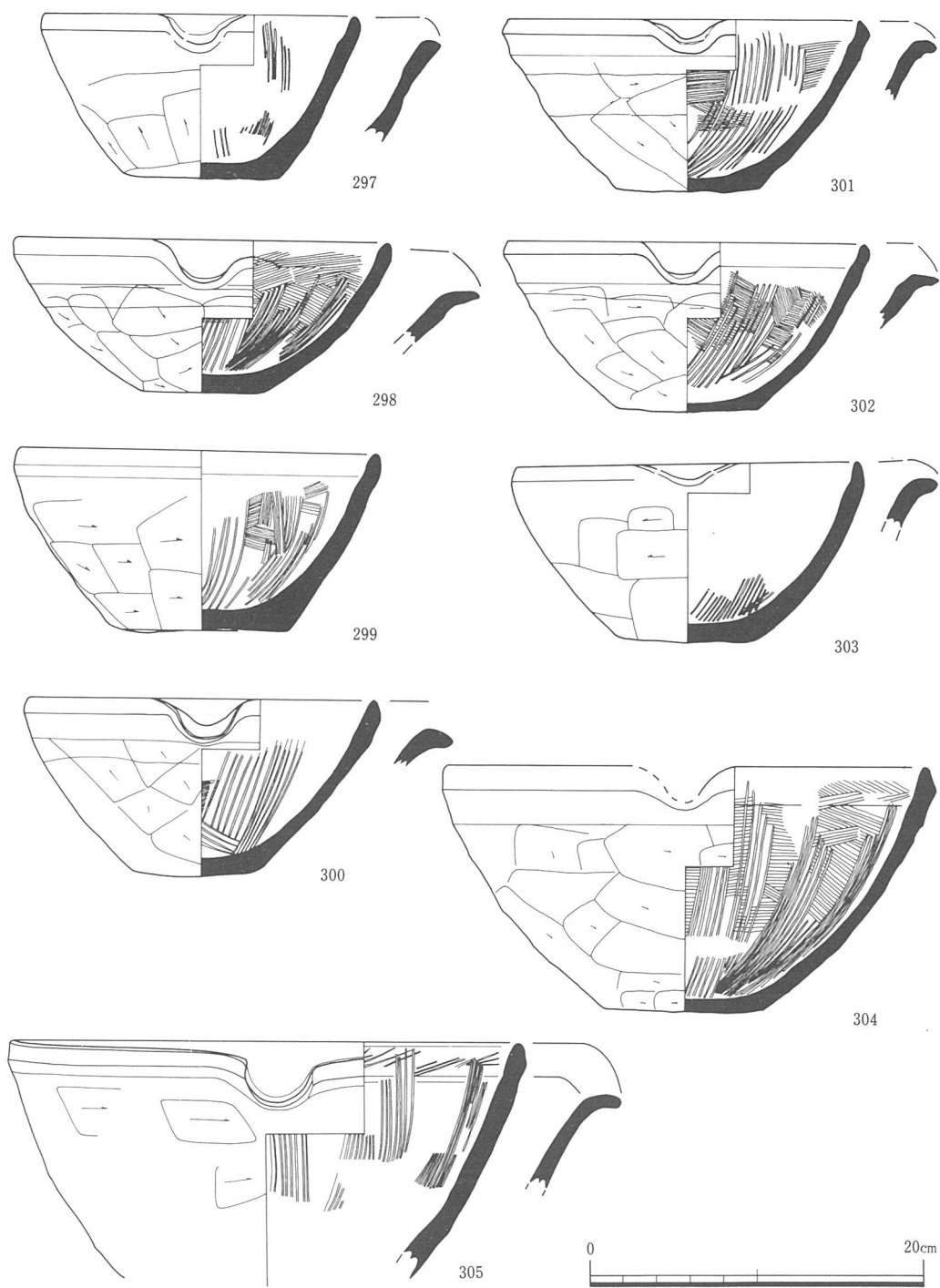
第146図 D地区 02B-O X出土遺物実測図



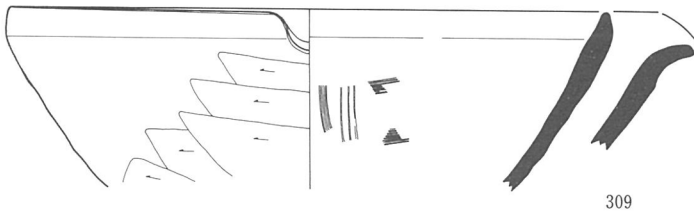
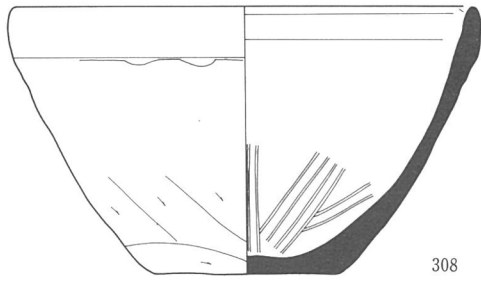
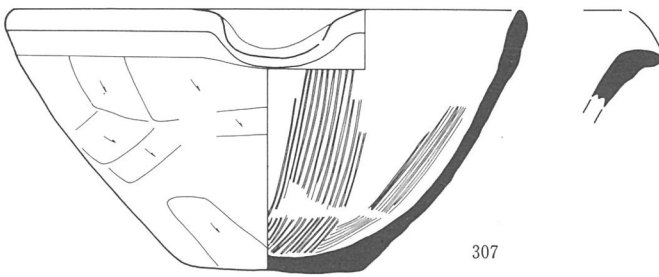
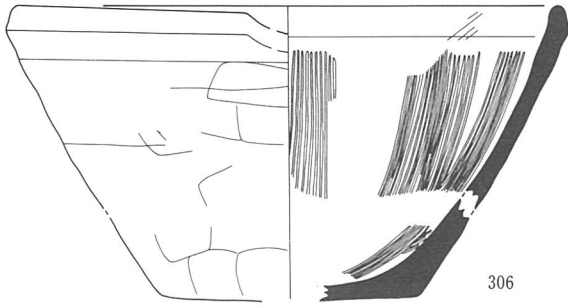
第147图 D地区 02B-O X出土遺物実測図



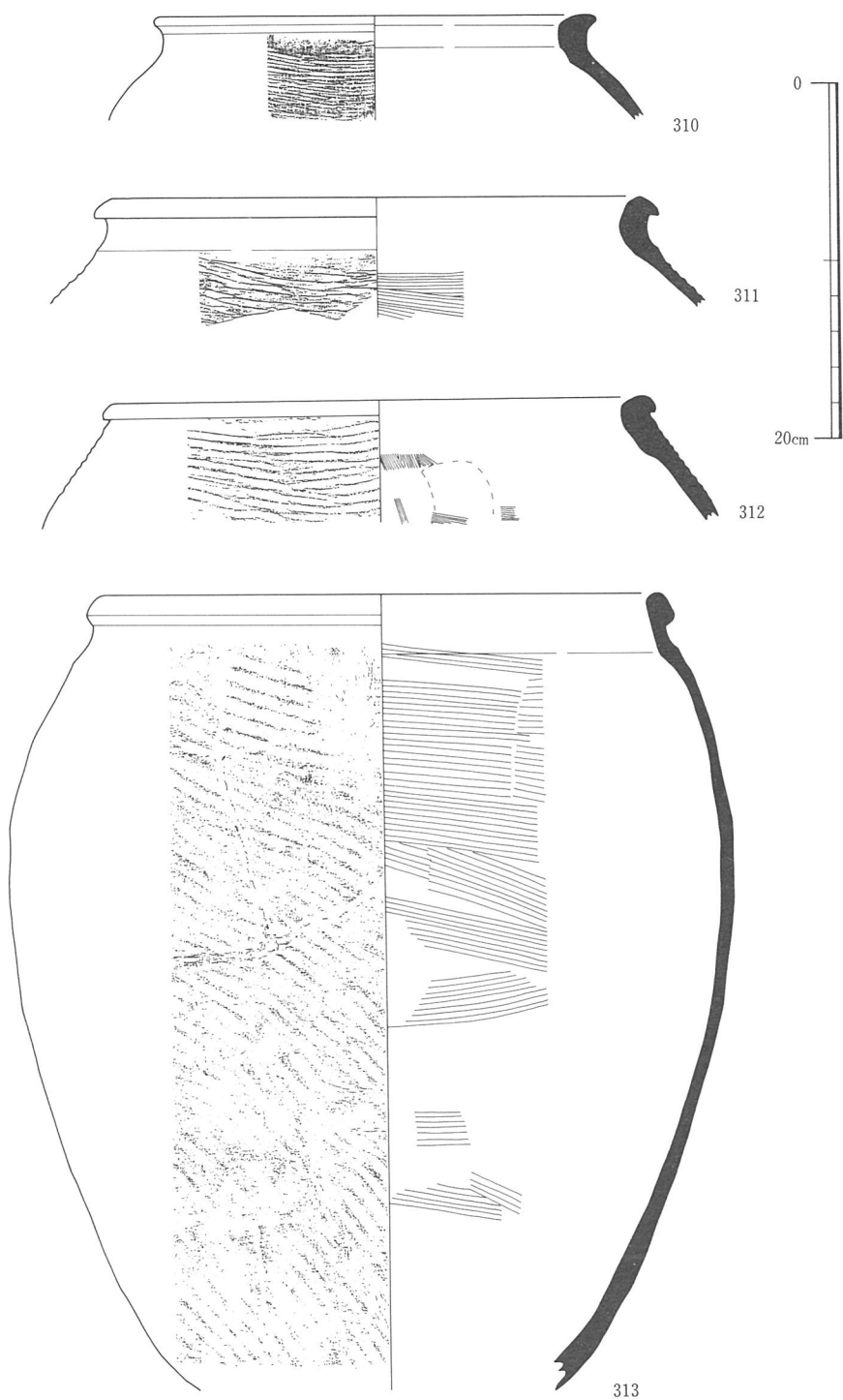
第148図 D地区 02B-O X出土遺物実測図



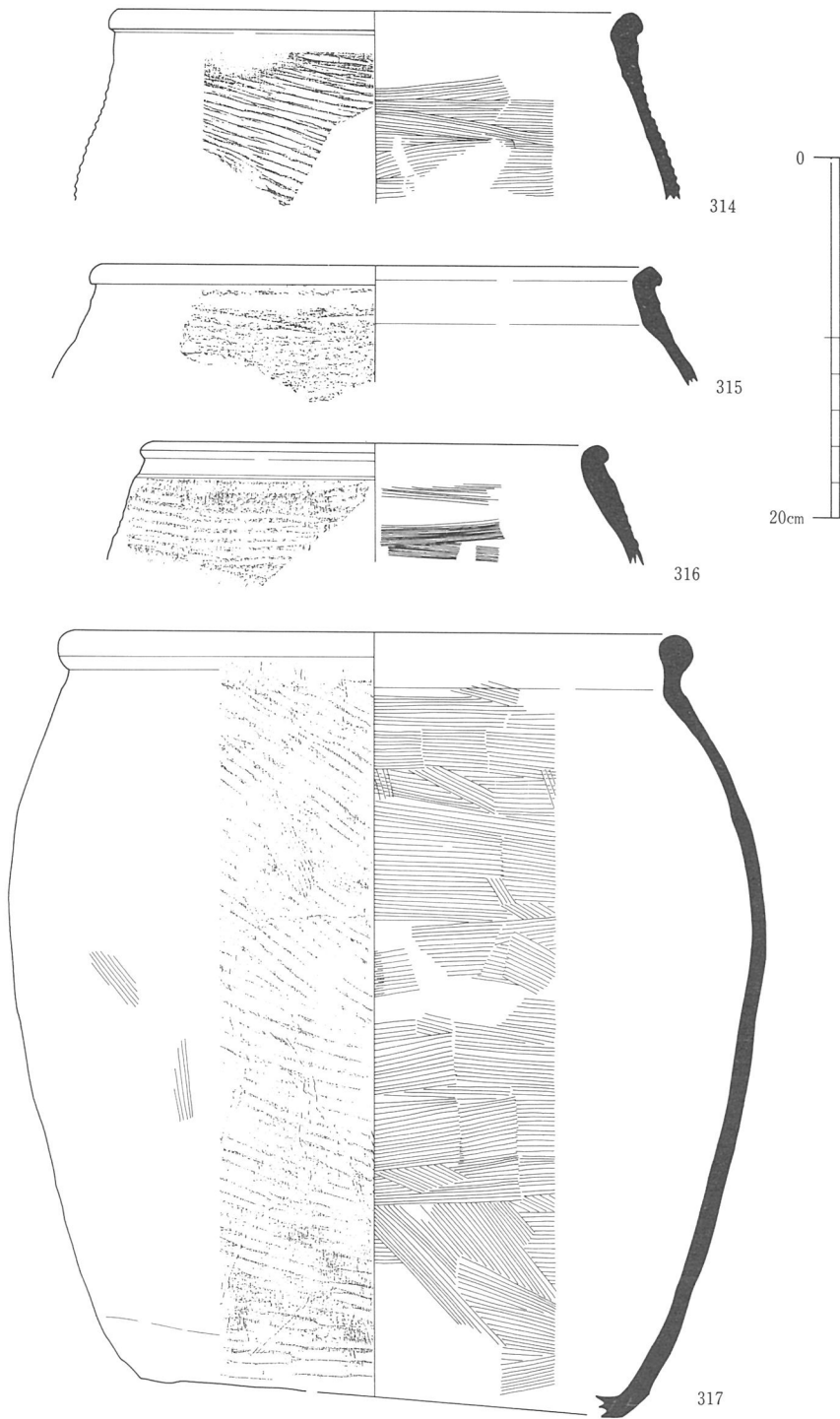
第149图 D地区 02B—OX出土遺物実測図



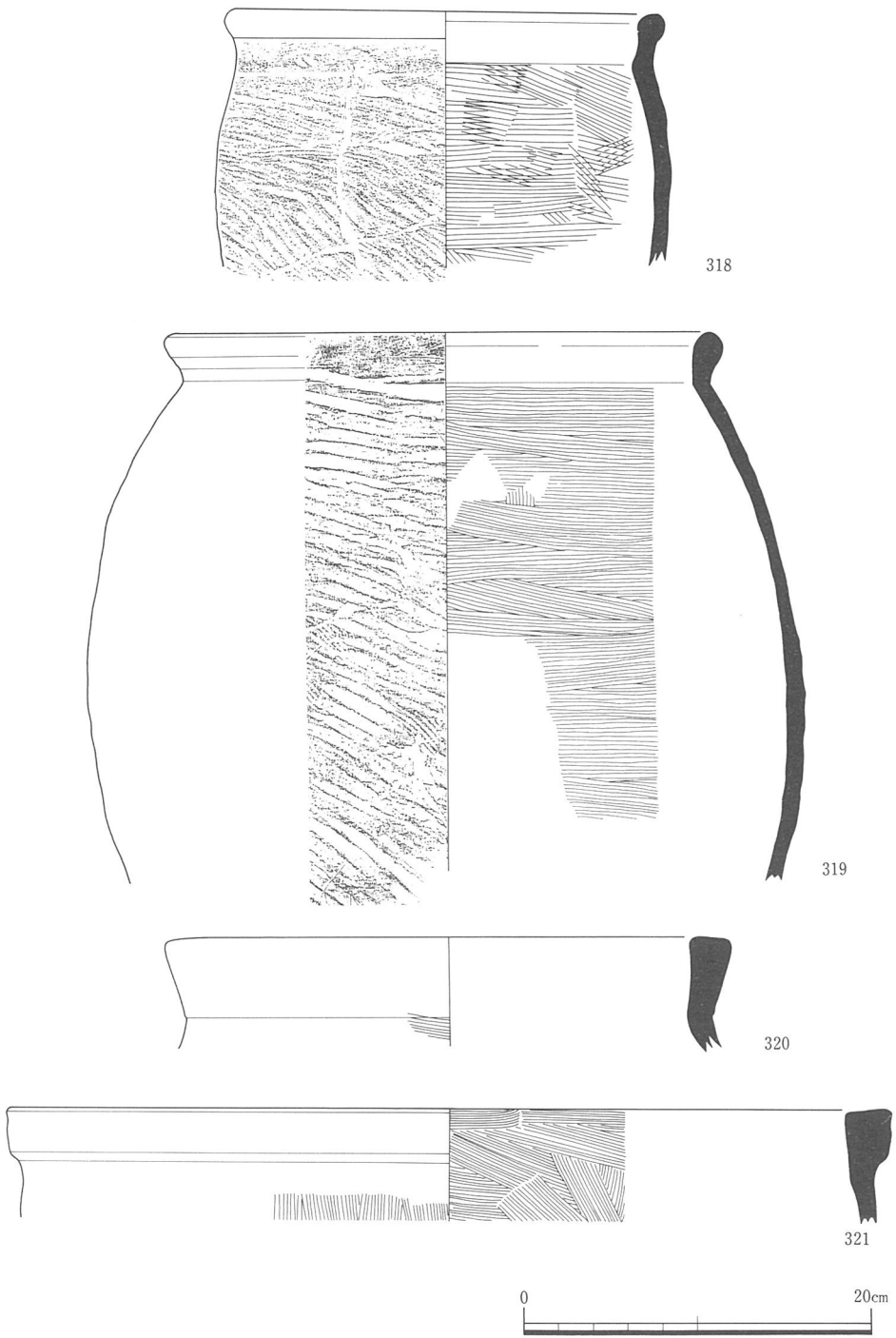
第150图 D地区 02B-O X出土遺物実測図



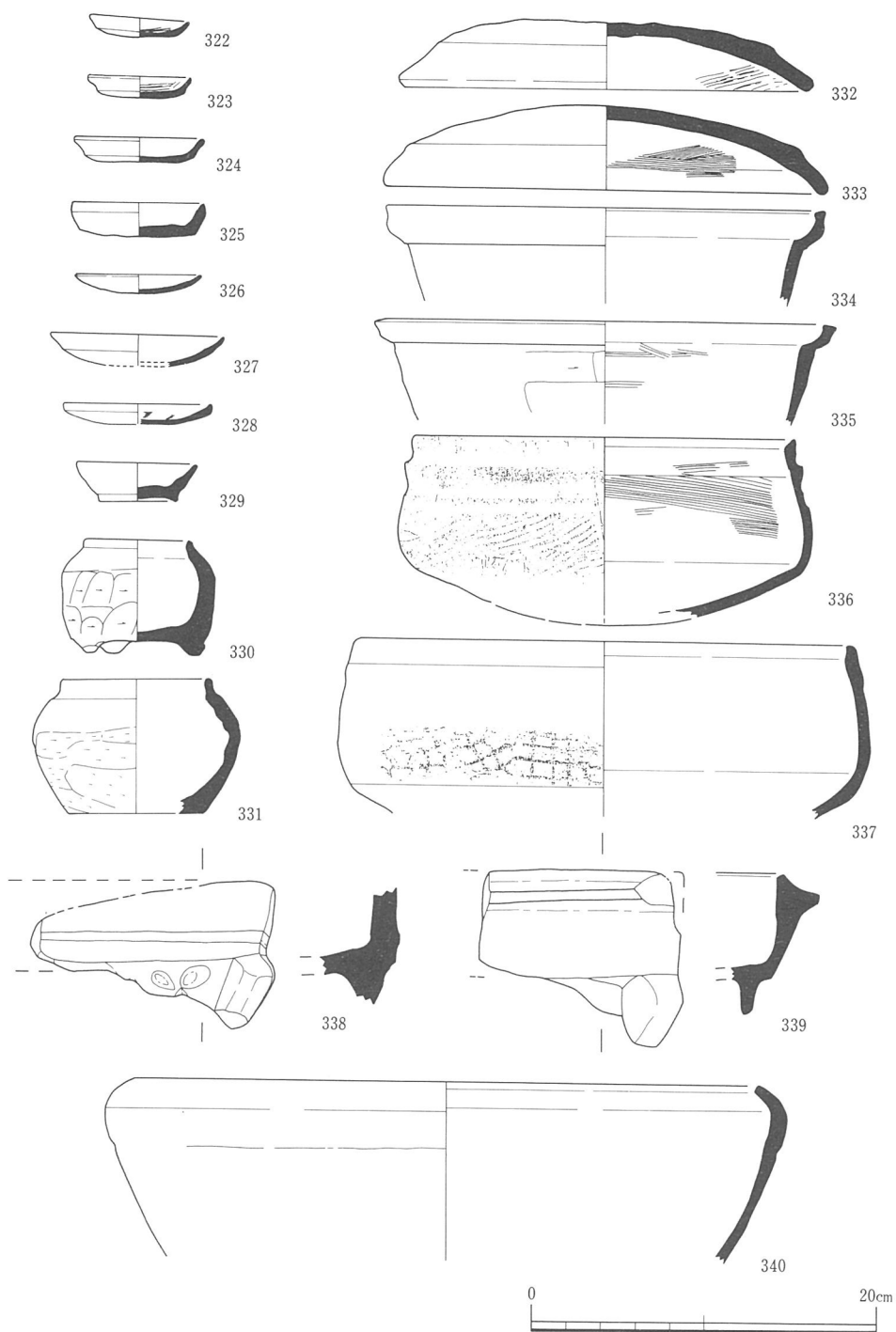
第151图 D地区 02B—OX出土遺物実測図



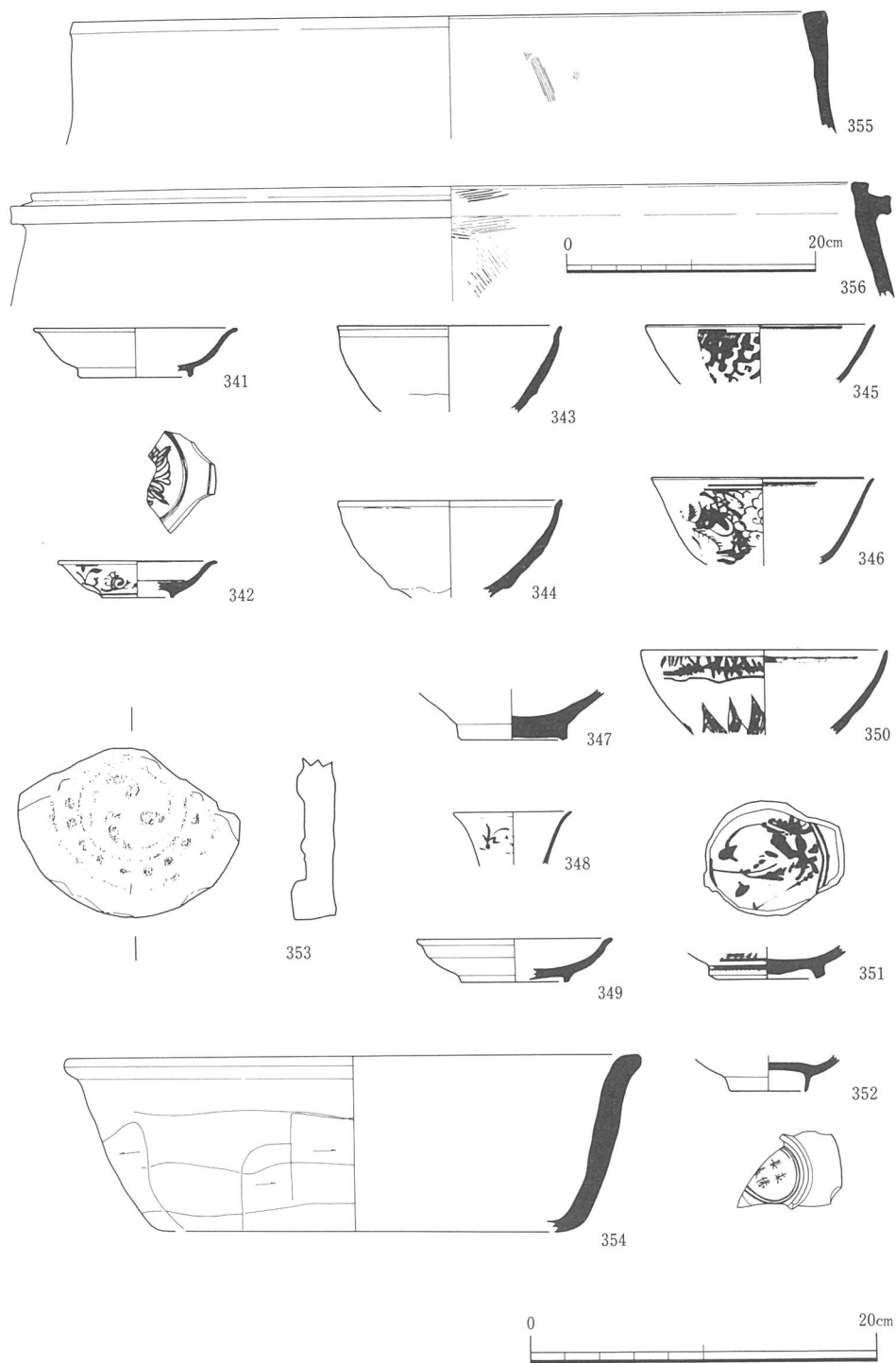
第152图 D地区 02B—OX出土遺物実測図



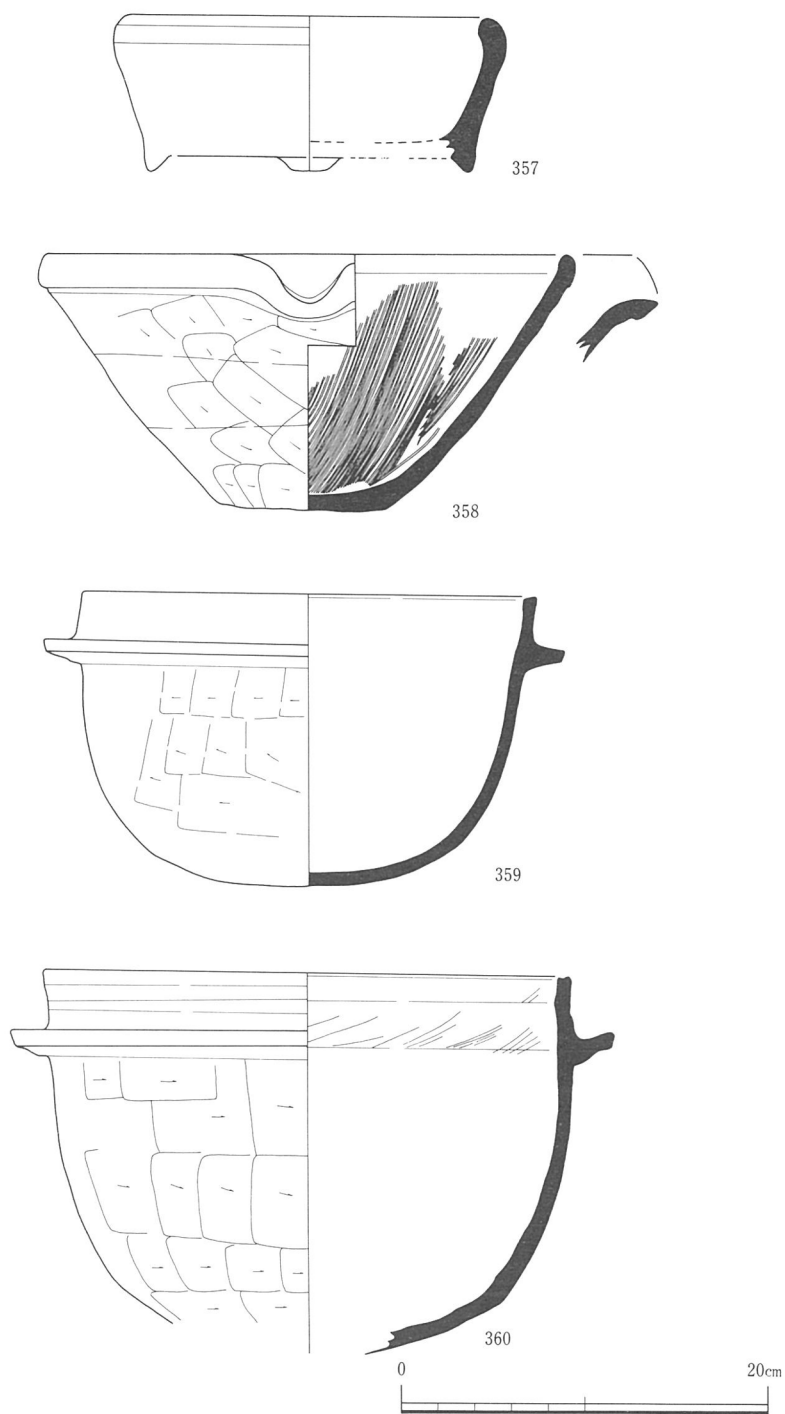
第153图 D地区 02B-O X出土遺物実測図



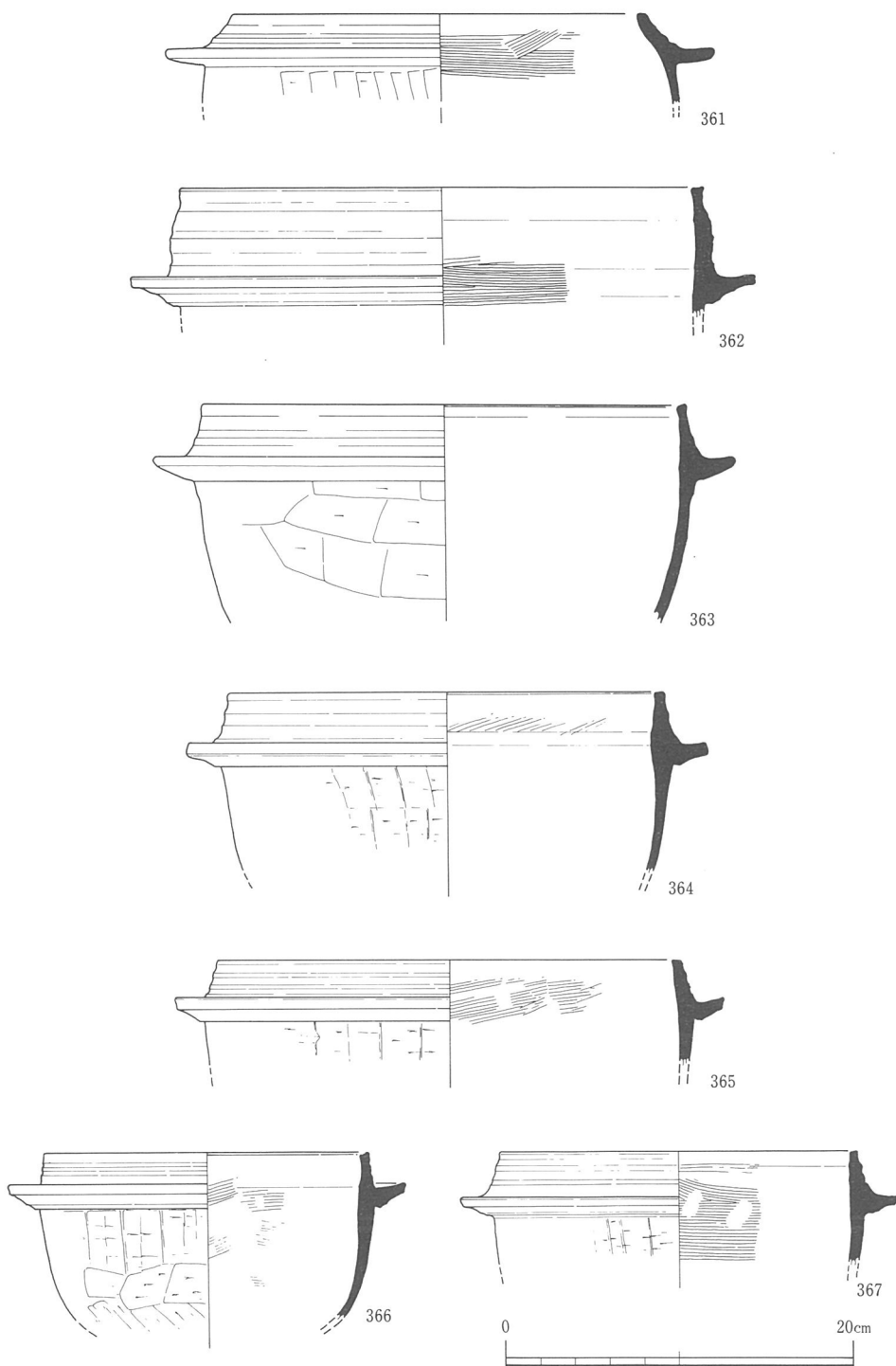
第154図 D地区 02B-O X出土遺物実測図



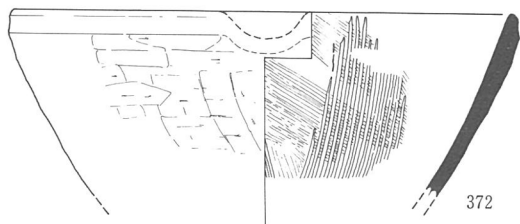
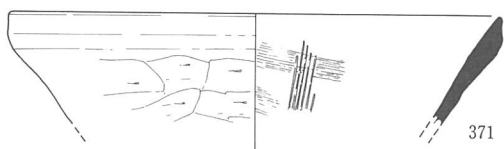
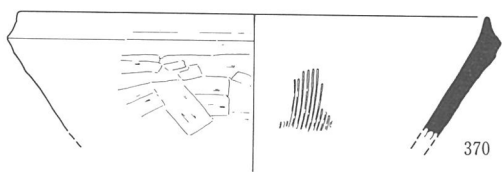
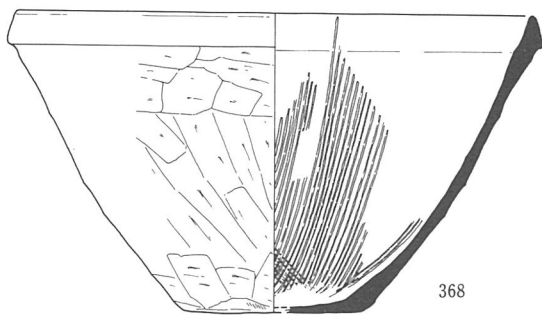
第155图 D地区 02B—O X出土遺物実測図



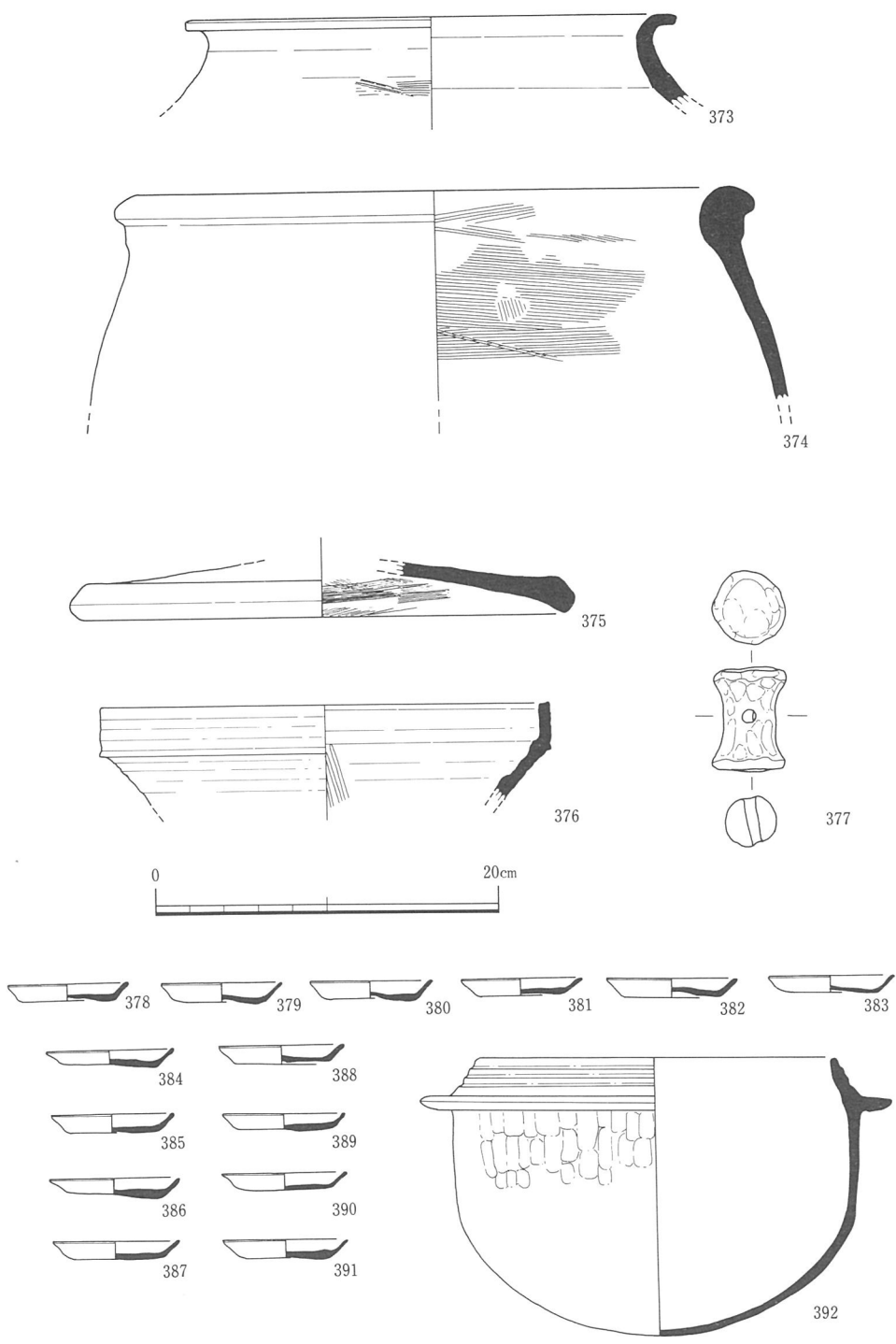
第156図 A西地区 13-00、172-0X、D地区 112A-00出土遺物実測図



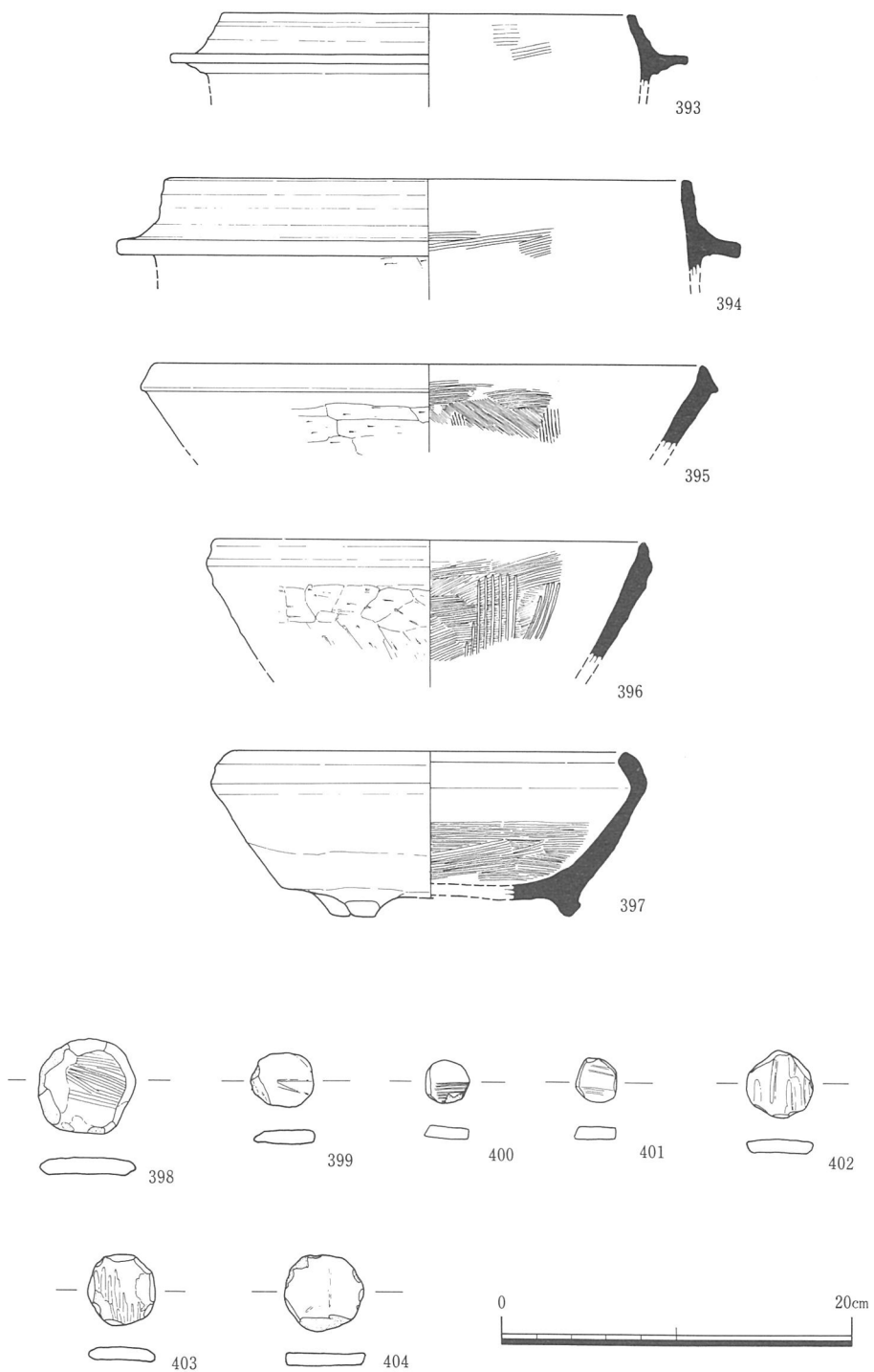
第157図 A東地区 06-O S出土遺物実測図(1)



第158図 A東地区 06-O S 出土遺物実測図(2)



第159図 A東地区 06-O S、D地区117A-O X出土遺物実測図



第160図 A東地区 溝・土壙・井戸 (393~397)、畑・土壙(398~404)出土遺物実測図

第6章 ま と め

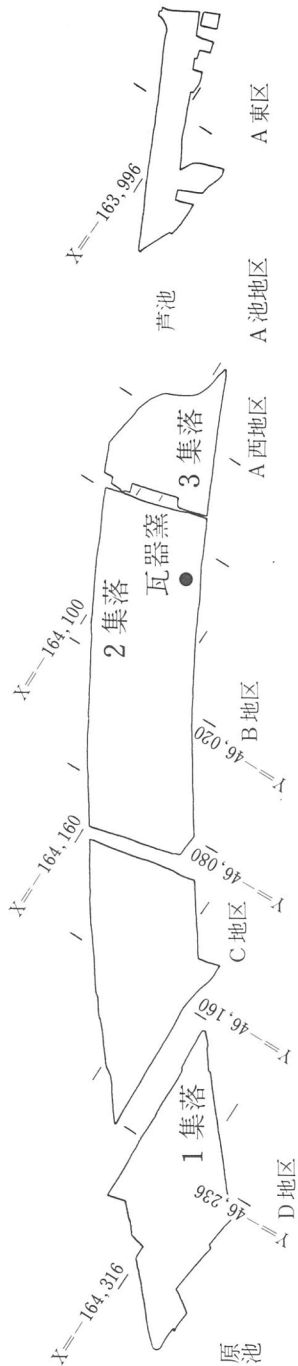
平井遺跡は、古墳時代から室町時代にかけての集落跡として周知されていたが、今回の調査によって、古墳時代後期の自然流路、平安時代中期後半の集落跡、鎌倉時代の集落跡、室町時代から江戸時代にかけての水田址やこれに関連する水利施設、溜池など各時期の遺構、遺物で構成されている事が明確となった。本遺跡の提起する問題は多岐にわたるが、とりわけ、鎌倉時代の集落跡やこれに付属して検出された瓦器窯、また15～16世紀にかけての一括遺物の問題など特記すべき点が多い。平井遺跡の変遷過程は上記以外の時期にもわたるため、第3表で一覧表を記す。

第1節 集落跡について

本遺跡からは、10世紀後半～末と12世紀末から13世紀前半代にかけての掘立柱建物によって構成される集落跡が検出された。この間をつなぐ掘立柱建物の検出例はないが、D地区原池低地、j・k層より多量の11～12世紀にかけての遺物が出土している事から、調査区外に集落跡が存在する可能性は十分に考えられる。

平安時代中期後半、10世紀後半代の集落は、2単位検出される。B地区中央部分の建物2棟、C地区西端の最も標高の高い地点で2棟存在する。各建物共に近接して建てられる。建物は柱穴の切り合いなどほとんどなく、単時期にのみ営まれ、輩出した規模をもつものはない。一棟は、総柱の建物である。地鎮がなされたと考えられる柱穴(B-410-OP)もある。

鎌倉時代、12世紀末から13世紀前半にかけての集落は、掘立柱建物群の密度によって大きく3区分できる。調査区の最も西、原池をのぞむD地区の1集落は、3棟の掘立柱建物で構成される。1棟は、2×2間の東西棟建物であるが掘方が大きく径70cm前後を測り、他の同時期の建物に比べて、圧倒的な大きさを示す。また一柱穴には、根石が存在する。周辺からは、室町時代の瓦類の出土と共に、鎌倉時代の瓦類の出土もある。これらの点から、この大型の掘方をもつ建物は、瓦葺建物であった可能性が強い。2集落は、B地区中央北側に展開する。3つの集落の内では最も建物の数が多く、5棟以上で構成される。出土遺物からは2時期考えられる。建物群のすぐ西側には、地形に合わせた溝が一直線に掘削られており、それより西側には、柱穴の分布が極端に少ない空間がある。建物のまわり



第161図 集落配置図

には建物に平行或いは直交する小溝が存在する。B-6、7-OBの西側の小溝群は、方位、規模などからみて耕作に伴う可能性が強い。この集落に付属する溝には、中世日常雑器類以外に、スサ入りの焼土痕などが多量に一括投棄されている。また、壁が焼土化した土壌や未使用の羽釜が一括投棄された土壌など存在する。土器焼成の可能性をもつ土壌群である。A西地区に展開する3集落は、2棟以上の建物で構成される。建物の西側には土壌が検出され、スサ入りの焼土痕や中世日常雑器類が一括投棄されている。2集落と3集落間からは、瓦器焼成窯が検出される。1集落を除けば、2、3集落共に土器焼成の可能性が高い土壌群やスサ入り焼土痕などが付属している。

以上の点から、本遺跡の鎌倉時代集落を概観すると1集落には瓦葺建物の可能性をもつ大型の建物以外は、ほぼ等質的な規模をもち、13世紀前半を中心とする極く単期間に営まれている。各集落には、日常雑器類を焼成した可能性をもつ土壌や瓦器焼成窯など設置される。

15世紀代には、大規模な水利施設、溝や淵などが建設される。これらの遺構にはC・D地区を中心にして大量の瓦類が一括投棄されている。柱穴は検出されていないが、礎石建物が存在した可能性は強く、寺院などの遺構が想定される。
(渋谷・小谷)

第2節 B-1028-OO、瓦器焼成窯について

B-1028-OOは、構造、規模、遺物出土状況からして、西側に焚口をもち、燃焼部と焼成部の構造上区別のない瓦器焼成窯であるとの結論が得られたが、以下で、肯定的な要素と否定的な要素を抽出し、「窯」であるかどうかの検討を試みる。

第3表 平井遺跡発掘調査総括表

標準層序	分帯	出来事(遺構・遺物)					平井遺跡の変遷(まとめ)			年代																				
		原池低地	平井面		小阪谷	八田面	居住・墓域	生産・開発	時代	西暦																				
		D地区	B・C地区	A西地区	A池地区	A東地区																								
第1層	I	耕作	耕作	耕作	耕作	小池の拡張(最上部盛土層) 溜池	耕作・溝(01-OS) 井戸(02-OW)	機械化の導入による耕作・小池の拡張 耕地の安定	現代 (昭和期)	AD																				
a層		II	原池の拡大(水没)	(平井面の平坦化(区画の改善)) 耕作	粘土の除去と客土	粘土の除去と客土(01-OZ)	堤の改修(上部盛土層)				土取り穴の埋め立て	溜池堤の改修と耕地区画のさらなる改善 耕地区画の改善による一区画の拡大(生産力の変化・増大) 耕地の確保・拡大	近代	1900年ごろ 1800年ごろ 1700年ごろ																
b層	耕作		(耕作) 耕地区画の改善		客土による耕地区画の改善	客土による耕地区画の改善	堤の改修・池底の浚渫・拡大 (中部盛土層)	客土による耕地区画の改善	大規模溜池の築造・改修 段丘上の谷地形にかんがいた大規模溜池の形成・耕地の拡大 小規模水利施設の廃絶と段丘斜面の耕地化	近世	1600年ごろ 1550年ごろ																			
c層	III														客土	客土	耕作(02-OZ)	溜池	耕作(05-OZ等)	納骨器?の埋設(段丘面)	安土桃山	1500年ごろ 1300年ごろ								
d層		IV	耕作(348-OZ等)・段丘斜面の耕地化→棚田・段々畑の形成		粘土取り穴(2263-OO)の埋立て 暗渠排水(B-2109-OS)	客土による耕地区画の改善	溜池の形成(下部盛土層)	畑のつくりかえ				小規模水利施設の急増による耕地の確保(または拡大) 小規模水利施設「淵」等の形成(段丘面) 耕地の拡大(低地)	宝町	1500年ごろ 1300年ごろ																
e層	小規模水利施設の全面的な埋立て		小規模水利施設「淵」の急増(249-OX等)	(溝(C-280-OS))					耕作(03-OZ)	溝(06-OS)	耕作?				(耕地化 →)	魔絶(移動?) 中世集落の形成(段丘面)	鎌倉	1200年ごろ 1100年ごろ												
f層	V																		耕地の拡大 段丘斜面の後退	小規模水利施設の形成 (02C-X等)	瓦葺家(2109-OO) 掘立柱建物(04~08-OB) ピット・土塊群	掘立柱建物(01,02,03-OB) ピット・土塊群	(小溝・土塊)	集落の出現(段丘面)	耕地の拡大(低地) 瓦器・土師器等の農業生産 湿地部の開発(低地)	平安	1100年ごろ			
f/g層		耕地の拡大 段丘斜面の後退			掘立柱建物(01-OB等) ピット群	掘立柱建物(B01-OB等)								奈良~飛鳥					700年ごろ											
g層		土取り?(250-OO等) 湿地?の開発													古墳	500年ごろ 300年ごろ														
h層	VI	(須恵器)	小谷(84B-OX)の埋積 (須恵器)	自然流路の埋積 (須恵器・埴輪)	最寄りに古墳?(段丘面) 須恵器陶工業団(小阪遺跡・低地)	弥生の集落?(小阪遺跡・低地~段丘面)	弥生	BC	300年ごろ																					
i層		(弥生土器)	谷地形の埋積											縄文			10000年ごろ 20000年ごろ													
j層 上部		谷地形の埋積													谷地形の形成							後期	旧石器	30000年ごろ						
j層 下部	VII	谷地形の埋積	谷地形の形成						先後期	旧石器	10数万年以前																			
k層												谷地形の埋積	谷地形の形成																	
k/l層	VIII	(旧石器)	古崖錐の堆積	古土壌の形成	古土壌の形成(旧石器)	旧石器人の往来																								
l層			段丘崖の形成	段丘構成層の堆積																										
m層	IX	段丘崖の形成	段丘構成層の堆積																											
n層				IX								段丘崖の形成	段丘構成層の堆積																	
o層																						IX	段丘崖の形成	段丘構成層の堆積						
p層																														
q層	IX	段丘崖の形成	段丘構成層の堆積																											
段上構成層				IX							段丘崖の形成	段丘構成層の堆積																		

(趙・藤田編表)

窯として肯定的な根拠

1. 窯壁を持つこと。あくまで、窯壁の存在は「窯」としての構造を作り出すためのものであり、それ以外に窯壁を設ける理由は見当たらない。窯壁にはスサが入っている。

2. 窯壁の存在と共に、大量の炭層の存在があること。土壌内部から検出された炭層の存在は、二次的に後から外部より廃棄された物でないことは、堆積状況からみて明白である。あくまでも、土壌内部で焼成されたために生じた「炭」なのである。この炭は、土器を焼成するために、また炭素を土器に付着させるために木を燃すことによって生じたものと考えられる。

3. 遺物の出土状況は、その重ね方や遺物が炭よりも上に位置するなど積極的にこの土坑が焼成のためのものであることを物語っている。

窯として否定的な根拠

1. 遺構としては、2点が考えられる。炭層の存在があるにも関わらず、底面に焼けていない。また、土器に炭素の付着があるにもかかわらず、一部、壁に炭素が付着していない。

2. 遺物の上からの疑問点については、3点ある。第一点としては、大多数は、瓦器碗であるが、少量の日常雑器類もふくまれる事実をどう解釈するのか。第二点としては、炭素の付着しない土器があること。第三点としては、従来実験結果から推定していた瓦器碗の焼成方法が、焼成時は土器は下向きに重ねられていたとされるが、今回検出した遺構の中からは、瓦器碗は上向きに重なって出土した。この事実をどう解釈するのか。などがあげられる。

肯定的な根拠については、問題はないが、否定的な根拠については、どのように処理するのか問題である。

遺構についての疑問点については、底面が焼けていないことの原因としては、炭が先に堆積しており、焼成時には既に底面が焼けない状態となっていた。壁に炭素の付着しないことについては、遺物と同じで炭素がまわらなかったと考えられる。

遺物については、少量の瓦器碗以外の器種については、その破片が小破片で、出土した位置が壁にそっており、また瓦器碗と瓦器碗の間からも出土しており、破片の表面に高台の跡が観察できるものもあることから、焼台の可能性が十分に考えられる。炭素の付着しないことの原因としては、遺物の位置によるものと考えられる。瓦器碗が上向きで出土したのは、事実であり、下向きはあくまでも今までの実験による推定である。

以上二側面からみたが、否定的な根拠の基盤は、弱く、B-1028-00は、「窯」とし

て積極的に認定するのが妥当と考えられる。

構造・焼成方法の推定

構造の推定

瓦器窯は、窯壁や炭層の存在あるいは遺物の出土状況からみて、窯にまちがないと考えられる。その構造は、地下を掘りくぼめて造り、上部には、窯壁の残存角度からみてドーム状に壁を造っているものと推定出来る。また、大きさから見て、焚口及び、焼成部と燃焼部の区別がないと考えられる。焚口の位置は、土器や炭層の堆積状況また、残存した窯壁の場所からみても、西側と考えるのが妥当である。

焼成方法の推定

炭層の堆積状態や土層観察および遺物出土状況から、瓦器碗の焼成方法を推定すると以下の様になる。最下層の炭層には、木炭や焼土が大量に含まれるが、遺物の量は、微量である。6単位検出された瓦器碗の接地面は、この上面からである。それ故、最下層は、土器焼成以前になんらかの目的をもって焼かれたものと考えられる。その後、焼成のための瓦器碗がこの層の上へのせられたものとおもわれる。中層の堆積状態は、西側に大量の炭が、反対側には炭と土器が検出されたが、この状態は、土器焼成の状況を物語っている。土器を焼成するため、どのような並べかたをしたのかは、遺物の出土状況から推定するほかない。焼成時の原位置を保つと考えられるものは、まとまりをもって検出された6単位の瓦器碗の存在である。6つの単位は、焚口があったと推定される西側の反対側に、ほぼ等間隔に円を描くようにして配置される。瓦器碗は上向きにならべられ、口縁部は、上と下とは一致せず、炭素のまわりがよくなるように重ねられている。一部の瓦器碗の見込みには高台の跡が残るものがある。その位置に瓦器碗を復元しておけば、炭素の吸着位置からみて、土器がまだ乾燥しない段階に土器を重ねており、最終の炭素付着段階と土器を焼成する段階が同一の場所で土器を動かさないで実施したことが判明する。

平井遺跡出土の瓦器碗の生産と流通

本遺跡の集落には、瓦器窯や羽釜焼成の可能性をもつ土壌などが検出された。この現象は、端に本遺跡B地区、A西地区などだけでなく、近時発掘された大庭寺遺跡でも瓦器窯とよく似た規模、形状をもつ土壌が検出されており、少なくとも堺市では2遺跡で集落に土器焼成の可能性をもつ土壌が付設されていた事になる。日常雑器類は、供膳、煮沸、貯蔵、調理形態で成立するが、従来より、供膳、煮沸形態については狭い分布圏、貯蔵、調理については広い分布圏もつことが指摘されていた。今回の瓦器窯の検出は、日常消耗度

の激しい供膳形態、煮沸形態が、各集落単位で焼成されていた可能性を示すものである。ただ、土器焼成が、各集落で実施されていたのであれば、分布圏が狭いといっても、和泉型の瓦器碗は、泉州や河内地方に分布し、形態、技法などほぼよく似た状況であり、極端なバラエティを示さない事実をどうとらえるのか問題は残る。本遺跡で検出されたB-1028-00、瓦器焼成窯が、11世紀から14世紀にかけての日常雑器として主要な器種である瓦器碗を焼成していた窯であり、13世紀前半は、各地において、瓦器が多量に生産される段階であるため、需要と供給の関係から各集落に窯が設置されるようになったのか、泉州地方の、いわゆる「和泉型」の分布する地域に、各工人が存在し、各集落をまわったのか、あるいは、本遺跡そのものが、工人集団の集落であったのか、問題は多岐にわたって展開される。

今まで、中世日常雑器類の生産と流通を解明するため、各地で瓦器碗の地域色の問題が論じられたきたが、全て消費地出土の遺物を中心としておこなわれてきた。本遺跡出土のB-1028-00、瓦器焼成窯の存在は、従来の地域色設定の方法を根本的に変える遺構であり、生産地から瓦器碗の分布圏を把握し、供膳形態の生産・流通・消費を解明する上で、極めて重要な遺構と考えられる。

(渋谷・小谷)

第3節 平井遺跡出土の15、16世紀の土器について

1. はじめに

泉州地域においては、15・16世紀の一括遺物少なく、編年作業が遅滞している。11世紀～14世紀にかけては、時期による形態変化・技法変化の激しい瓦器碗を指標として、編年案が各地で提起され、既に詳細な時期についても判明しつつある。しかし、13世紀後半以降、瓦器碗は、各地域で、容量縮小傾向を辿り、14世紀末をもってこの傾向は達成される。時期の指標となった瓦器碗が消滅して以降の15世紀～16世紀にかけては、編年の指標となる土器が判然とせず、記年銘とともに出土した土器も少ないことから、編年は遅滞する一方であった。今回、平井遺跡の調査において、15・16世紀の遺物が出土したが、量的にも質的にも良好な資料と考える。15世紀の遺物が主体を占める遺構はB地区2109-OSがあり、16世紀代の遺物は、D地区02B-OXがある。以下で、これらの遺構より出土した遺物、主には羽釜、甕、挿鉢の三器種を使用して、編年案を考える。また、当該期は、堺環濠都市が成立する。農村部に位置する平井遺跡と堺環濠都市を比較するため、以下で土器の比率に注目し、その基礎資料を得るため、遺構単位に破片数の数を計算し、器種単

位・時期単位・場所単位の違いを見る。

2. 出土遺物

B地区2109-O S出土の遺物は、破片数にして4719片が出土し、D地区02B-O X出土の遺物は、破片数にして10284片が出土した。その内訳は前者が羽釜3123片、摺鉢796片、甕492片、鍋23片、瓦質の小皿36片、土師質の小皿42片、井筒30片、火舎32片、瓦87片であり、後者の内訳は、羽釜6078片、摺鉢1656片、甕1043片、鍋32片、火舎66片、瓦869片、中国製陶磁器52片である。この2つの遺構出土の遺物の中で最も多い3器種は、羽釜、摺鉢、甕で、2109-O Sでは全体の器種内で、羽釜が64%、摺鉢17%、甕10%で、02-O Xでは羽釜が59%、摺鉢16%、甕10%をそれぞれ数える。以下で、羽釜、摺鉢、甕の3器種に主体をおき、形式分類を試みる。分類の基準は、各器種共、時期による形態変化の著しい口縁部破片を使用し、羽釜を11形式、摺鉢を7形式、甕を9形式に分類し、各形式において破片数を数え、同一器種、同一形式における瓦質、土師質の割合を明らかにした。

a 羽釜

2109-O S出土の羽釜はA、B、E類がある。その内A類83%、B 1類15%、E類0.2%である。残りの1.8%は口縁部外面に段、もしくは、沈線を持たないものである。A、B類は、96%以上の割合で瓦質製品が占める。02B-O X出土の羽釜には、B 2類を除くすべての型式がある。A類12.8%、B 1類3.4%、C類4.5%、D類50%、E類3.5%、F類4.4%、G類6%、H類10.7%、I・J類4.7%である。A、B類は95%以上の割合で瓦質製品が占めるのに対し、C類は57%、D類76%、E類96%、F類100%、G類97%、H類94%、I・J類は100%土師質製品が占める。

b 摺鉢

2109-O SにはA、B、D類があり、A類70%、B類29%、D類は1%である。A、B類は、瓦質製品が100%に近い数を占める。02B-O X出土の摺鉢はAからE類まであり、A類は11.5%、B類は7.9%、C類は3.7%、D類は68.1%、E類は8.8%である。C類は100%を瓦質製品が占める。D類89%を土師質製品が占め、E類は100%を土師質製品が占める。

c 甕

2109-O SにはC類を除くAからD 1類まであり、A類は8%、B類は49%、D 1類は11%、D 2類は20%、D 3類は12%である。すべての型式は瓦質製品が占めるがD 2、D 3類は焼成不良のものが多い。02B-O XにはB類、D 1類を除くすべての型式がある。

A類は1%、C類は5.9%、D2類は15.8%、D3類は15.8%、E類は29.8%、F類は12.9%、G類は18.8%である。AからD1類は瓦質製品が100%に近い数を占め、D2類は31%、D3類は44%を土師質製品が占め、瓦質製品は焼成不良のものが多い。EからG類は、100%に近い数を土師質製品が占める。

以上、両遺構出土の遺物の割合をみてきたが、2109-O Sと02B-O Xを比較すると、前者から出土した遺物は瓦質製品が主体を占めるのに対し、後者の出土遺物は土師質製品がその主体を占める。この時期の土器の瓦質から土師質への転換はすでに先学の指摘するところであるが、2つの遺構から出土した遺物の検討から、瓦質から土師質への転換期にあたる形式は、羽釜ではC、E類、摺鉢ではD類、甕ではD2、D3類がそれにあてられる。

2. 編年試案

2つの遺構出土遺物を分類し、数的処理を行った。これらの出土遺物は一括で廃棄されたもので、遺構内部の層位的な編年作業は困難であり、型式の変化によっては編年を試みる。それにあたって着目したいのは、型式分類の基準になった各器種の口縁部の変化、瓦質から土師質製品への焼成方法の変化である。

a 羽釜

瓦質製品の口縁部の特徴は内傾する口縁部で、その外面に段、沈線もしくは、凹線を持つ。それに対して土師質羽釜の口縁部は直立もしくは外傾する口縁部で、その外面に段、沈線もしくは、凹線を持つ。さらに口縁部外面の段もしくは凹線が省略されたものが土師質羽釜には見られる。このことから単純にA類からC類、C類からD類、D類からI類、J類への移行が考えられる。B類はA、C類とは系統が別であると考えられ、この型式は瓦質ばかりであることからA、C類と併行するものと考えられる。E類も口縁部の形態の違いにより系統を異にするものと考えられ、口縁部の形態が大きく内湾するものから緩やかに内湾するものへと変化が考えられる。よって、E類からF類、F類からG類への移行が考えられる。E類は土師質であるにもかかわらず、2109-O SでA、B1類に混じり出土していることから、2109-O S出土遺物のなかでは比較的新しい要素を持つものとしてとらえられる。よって、E類は瓦質から土師質への転換時に位置づけられ、C類と併行するのが妥当であると考えられる。J類は口縁部外面に段もしくは、凹線を持たず、器高も低くなるものでI類と併行もしくは新しくなると考えられる。

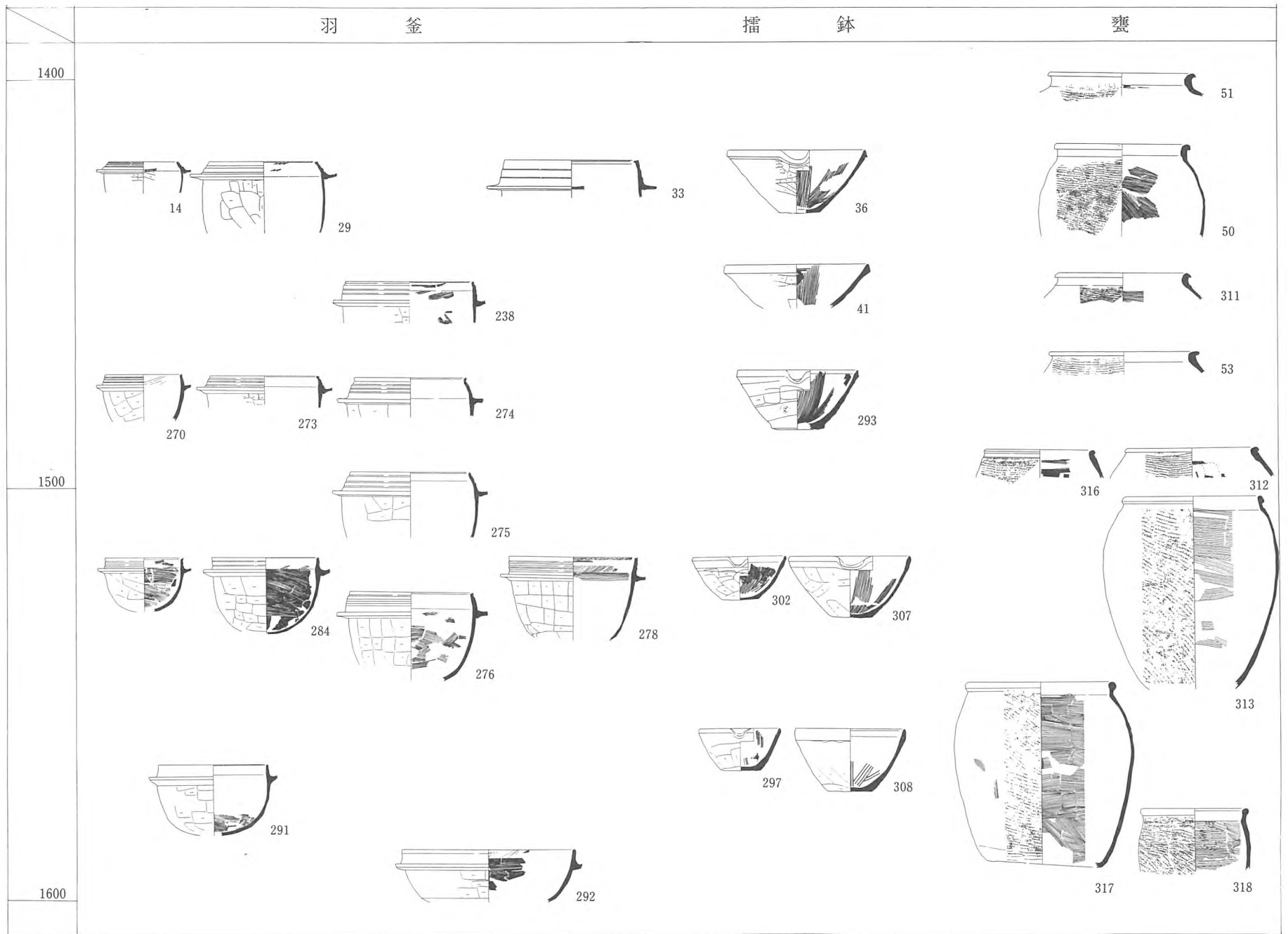
b 摺鉢

瓦質摺鉢の口縁部の特徴は、外傾する面を持つことがあげられる。一方、土師質の口縁部は、口縁部直下に強くヨコナデを施すことにより口縁部に面を持つもの、さらに面を持たないものが多い。瓦質摺鉢の口縁端部は、断面三角形を呈するのに対し、土師質摺鉢の口縁端部は、断面三角形のものに混じり、口縁端部が丸いものがある。このことから口縁端部の形態は、断面三角形のものから丸いものへと変化することが考えられる。よってA類からB類、B類からC類、C類からD類、D類からE類への移行が想定できる。

c 甕

瓦質甕の口縁部の特徴は、口縁端部を下方に短く折り曲げるいわゆるカギ形の口縁部に短い頸部を持つものと玉縁状の口縁を持ち、頸部のないものがある。この形態には、口縁部直下までタタキを施すものと口縁部直下をヨコナデするものがある。土師質甕の口縁部の特徴は、玉縁を上下に伸ばした形の口縁部を持ち、その直下にヨコナデを施すものと玉縁状の口縁部に短い頸部もしくは外傾する頸部を持つものがある。以上のことから口縁部の形態はカギ形のものから玉縁状のものへと変化する。よって単純にA類からB類、B類からD類への移行が考えられる。B類には短い頸部が見られることに対し、D類は頸部を持たない一群であることから、頸部の省略が考えられ、C類はB類とD類の中間に位置づけられるものと考えられる。土師質であるE類は、口縁部直下に強いヨコナデを施し、D3類と類似することから、D類の後に位置づけられる。F、G類は、玉縁の口縁部直下に短い直立もしくは、上外方にのびる頸部がつき、E類より新しい要素をもつものとしてとらえられ、また、F類からG類への移行が想定できる。以上三器種の変遷を想定したが、二つの遺構に数型式の遺物が含まれており、かなりの時間幅を予想できる。

次に、3器種のそれぞれの型式の他遺跡での共伴関係をみていくことにする。箕土路遺跡⁽¹⁾822—OWでは羽釜A、B1類、挿鉢A類、甕D類が共伴している。堺環濠都市遺跡⁽²⁾75地点SK—026では羽釜A類、甕D2類が共伴している。堺市金岡神社遺跡⁽³⁾S F002から羽釜A類にB1、B2類と考えられるものと甕C類が出土している。羽釜A類より新しい要素をもつ羽釜C類は、前述した堺環濠都市遺跡⁽⁴⁾75地点SK—023で甕D2類と共伴しており、同遺跡⁽⁵⁾19地点S F001では羽釜D類、挿鉢D、E類に混じり出土している。堺環濠都市遺跡⁽⁶⁾85地点S F001では羽釜D、H類にまじり、I類、挿鉢E類、甕G類と考えられるものが出土している。以上のことからおおまかに共伴関係をみると、羽釜A、B1、B2類、挿鉢A類、甕C、D類は共伴することが予想でき、羽釜C類は、甕D2類とも共伴する可能性が考えられる。羽釜D類は、H類、挿鉢D、E類と共伴し、羽釜I類は挿鉢



第162図 15・16世紀土器編年表

E類、甕G類と共伴することが予想できる。以上のことを踏まえて、型式分類したものをそれぞれに実年代を与える作業になるわけであるが、年代を推定できる資料として堺環濠都市遺跡の焼土層がある。上野・白神・森村氏は文献に残る堺環濠都市の11回の大火のうち応永6（1399）年、天文1（1532）年、天文22（1553）年、天正3（1575）年、元和1（1615）年の大火を、発掘調査によって、焼土層と比定し、遺構及び焼土層出土遺物を使い編年⁽⁷⁾を試みている。そのなかで、応永6年～天文1年までの133年間に羽釜C類、播鉢A類、甕D3、E類、天文1年～天文22年までの21年間に羽釜G類、播鉢D類、甕F類、天文22年～天正3年までの22年間に羽釜D、H類、天正3年～元和1年の40年間に羽釜I類、播鉢E類が報告されている。以上のことを参考にして年代を想定すると羽釜G類、播鉢D類、甕F類は16世紀前半から中頃の年代が与えられ、羽釜F類はG類より古い型式であることが予想され、羽釜E類はF類と同じ、もしくは少し前の16世紀初頭の年代が与えられる。羽釜I類、播鉢E類は、16世紀の終わりから17世紀初頭の年代が与えられ、羽釜J類もほぼ同時期になるものと考えられる。羽釜A類は、応永の焼土層に含まれることから少なくとも14世紀末、15世紀初頭には存在していたものと考えられる。甕B、C類は甕A類より新しい時期が与えられると考える。よって播鉢A類、甕A類も羽釜A類と同様の時期が与えられる。羽釜C類には、瓦質、土師質製品が共存し、A類に比べ若干新しい時期と思われる。羽釜C類は、鳥帽子形八幡神社鎮壇具の瓦質羽釜⁽⁸⁾が類似しており、本殿の建立が文明18（1480）年であることから15世紀末の時期が与えられる。また前述した堺環濠都市遺跡75地点SK-023で甕D2類と共伴していることから15世紀末から16世紀初頭の時期が与えられる。甕D3類も同様の時期が与えられよう。甕E類は甕D類、F類の中間に位置づけられ、16世紀前半と考えられる。羽釜D類は丹生官符神社第一殿階段礎石下から発見された土師質羽釜が類似しており、社殿全部の完成が天文10（1541）年と考えられることから、D類は16世紀前半から中頃の年代が与えられる。

4. まとめ

平井遺跡出土の15・16世紀の遺物中で羽釜、播鉢、甕の3器種に限り編年を試みた。年代を決定できる資料、良好な一括資料が少ない現時点での予察的検討であり、その正誤は、将来泉州における発掘調査の成果に期待するところが大きい。

ここではこの編年試案を使い、検出した遺構を概観することでまとめにかえる。

今回の発掘調査で15・16世紀の遺物が出土した遺構は、主にD地区に集中して検出した。特に注目する点は、水利施設と考えられる溝と水溜めに使用されたと考えられる遺構の出

現である。前者の溝にはB地区2109-O S、C地区280-O S、D地区03、351-O S、100-O Xで、後者の水溜め遺構にはD地区02B-O X、C地区西側の長崎屋小坂店建設に伴う発掘調査⁽¹⁰⁾で検出された淵と呼ばれる遺構である。2109-O Sは前述した通り、若干新しい要素をもつ挿鉢が出土していることから15世紀末から16世紀初頭の時期が与えられ、03、351-O S、100-O Xは羽釜A、B 1、B 2、D、H類、挿鉢B、D類、甕B、C類が出土し、16世紀後半まで機能していたものと考えられる。C地区280-O Sは羽釜H、J類、挿鉢D、E類が出土しており、16世紀後半まで機能していたものと考えられる。後者の02B-O Xは前述した通りであるが、羽釜、挿鉢、甕に新しい要素のものがみられ、17世紀初頭まで機能していた可能性が考えられる。小阪遺跡で検出された淵1出土の遺物は羽釜F、H類と考えられるものが報告されており、16世紀中から後半⁽¹¹⁾の時期が与えられるものとする。以上主な水利施設と考えられる遺構に年代を与えたが、平井遺跡周辺では15世紀後半には大規模な水利施設が出現し、16世紀終わりから、17世紀初めにはこれらの遺構は完全に埋め戻され、新たな水田が築かれたものとする。(小谷)

この小文をまとめるにあたり、渋谷高秀氏の協力を得、森村健一、樋口吉文、続伸一郎、嶋谷和彦、白神典之、増田達彦各氏から調査資料及び多くのご教示を受けた。感謝の意を表します。

註

- (1) 高島徹 岡戸哲紀 西村歩『箕土路遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1987
- (2) 森村健一 上野俊雄「堺環濠都市遺跡発掘調査報告-S K 75地点-」『堺市文化財調査報告書第21集』1985
- (3) 川口宏他「金岡神社遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告書第22集』1985
- (4) (2)に同じ
- (5) 北野俊明 野田芳正「堺環濠都市遺跡発掘調査報告-市之町東4丁 S K T 19地点-」『堺市文化財調査報告書第20集』1984
- (6) 土山健史「堺環濠都市遺跡発掘調査報告-甲斐町東4丁 S K T 85地点-」『堺市文化財調査報告書第31集』1986
- (7) 森村健一 上野俊雄 白神典之「堺環濠都市遺跡出土土器・陶磁器編年試案」『堺市文化財調査報告書第15集』1983
- (8) 松田正昭「和歌山における地鎮・鎮壇の遺構」『古代研究』-28・29-元興寺文化財研究所 1984
- (9) 尾上 実「鳥帽子形八幡神社出土の土器」『中世土器研究26』1983
- (10) 野田芳正「小坂遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告書第12集』1983
- (11) (10)に同じ

参考文献

上野俊雄「堺環濠都市衆と和泉型土器-15、16世紀中心として」堺市文化財調査報告第21集

付論 平井遺跡265土壙焼土の考古地磁気測定

大阪府立大学総合科学部地学教室

渋谷 秀敏

夏原技研

夏原 信義

はじめに

考古地磁気年代推定の原理、方法などについては、すでに詳しい解説が、中島・夏原(1981)によって出版されているのでここでは述べないが、今回の測定結果を解釈する際や今後の測定試料を選定する際に参考となる点を少しあげたい。

考古地磁気による年代推定の最も基本的な原理は、測定によって土が焼かれた時の地磁気方向を復元して、すでにある程度明らかになっている過去の地磁気方位と比較することである。従って、焼土が冷えてから動いていないことが非常に重要である。これは、移動していないのみならずおなじ位置でも回転をしてはいけない。回転に対しては考古地磁気測定はたいへん弱く、数度の回転が致命的な影響を与える。窯跡などでは大きな回転を被っていないことが多いが、炉跡などのあまり高温になっていない焼土は機械的強度も弱く大きな問題となってくる。特に、炉などからかき出した焼土の場合には全く無意味な測定しかできない。そのような場合は焼土の断面がパッチ状になっていることが多いので試料採集時に注意が必要である。

我々は最近考古地磁気試料に対しても交流消磁を適用している(Shibuya, 1984、渋谷・夏原, 1985)。交流消磁については古地磁気岩石磁気に関する一般的な教科書(例えば McElhinny, 1973; 河野, 1982など)には詳しいが、わが国の考古地磁気分野ではあまり行なわれていないので、簡単な解説を行いたい。焼土の磁化は土中の小さな磁性鉱物の粒子によって担われている。これらの粒子は個々には常に磁化を持っているのだが、土壌が焼かれるまでは、ほとんどばらばらの方向を向いており、全体としては非常に小さな磁化しか持っていない。しかし、これが焼かれると、個々の粒子は固有の温度で磁化を失い、冷却時に周りの磁場の方向に磁化する。土壌中の磁性粒子は自然物であるので組成、大きさなどがまちまちである。磁性鉱物粒子の磁化方向の安定性(熱に対する安定性、交流磁場に対する安定性など様々なものがありうる。これらの安定性はお互いに完全には比例し

ないが、ある程度関係がある。)はこれらのファクターで変化するので土中には様々な安定度を持った粒子が混在していることになる。一般に十分に温度の上がった焼土の場合、安定な粒子の磁化が書きかえられて、当時の磁場の方向にそろっているので、強く安定な磁化を持っており、少々不安定な磁化がその後生じても全体の磁化方向にはあまり影響しない。しかし、温度の十分上がっていない焼土の場合には、安定な粒子の磁化が書きかえられていないので、不安定な粒子の磁化の全体に対する寄与が大きくなっている。不安定な粒子の磁化方向は、長時間の埋蔵中や試料採取後保存中の磁場の方向に変化していることがある。そのような場合は、全体の磁化方向もひきずられていることとなる。このような不安定な磁化は試料を交流磁場にさらし、その振幅をなめらかにゼロに近付けることによって、試料全体としては消してしまうことができる。ただし、交流磁場に対する安定性と弱い磁場に長時間さらされたことに対する安定性は完全には比例しないので、いかにどの交流磁場をかければ二次的な磁化を消せるかは個々に異なっている。また、消磁のために強い磁場にさらすのであるから、磁場のプラス側とマイナス側に少しはあるアンバランスによって付く磁化がかえって焼かれたときの磁化を覆ってしまう場合がある。そこで、普通は1サイトから1個以上の試料を選び、弱い方から段階的に様々な交流磁場で消磁し、いかにどの交流磁場が適当であるか確かめた後、残りの試料を消磁するようにしている。

測定手順

試料採取の方法については中島・夏原(1981)を参照されたい。採取した試料数は9個であった。試料採取の際用いた磁気コンパスの偏角の補正值として理科年表(1987年版)による -6.4° を用いた。残留磁化の測定は大阪府立大学総合科学部地学教室のスピンナー磁力計で行った。消磁は、同教室の三重磁気シールド中の2軸回転式交流消磁装置で行った。測定の手順はまず全試料の残留磁化を測定し、次に1個の試料について段階交流消磁を磁化強度が消磁前の10%以下になるまで行い、その結果を参照して適当と思われる強度の交流磁場で残りの試料すべてについて消磁するという順序に従った。

測定結果

段階消磁の結果を第1図に示す。10m Tの消磁で二次磁化成分がなくなった後は原点に向かってきれいに消磁されている。ここでみられる二次磁化成分は方向から見て試料採集後実験室内で獲得したものであろう。この結果より10m Tの消磁が二次磁化を消すのに適当と判断して、残りの試料はすべて10m Tで消磁した。

各試料の消磁前及び消磁後の磁化方向は表1及び図1に示した。磁化方向はあまりまと

まりがよくなり、これから年代決定を行うことは適当ではない。

結論

平井遺跡瓦器窯から得られた試料の磁化方向は年代推定可能なほどのまとまりをしめさなかった。

参考文献

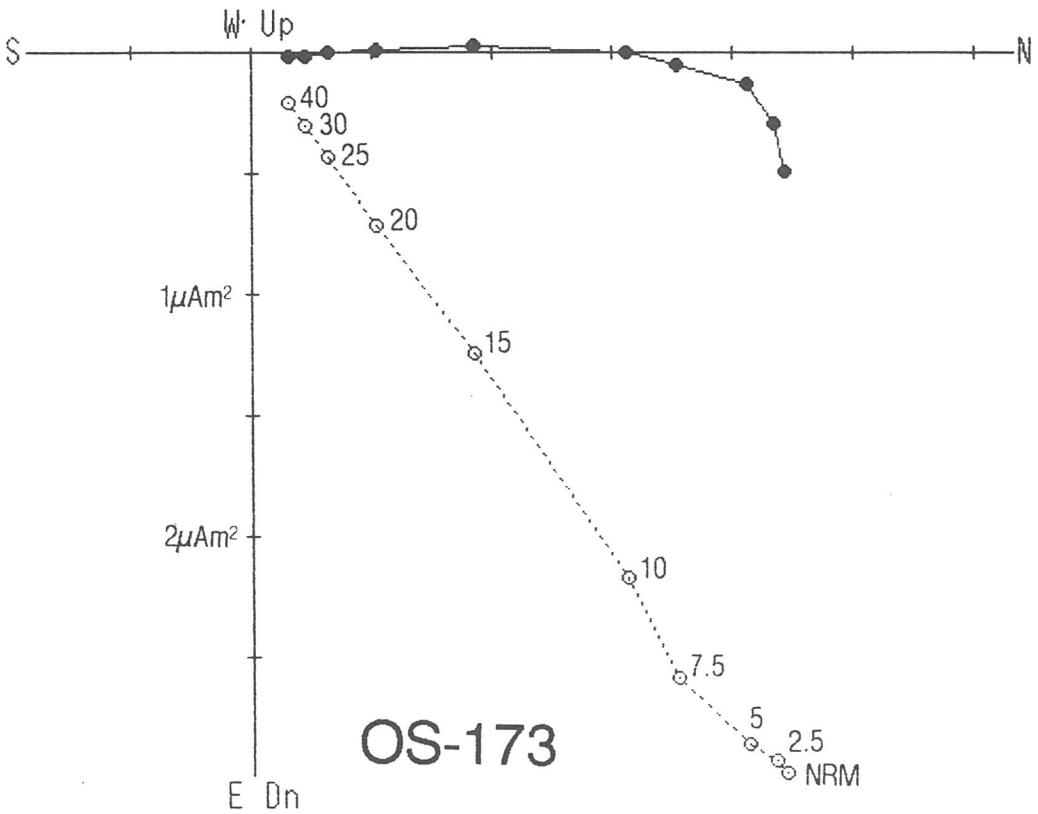
- 河野長 (1981) : 岩石磁気学入門、UPアースサイエンス、8、東京大学出版会。
 McElhinny, M.W. (1973) : Paleomagnetism and plate tectonics. Cambridge Earth Science Series, Cambridge University Press.
 中島正志、夏原信義 (1981) : 考古地磁気年代推定法。考古学ライブラリー9。ニュー・サイエンス社。
 Shibuya, H. (1984) : Several archeomagnetic measurements on baked earths in Kyoto Prefecture, Rock Mag. Paleogeophys., 11, 1-3.
 渋谷秀敏、夏原信義 (1986) : 四天王寺食堂焼土遺跡の考古地磁気測定、「四天王寺」- 食堂跡 -、(食堂再建計画に伴う発掘調査報告書)、大谷女子大学資料館報告書、15、54-67。

試料番号	消磁前			消磁後 (10mT)		
	偏角 (°)	伏角 (°)	磁化強度 (μAm^2)	偏角 (°)	伏角 (°)	磁化強度 (μAm^2)
171	7.4	60.3	.246	-10.2	66.5	.125
172	25.1	43.1	.178	-0.2	53.3	.082
173	8.3	51.7	3.69	0.2	54.3	2.67
174	1.5	45.2	3.15	-2.3	42.3	2.09
175	-19.3	37.0	.302	-24.8	32.8	.184
176	-36.6	50.9	.258	-33.5	52.1	.125
177	-17.7	50.9	.334	-18.5	48.7	.182
178	-21.3	55.9	.418	-13.5	60.0	.206
179	-18.4	46.4	4.94	-5.7	49.1	3.25
平均	-8.0	50.5		-12.5	51.6	
	95%信頼円の半径=9.3°			95%信頼円の半径=7.9°		

表1 各試料の磁化の方向と強度

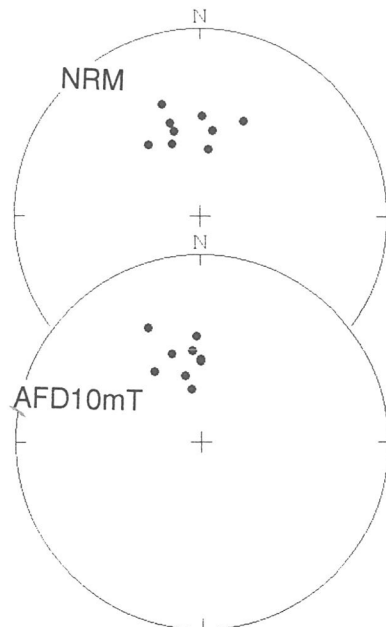
第1図 パイロットサンプル (173) の段階交流消磁結果の直交消磁図。

各消磁段階での磁化ベクトルの終点の水平面と南北軸を含む垂直面に投影したもの



第1図

を合わせた図で、白丸は水平面への投影を黒丸は垂直面への投影である。この図上で安定な磁化は原点に向かう直線で表される。水平面投影の点の横にある数字は交流消磁レベルで、単位はmT（ミリテスラ）である。単位はS I 単位系で示したがcgs単位系との換算は、 $1 \text{ mT} = 10 \text{ Oe}$ 、 $1 \mu \text{ Am}^2 = 10^3 \text{ emu}$ である。



第2図

第2図 各試料の交流消磁前と消磁後の残留磁化方向の等面積投影図。

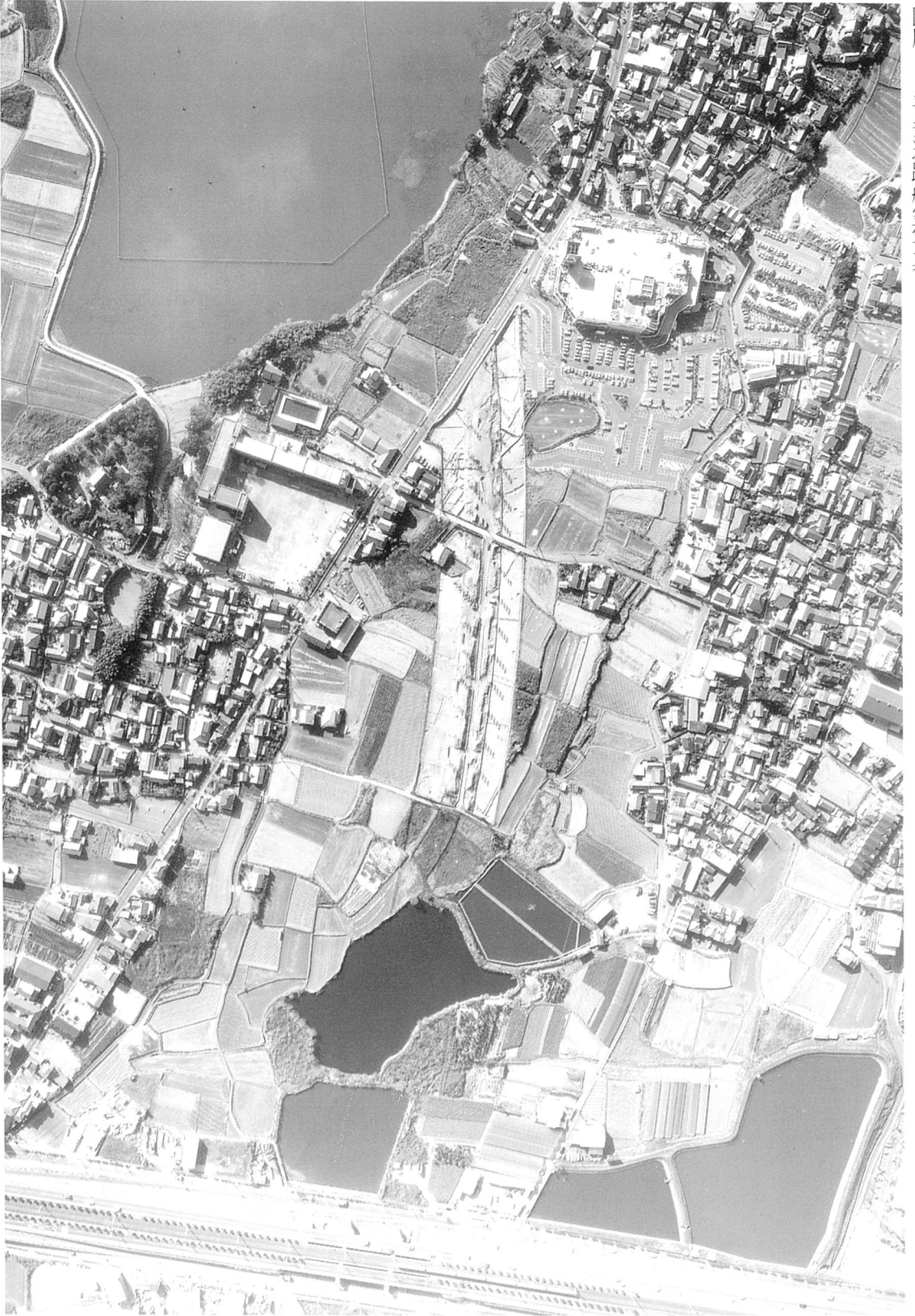
点が各試料の磁化方向である。

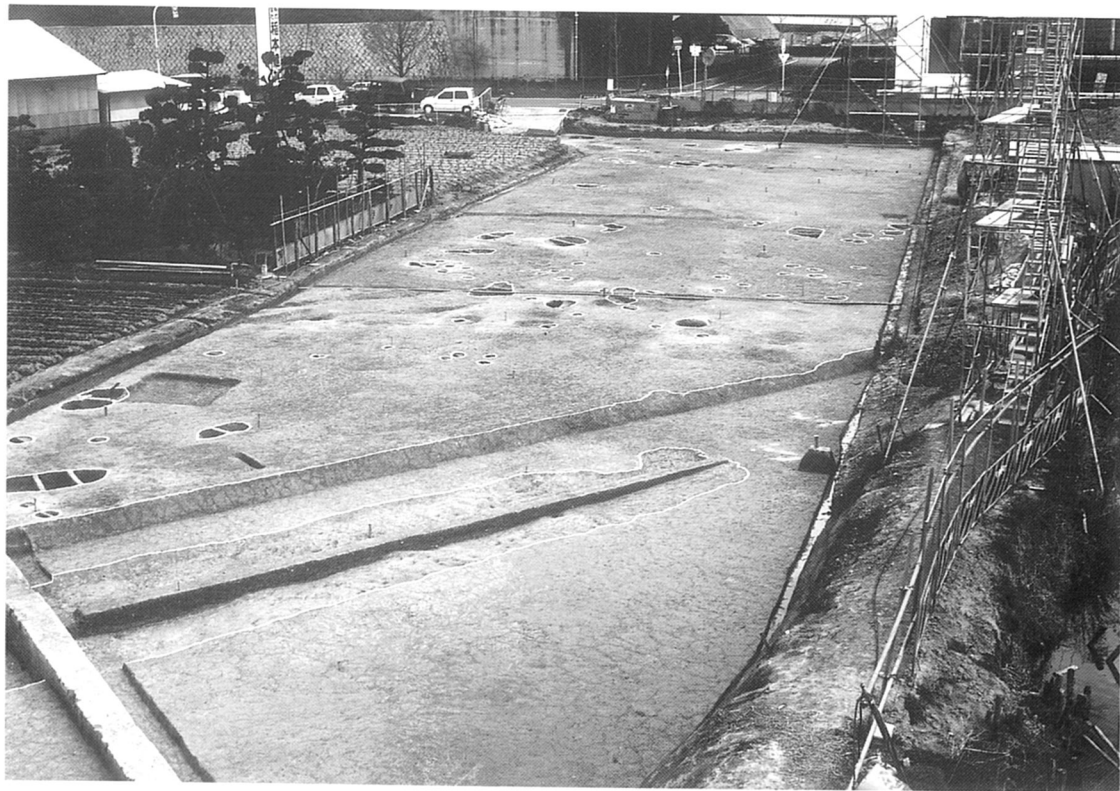
圖

版

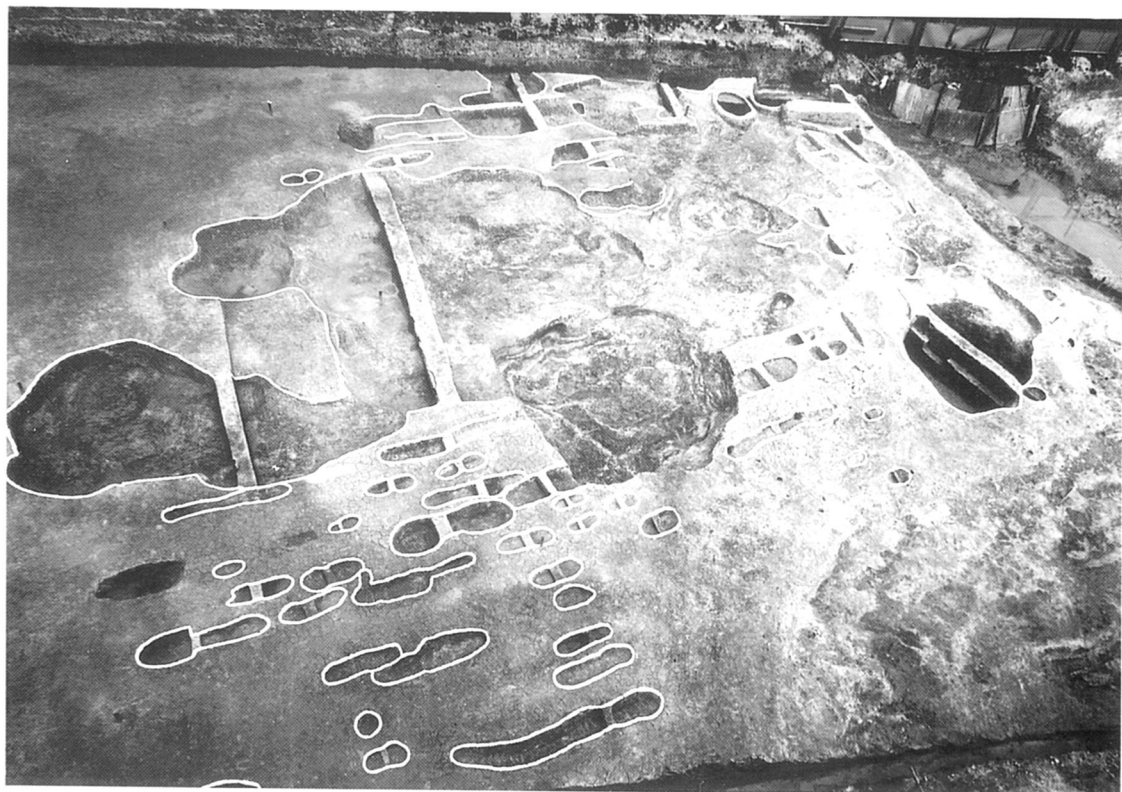
2

図版1 平井遺跡航空写真





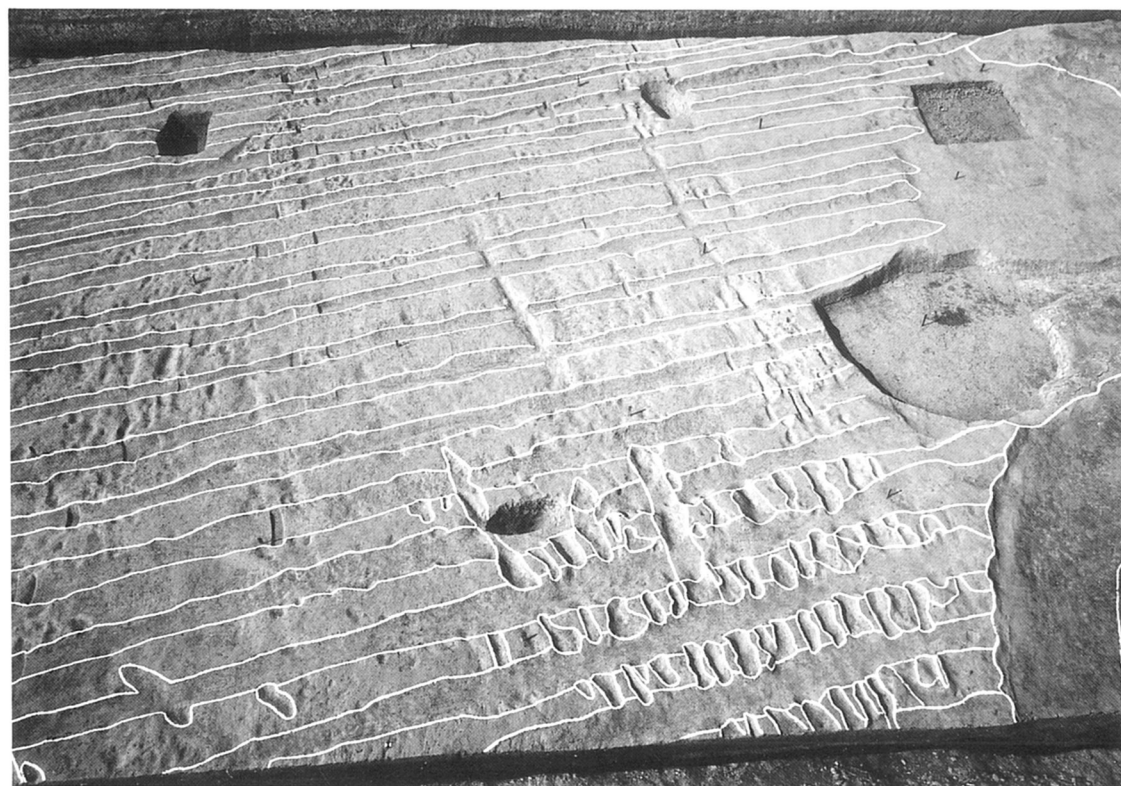
東Ⅰ～Ⅲの遺構全景（西より）



粘土採掘坑・12・74一井戸（南より）



05-0Z、畝（東より）



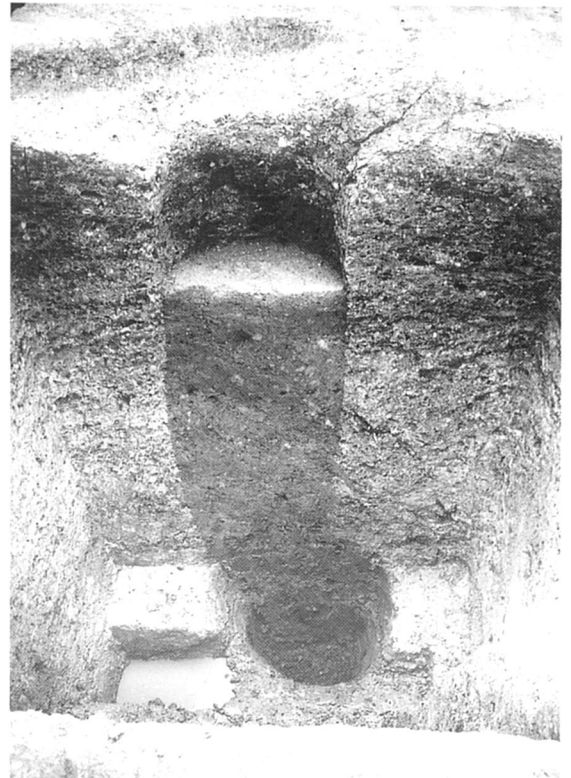
05-0Z、踏み荒しの跡（南より）



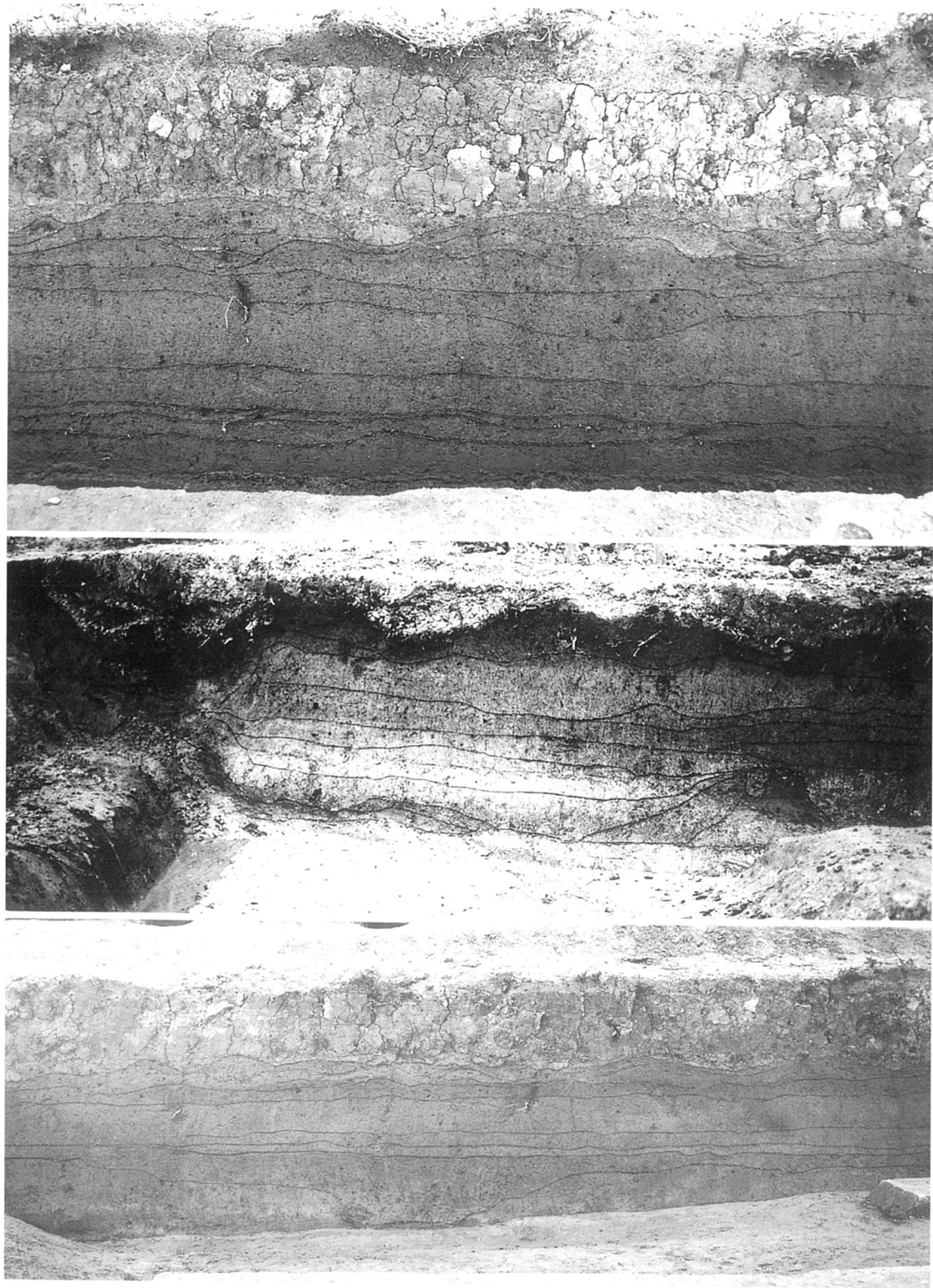
02-OW (北より)



12-OW (北より)



103-OW (南より)



土層断面 (上・05-OZ、中・06-OS、下・05-OZ)